

國學院大學文学部考古学実習報告 第29集

長野県木曾郡開田村

# 柳又遺跡 A 地点

YANAGIMATA-A SITE

第6次発掘調査報告書

1996

國學院大學文学部考古学研究室

國學院大學文學部考古学実習報告 第29集

長野県木曾郡開田村

# 柳又遺跡 A 地点

YANAGIMATA-A SITE

第 6 次発掘調査報告書

1 9 9 6

國學院大學文學部考古学研究室

**監修**

永峯光一

**構成・編集**

宮尾 亨

**本文執筆・挿図作成・写真撮影**

岩名健太郎 宇賀神菜採

及川真紀 風間春芳 片岡治子

堅木宜弘 木内裕子 菊池政幸

佐々木純 設楽政健

杉山友章 関 亨 永井伸明

野村忠司 羽山尚彦

平吹 靖 星 宏之 星 由香

宮本雅通 山田美和 和田秀一

島井宏明 宮田千里

池田比呂子 谷地亜希子

山本 克

**協力**

小俣貴一

## 序

今までに数多くの発掘を経験してきた中で、柳又遺跡の場合は、もっとも諸条件が整い、強く印象に残るものの一つといってよい。雄大な山容の御嶽山を指呼の間に望む開田高原の一角、夏はすでに去ったが秋の気配未だにといいた自然の中で、9月の10日間を過ぎたわけである。遺物は豊富で掘り甲斐があるし、寐泊りする宿舎での生活もまた楽しい。このような発掘調査に行き遇える機会は、もうなかなか廻ってこないかも知れない。

帰京してからは考古学実習室での連日の整理作業、思うような実測図を書いて来ないいらだちもあったであろう。宮尾助手の叱咤が飛んだこともある。しかし、実習生諸君は大方の期待によくこたえ、ここに報告書の上梓に漕ぎつけることができた。私は今、たいへん幸福な思いにひたっている。

本書の出版に際し、発掘調査の計画および実施には、長野県教育委員会・開田村教育委員会のご指導を得たこと、調査団の宿舎には例年通り学校法人市邨学園開田高原研修センターをお貸し頂いたことを明記して、厚く感謝の意を表するとともに、多数の関係者にお力添え蒙ったことを深くお礼申し上げたい。

なお、実習生諸君はこの報告書を手し、3月20日めでたく卒業する。社会に出るものもあれば、大学院などで勉学を続ける人もいる。共々これからますますの活躍を期待したいと思う。

1996年2月6日

永 峯 光 一



## 例 言

1. 本書は國學院大學文学部が実施した長野県木曾郡開田村柳又遺跡A地点における第6次発掘調査の報告書である。
2. 柳又遺跡A地点の地籍は、長野県木曾郡開田村大字西野6503-1番地である。今回は村上和幸氏所有の畑地36㎡を発掘調査対象とした。同時に柳又遺跡B地点の畑地(上村秀夫氏所有)で16㎡の試掘を実施した。
3. 本発掘調査は考古学演習Ⅱ(考古学実習)の一環として実施したもので、國學院大學学長春田宣が主体者となり文学部教授永峯光一が担当した。発掘調査及び報告書の作成は、文学部教授永峯光一、加藤晋平、小林達雄、吉田恵二、文学部助手宮尾亨が指導にあたり、考古学演習Ⅱ履修生(考古学実習生)56名が従事した。
4. 第6次発掘調査は、1994年9月6日から9月15日までの10日間にわたり実施した。
5. 発掘調査の計画・実施には、長野県教育委員会、開田村教育委員会より指導・協力を得た。
6. 調査団の宿舎には、学校法人市邨学園より同学園開田高原研修センターの提供を受けた。
7. 本書10頁の遺跡付近の地図は、国土地理院発行の5万分の1木曾福島の一部を転載した。
8. 発掘調査および整理作業には、多数の方々の参加・協力を得た。また、発掘調査および整理作業の過程で見学者各位より数々のご教示を賜った。御芳名を巻末に記して謝意を表する次第である。
9. 本書の挿図作成、写真撮影、ならびに本文執筆は、永峯光一・宮尾亨の指導のもと、考古学演習Ⅱ履修生(考古学実習生)池田比呂子、岩名健太郎、宇賀神菜採、及川真紀、風間春芳、片岡治子、堅木宜弘、木内裕子、菊池政幸、佐々木 純、設楽政健、島井宏明、杉山友章、関 亨、永井伸明、野村忠司、羽山尚彦、平吹 靖、星 宏之、星 由香、宮田千里、宮本雅通、谷地亜希子、山田美和、山本 克、和田秀一が分担した。各文末に執筆分担者名を明記した。
10. 本書の構成・編集は宮尾亨が行い、永峯光一が監修した。
11. 本発掘調査によって出土した遺物および記録類は、國學院大學において保管している。
12. 第1次～第5次発掘調査までの調査研究成果については下記の報告書・論文が既に刊行されている。併せて参照されたい。

小林達雄編 1990『柳又遺跡A地点 第1次発掘調査報告書』考古学実習報告第19集 國學院大學文学部考古学研究室

谷口康浩 1991「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」『國學院雑誌』第92巻第2号 21～51頁 國學院大學

小林達雄・谷口康浩編 1992『柳又遺跡A地点 第2次発掘調査報告書』考古学実習報告第21集 國學院大學文学部考古学研究室

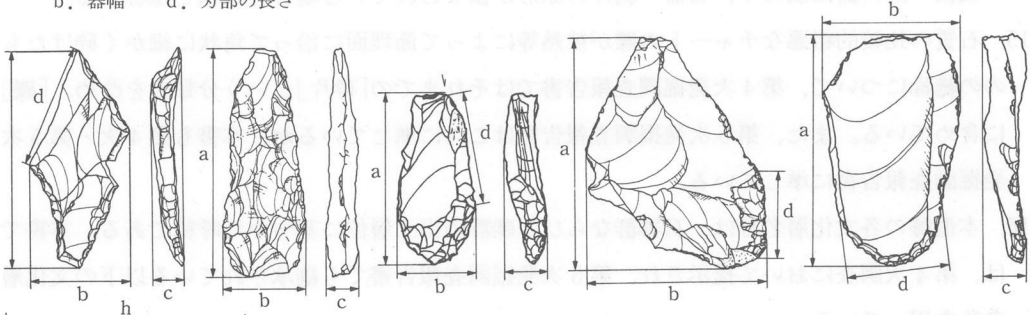
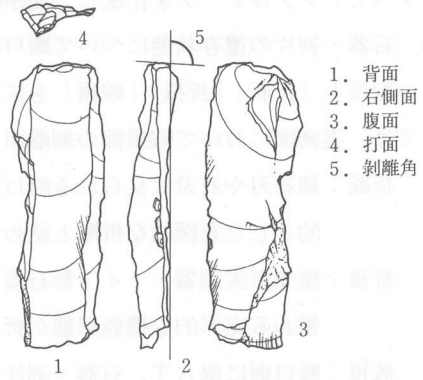
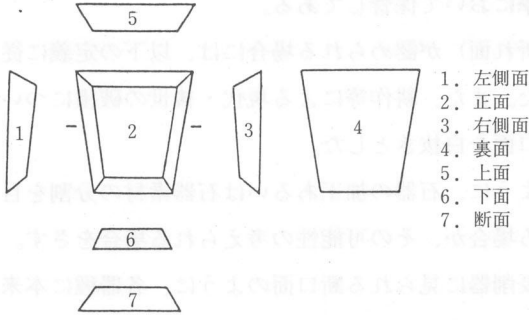
- 谷口康浩 1992「開田高原柳又遺跡A地点の発掘調査」『第5回 長野県旧石器文化研究交流会—発表要旨—』 47～57頁
- 永峯光一・谷口康浩編 1993『柳又遺跡A地点 第3次発掘調査報告書』考古学実習報告第23集 國學院大學文学部考古学研究室
- 谷口康浩・宮尾亨編 1995『柳又遺跡A地点 第4次発掘調査報告書』考古学実習報告第26集 國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄・宮尾亨編 1996『柳又遺跡A地点 第5次発掘調査報告書』考古学実習報告第28集 國學院大學文学部考古学研究室

## 凡 例

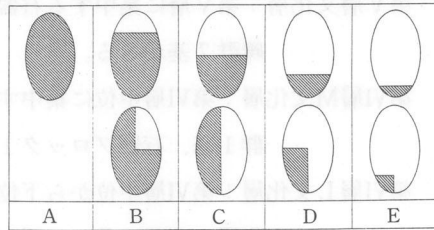
1. 石器の実測図は原則として第三角投影図法に拠った。
2. 石器の各部位の名称と計測基準、石器・礫の分類基準は次々頁に図示した通りである。
3. 図化可能な土器と器種認定された石器は実測図を掲載し、本書では時代別に通し番号を付してある。本文中および表にある番号は、この通し番号である。
4. 土器実測には、通し番号に続けて出土グリット・出土層位、ならびに個体番号を記した。
5. 石器実測図には、通し番号に続けて石質と出土グリット・出土層位を記した。石質は次の通りである。an：安山岩 ch：チャート gla：玻璃質安山岩 ob：黒曜石 san：砂岩
6. 母岩別資料の分類は、遺跡の部分的な調査の過程で行うには限界があり、本遺跡の調査完了後に資料全体を通して見直す必要があるが、当面は掲載した母岩別資料について文化層毎に通し番号で記す。
7. 母岩別資料の掲載石器実測図には、各母岩別資料別に通し番号を付してある。
8. 本報告書に掲載した石器実測図の縮尺は、剥片石器3/4、礫石器1/3に統一してある。
9. 本報告書に掲載した挿図は、各文化層毎に石器分布図、遺構分布図、石器実測図、母岩別資料実測図、母岩別資料分布図の順になっている。詳しくは挿図目次を参照されたい。
10. 分布図の掲載縮尺は書面の都合上各図によって任意となっており、主な縮尺に1/40、1/80がある。挿図目次ならびに各図を参照されたい。
11. 垂直分布図における基準標高は、A地点で1122.000mと1123.000mを、B地点で1115.000mを用いている。また、発掘調査区域の層序の提示では、基準標高にA地点で1123.400mと1123.900mを、B地点で1116.000mを用いている。注意されたい。
12. 石器計測表・土器観察表は、巻末73～75頁にまとめて掲載してある。詳しくは表目次を参照されたい。

13. 石器計測表は石器実測図を掲載したものに限り、第1次～第6次発掘調査資料はすべてデジタルデータを作成し、國學院大學において保管してある。
14. 石器・剥片の遺存状態について断口面（折れ面）が認められる場合には、以下の定義に従い記述上「折断」「折損」「破損」を区別した。また、耕作等による現代・後世の破損については、実測図において破損部の剝離面・断口面を白抜きとした。
- 折断：細石刃や石刃に見られる断口面のように、石器の加工あるいは石器素材の分割を目的とした意図的な折断と認められる場合か、その可能性の考えられる場合をさす。
- 折損：槍先形尖頭器・ナイフ形石器・縦長削器に見られる断口面のように、各器種に本来備わる定形的な機能形態が折れによって損なわれている場合をさす。
- 破損：断口面に限らず、石器・剥片の原形が損なわれている場合を破損と総称する。
15. 石質の比較的粗悪なチャートの礫が被熱等によって節理面に沿って角状に細かく砕けたものの総称について、第4次発掘調査報告書ではそれまでの「碎片」という分類名を改め、「礫」に含めている。また、第5次発掘調査報告書はこれに準じているが、本書も第4次・第5次発掘調査報告書に準じている。
16. 本遺跡の各文化層名称は、石器群ならびに礫群の出土層位に基づいた呼称である。本書では、第4次調査において提示され、第5次発掘調査報告書でも継承されている以下の文化層名称を用いている。
- 第V層文化層：第V層に集中する石器群ならびに礫群や配石。細石刃の文化層。配石2基、礫群7基がある。
- 第VI層M文化層：第VI層中位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群1基、石器ブロック1ヶ所がある。
- 第VI層L文化層：第VI層中位から下位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群1基、石器ブロック1ヶ所がある。
- 第VII層文化層：第VII層上位に集中する石器群ならびに礫群。ナイフ形石器の文化層。礫群2基、石器ブロック2ヶ所がある。
17. 各文化層における石器群の平面的分布の視覚的なまとまりは、第4次発掘調査報告書でそれまでの「石器ユニット」の用語を「石器ブロック」に改め、第5次発掘調査報告書もそれに準じている。本書も第4次・第5次発掘調査報告書に準じているが、第6次発掘調査では、いずれの文化層においても石器ブロックは把握されていない。
18. 引用参考文献は76～81頁に掲載した。
19. 発掘調査参加者・関係者一覧は82頁に記載した。

石器各器種の各部名称・計測部位



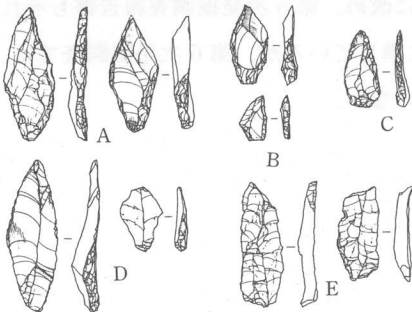
礫群構成礫の遺存状態



- A: 完形
- B: 全体の3/4以上を残す破砕礫
- C: 全体の約1/2を残す破砕礫
- D: 全体の1/4を残す破砕礫
- E: 小部分の破片

(永峯・谷口編 1993)

ナイフ形石器の形態分類



- A: 鋭い先端をもち、二側縁に調整を加えたナイフ形石器。石刃を素材とし、折断技法によって素材の形状を大きく変形している。素材の打面は除去される。
- B: 剥片を素材とし、二側縁調整によって切出形に整形されたナイフ形石器。小形のものが多い。
- C: 石刃を素材とし、一側縁に調整を加えたナイフ形石器。素材の形状をほとんど変形せず、打面も残置する。
- D: 石刃・縦長剥片を素材とし、その打点側を基部として、基部両側縁の腹面側に調整を加えた基部調整ナイフ形石器。素材の形状を大きく変形せず、打面を残置することがある。
- E: 石刃を素材とし、先端を斜めに折断するように急斜度の調整を加えた部分調整ナイフ形石器。

(小林・谷口編 1992)

# 目 次

第 I 章 発掘調査の目的と経過	1
第 1 節 発掘調査に至る経緯	1
(1) 発掘調査の目的	1
(2) 第 1 次発掘調査	3
(3) 第 2 次発掘調査	4
(4) 第 3 次発掘調査	5
(5) 第 4 次発掘調査	6
(6) 第 5 次発掘調査	6
第 2 節 第 6 次発掘調査の経過	7
(1) 第 6 次調査の方針と経過	7
(2) 整理作業の経過	9
第 II 章 開田高原と柳又遺跡	11
第 1 節 柳又遺跡の位置と地理的環境	11
(1) 地形と柳又遺跡の位置	11
(2) 開田高原の地質	14
(3) 開田村の遺跡と柳又遺跡群	16
(4) 柳又遺跡の位置と長野県の遺跡	17
第 2 節 第 6 次発掘調査	24
(1) 発掘調査区域の設定	24
(2) 基本層序	26
(3) 調査区層序と遺跡の地形	28
(4) B 地点試掘調査区の設定	29
(5) B 地点試掘調査区層序と遺跡の地形	29
第 III 章 縄文時代の遺物	31
第 1 節 概要	31
第 2 節 遺物の分布と層位	31
第 3 節 石器	34
第 4 節 土器	35
(1) 第 1 群土器	35
(2) 第 2 群土器	36

第IV章 旧石器時代 .....	43
第1節 概要 .....	43
第2節 石器の分布と層位 .....	44
第3節 第V層文化層の石器 .....	48
第4節 第VI層L文化層の石器 .....	54
(1) 石器 .....	56
(2) 母岩別資料8 .....	56
第5節 第VIII層文化層の石器 .....	63
第V章 B地点試掘と表面採集資料 .....	65
第1節 概要 .....	65
第2節 縄文時代の石器 .....	65
第3節 旧石器時代の石器 .....	66
第4節 表面採集資料 .....	69
第5節 上村秀夫氏寄贈の有舌尖頭器 .....	71
引用参考文献 .....	76
発掘調査参加者・関係者一覧 .....	82

## 挿図目次

第1図	柳又遺跡群の位置(1/50000) .....	10
第2図	長野県の地形と本書に関連する遺跡(1/1000000) .....	18
第3図	野尻湖周辺の遺跡(1/50000) .....	19
第4図	遺跡周辺と発掘調査区域(1/1600) .....	23
第5図	遺跡の基本層序(1/20) .....	24
第6図	発掘調査区と調査深度 .....	25
第7図	発掘調査区の層序(1)(1/40) .....	27
第8図	発掘調査区の層序(2)(1/40) .....	28
第9図	B地点試掘調査区の層序(1/40) .....	30
第10図	縄文時代の石器と土器 分布状態(1/80) .....	33
第11図	縄文時代の石器 石鏃(1/1) .....	34
第12図	縄文土器(1)第1群土器(1/1) .....	36
第13図	縄文土器(2)第2群土器(1/1) .....	38
第14図	縄文土器(3)第2群土器(1/1) .....	39
第15図	礫の重量・被熱状態(1/80) .....	44
第16図	旧石器時代の石器 器種別分布状態(1/80) .....	45
第17図	旧石器時代の石器 石材別分布状態(1/80) .....	46
第18図	第V層文化層の石器(1)細石刃石核・抉入石器・細部調整剥片・石刃(3/4) .....	50
第19図	第V層文化層の石器(2)細部調整剥片・微細剝離痕付剥片(3/4) .....	51
第20図	第V層文化層の石器(3)敲石(1/2) .....	52
第21図	第V層文化層の石器(4)敲石(1/2) .....	53
第22図	第VI層L文化層の石器 削器・石核(3/4) .....	55
第23図	第VI層L文化層母岩別資料8(1)ナイフ形石器碎片(3/4) .....	56
第24図	第VI層L文化層母岩別資料8(2)ナイフ形石器再調整過程(3/4) .....	58
第25図	第IV層L文化層母岩別資料8(3)(3/4) .....	59
第26図	第IV層L文化層母岩別資料8(4)(3/4) .....	60
第27図	母岩別資料8：分布図(1/80) .....	61
第28図	第VIII層文化層の石器(1)敲石(1/2) .....	62
第29図	第VIII層文化層の石器(2)台石(1/2) .....	63
第30図	B地点 縄文時代の石器(3/4) .....	66
第31図	礫の重量・被熱状態(1/80) .....	67

第32図	B地点	石器器種別分布状態(1/80)	67
第33図	B地点	石器石材別分布状態(1/80)	67
第34図	B地点	旧石器時代の石器：細石刃・細部調整剥片・石刃(3/4)	68
第35図	B地点	表面採集資料(3/4)	70
第36図	上村秀夫氏寄贈の有舌尖頭器(1/1)と採集地点(1/25000)		72

## 表目次

表 1	開田村の遺跡	12・13
表 2	表裏縄文系土器出土の遺跡	22
表 3	縄文時代の石器	73
表 4	縄文時代の土器	73
表 5	旧石器時代の石器	74
表 6	第VI層L文化層の母岩別資料	75

## 写真図版目次

図版 1	1. 開田高原の地形(御嶽山眺望台より)
図版 2	2. 遺跡の現状(南から) 3. 遺跡の現状(北から)
図版 3	4. 調査区の層序(東から) 5. 調査区の層序(西から) 6. 調査区の層序(南から) 7. 調査区の層序(北から)
図版 4	8. 発掘調査風景 9. 発掘調査風景 10. 発掘調査風景
図版 5	11. 発掘調査風景 12. 発掘調査風景 13. 発掘調査風景
図版 6	14. 遺物出土状態 第III層(南から)



- 図版 6** 15. 発掘調査風景  
 16. 発掘調査風景
- 図版 7** 17. 遺物出土状態 第III層 (東から)  
 18. 発掘調査風景  
 19. 発掘調査風景
- 図版 8** 20. 遺物出土状態 第V層 (南から)  
 21. 細石刃石核の出土状態
- 図版 9** 22. 遺物出土状態 第V層 (東から)  
 23. 発掘調査風景  
 24. 発掘調査風景
- 図版 10** 25. V-16区 遺物出土状態 第VIII層文化層 (北から)  
 26. V-16区 層序 (北から)
- 図版 11** 27. 調査終了 (東から)  
 28. 発掘調査風景  
 29. 発掘調査風景
- 図版 12** 30. 調査終了 (南から)  
 31. 発掘調査風景  
 32. 発掘調査風景
- 図版 13** 33. 縄文土器一括
- 図版 14** 34. 縄文時代 石鏃  
 35. 縄文時代 第1群土器 個体A 個体B
- 図版 15** 36. 縄文時代 第2群土器 個体C 個体D
- 図版 16** 37. 縄文時代 第2群土器 個体E
- 図版 17** 38. 縄文時代 第2群土器 個体F 個体G 個体H
- 図版 18** 39. 個体A 胴部内面整形痕  
 40. 個体C 口縁部接合破片の異なる器厚  
 41. 個体D 口縁部外面と胴部内面の付着物  
 42. 個体H 胴部外面の付着物
- 図版 19** 43. 個体D 胴部内面の指頭圧痕  
 44. 個体H 胴部内面の輪積み痕  
 45. 個体E 胴部破片の擬口縁と胴部外面の輪積み痕
- 図版 20** 46. 第V層文化層 細石刃石核
- 図版 21** 47. 第V層文化層 抉入石器・細部調整剥片・石刃・微細剥離痕付剥片

- 図版22 48. 第V層文化層 敲石
- 図版23 49. 第VI層L文化層 削器・石核・ナイフ形石器  
50. 第VI層L文化層 母岩別資料8 (ナイフ形石器)
- 図版24 51. 第VI層L文化層 母岩別資料8  
52. 第VI層L文化層 母岩別資料8 (接合資料)
- 図版25 53. 第VIII層文化層 敲石・台石
- 図版26 54. A地点よりB地点を望む  
55. 発掘調査風景  
56. 発掘調査風景
- 図版27 57. B地点 遺物出土状態 (西南から)  
58. 発掘調査風景  
59. 発掘調査風景
- 図版28 60. B地点 調査区の層序 (西南から)  
61. 発掘調査風景  
62. 発掘調査風景
- 図版29 63. B地点 調査終了 (南から)  
64. B地点 調査終了 (西から)
- 図版30 65. B地点より御嶽山を望む (北西から)  
66. 発掘調査風景  
67. 発掘調査風景
- 図版31 68. B地点 細石刃・細部調整剥片・石刃  
69. B地点 有舌尖頭器  
70. 上村秀夫氏寄贈の有舌尖頭器
- 図版32 71. B地点 表面採集資料

# 第 I 章 発掘調査の目的と経過

## 第 1 節 発掘調査に至る経緯

### (1) 発掘調査の目的

國學院大學文学部考古学研究室では、考古学実習の一環として1979年度から毎年度学術調査を実施している。これまでに新潟県中魚沼郡中里村壬遺跡をはじめ、山形県長井市北堂C遺跡、千葉県富津市森山塚古墳、東京都三宅島物見処遺跡の調査を行っている。1987年度からは調査地の一つを長野県木曾開田高原に求め、小馬背遺跡、西又遺跡の発掘調査を行った。そして、1989年度から柳又遺跡A地点の発掘調査を継続して行なっている。本調査の前年1993年度の第5次調査では、A地点の西方AⅡ地点とされた部分の一部で試掘を行ない、包含層が遺存することを確認し、同地点をD地点と命名した。これら一連の調査は、開田高原における旧石器文化ならびに縄文草創期文化の様相とその変遷等の解明を目的としたものである。

木曾御岳山の北東麓に位置する開田高原には、柳又遺跡群をはじめ、旧石器文化および縄文草創期文化を中心とする数多くの遺跡が残されている。文献としては、松村瞭が1911年に人類学雑誌27-6に紹介した開田村菅沢付近採集の石鏃の紹介記事が最も古いものであろう。発掘調査は1955年に藤沢宗平ほか信州ローム研究会による古屋敷遺跡からである。この調査で発見された大形の槍先形尖頭器等を主体とする石器文化は、「信州ローム」誌上に報告され、旧石器文化と縄文文化起源の研究フィールドとして重視されることとなった。これに続き1959年から1962年にかけて、柳又遺跡調査会による柳又遺跡A・B地点の発掘調査が行われ、細石刃やナイフ形石器を伴う複数の旧石器文化とともに、「柳又ポイント」の通称で知られる有舌尖頭器が発見され、旧石器文化から縄文文化への移行過程の様相解明に一翼を担った。その後1968・1969年にかけて木曾教育会によって実施された小馬背・西又遺跡の発掘調査では、隆起線文土器に伴い、有舌尖頭器、槍先形尖頭器、片刃打製石斧等の縄文時代草創期前半の石器群が発見され、該期の研究に資料を提供している。

本学考古学研究室では、開田高原における考古学的調査を継続して行う方1987年4月に遺跡の分布と現状を把握するための予備的な踏査が行ない、その最初の調査地として開田村西野2623番地に所在する小馬背遺跡を選定した。しかしながら、2年次にわたる調査の結果、遺物包含層は既に耕作によって大きな攪乱を受け、遺跡の遺存状態が壊滅的であることが判明した。また、並行して調査を進めていた西又遺跡でも同様の現状が確認され、この両遺跡の調査は1988年度をもって一応の区切りがつけられることとなった。一方、柳又遺跡については、この一帯は既に1979年の御岳山噴火降灰罹災に伴う土地改良工事や耕作等によって湮滅したものと考

## 第 I 章 発掘調査の目的と経過

られていたが、小馬背遺跡の第 2 次調査と並行して行われた周辺遺跡の踏査の際に、柳又遺跡 A 地点の村上和幸氏所有の畑地に旧石器時代を中心とする遺物が散乱していることが発見され、それらが最近の深耕によるものであることが判明したため、急遽同地点の試掘調査を行った。その結果、旧石器時代の遺物包含層は大きな攪乱を受けず保存されていることが判明し、同地点を新たな調査対象地点とする方針が定められた。

1989年に実施した第 1 次発掘調査では、旧石器時代の遺物包含層の遺存状態と基本層序を確認するとともに、細石刃を主体とする第 V 層文化層とナイフ形石器を伴う第 VI 層文化層の 2 面の文化層を検出するなどの成果を得た。続く 1990年の第 2 次発掘調査では、第 V 層文化層において礫群・配石各 1 基が検出され、それに付随する 2 箇所の石器ブロックを確認した。第 VI 層文化層でも礫群 1 基とそれを中心に分布する石器ブロックが確認され、石器組成や剥片剥離技術等に関して良好な資料を得た。1991年の第 3 次発掘調査では、第 V 層文化層において第 2 次調査で検出した礫群が予想以上の広がりをもせており、合計 7 基の礫群が列状に配置された構造であることが判明した。また新たに配石 1 基を確認し、その周辺などから比較的まとまった石器群が検出された。1992年の第 4 次発掘調査では、第 VI 層中部に新たに第 VI 層 M 文化層を検出し、第 VI 層中部から下部に位置する従来の第 VI 層文化層を第 VI 層 L 文化層として捉え直した。加えて第 VII 層文化層も確認し、礫群 2 基と 3 箇所の石器ブロックが検出されるとともに、第 VIII 層以下が無遺物層であることが確認された。1993年の第 5 次発掘調査では、第 4 次調査区の北に調査区を設定して、第 4 次調査で確認された第 VII 層文化層の北側へのひろがり把握した。また、その東側にあたる V-16 区に試掘区を設定し、層位の遺存状態や東側へのひろがりを確認した結果、多くの部分で削剝されていた第 V 層より上位の層位が良好に遺存すること、第 II 層中から土器破片が出土することを確認した。この V-16 区における試掘の成果は、本書で一括して提示する方針がとられ、第 5 次調査報告（小林・宮尾編 1996）には掲載していない。第 5 次調査では、同時に従来 A II 地点と呼称されていた地点の一部で試掘を行い、A 地点の基本層序第 VI 層に相当する層位からナイフ形石器等を発見し、包含層の遺存が確認された。なお、試掘を実施した地点は D 地点と呼称することにした。

今回の第 6 次発掘調査では、第 5 次調査の際に試掘した V-16 区を含む遺跡北東部に調査区を設定し、同地区での各文化層のひろがり、特にこれまで安定して確認されることのなかった第 V 層より上位の層位に包含される遺物を確認することを主な目的として調査計画が練られることとなった。また、第 5 次調査に続いて、周辺遺跡の遺存状況を把握することを目的の一つに挙げ、B 地点の一部を試掘することを予定した。1994年 6 月 23 日から 6 月 26 日、本学永峯光一教授と宮尾亨助手が現地に出張し、発掘地点の選定と調査期間等について、関係諸機関ならびに A 地点地主村上和幸氏との間で協議を行い、同年 9 月 6 日から 9 月 15 日までの 10 日間と決定した。

## 第1節 発掘調査に至る経緯

なお、本遺跡の発掘調査にあたっては、長野県教育委員会ならびに開田村教育委員会より御指導と御協力をいただいている。A地点の地主である村上和幸氏、ならびにB地点の地主である上村秀夫氏には調査の趣旨を御理解いただき、本年度の発掘調査を快諾していただいた。学校法人市邨学園理事長末岡熙章先生（73期院友）には、同学園開田高原研修センターを調査団の宿舎として提供していただいているばかりでなく様々な援助をしていただいた。嶽見旅館・たけみ商店には、調査団の食事、宿舎から調査地点までの移動等で御世話いただき、多大な御協力を頂戴している。また、神村透先生・桐原健先生・樋口昇一先生をはじめ、激励に遠路御来駕いただいた見学者各位にもさまざまな御支援をいただいた。このたび本書を上梓するにあたり、改めて謝意を表する次第である。（関）

### (2) 第1次調査の概要

1989年9月に実施された小馬背遺跡第2次調査の際に、柳又遺跡A地点において旧石器を含む石器の散布が認められたため、9月8日～12日に急遽同地点の現状を把握するための試掘調査が行われた。試掘調査の結果、上層部には攪乱が及んでいたものの、第V層以下の旧石器時代の遺物包含層は保存されていることが確認されたため、翌1989年8月27日～9月5日の十日間、柳又遺跡A地点の第1次発掘調査が実施された。発掘区域は1959年から62年にかけて樋口昇一・森嶋稔らが調査を行ったA I地点の東側の隣接地にあたる。調査区を1グリット2×2mとして計23グリットを設定した。グリットの名称は東から西へA・B列、南から北へA列5～16区・B列6～16区とし、その北側に位置するA-22区で地層の確認を行った。A-22区では旧地形が埋没谷状に落ち込み、耕作による攪乱を受けていないことが判明し、基本層序と層位名称を確定した。調査区は合計24グリット、調査面積は96㎡である。

発掘調査の結果、旧石器時代の2面の文化層が確認された。それらはそれぞれ細石刃を主体とする第V層文化層・ナイフ形石器を主体とする第VI層上部文化層として把握された。

第V層文化層は細石刃を主体とし細石刃75点・細石刃石核2点・同原形2点・同打面形成剥片3点、他に器種として搔器・削器・細部調整剥片・石刃等が共伴することが確認され、主体となる細石刃はA・B-9・10区に集中して分布し、細石刃関係資料は特に西側のB列側に偏る傾向が窺われた。

第VI層文化層はナイフ形石器30点をはじめ、槍先形尖頭器・彫器・搔器・削器・細部調整剥片・石刃・石核・敲石等が出土した。それらに伴い、A・B-11～13区に中心をもつ礫群が検出され、剥片・破片類がそれらに付随するようにA・B-13・14区付近に集中する様相が明らかとなった。しかし、日程の都合から第VI層上層部の層位で調査を中断せざるを得ずに終わり第一次調査では第VI層上部文化層は不明確な状態であった。

またA-22区では第III層中から19点の縄文土器が出土したが、第IV層以下からは遺物が検出されず、旧石器時代の遺構・遺物はA・B-15・16区付近を境として地形の傾斜する北側には

分布していないことが確認された。なお、縄文時代の遺物包含層は広い範囲で攪乱を受け遺存していないが、耕作土の第I層中から有舌尖頭器9点、石鏃3点、石匙1点が得られ、A-5区では縄文時代草創期のものと推定される土坑が1基検出された。

### (3) 第2次調査の概要

第V層文化層における遺物分布状況と石器器種組成の把握とA・B-10~14区において検出された礫群および石器群のブロックの全容解明、第V層以下における文化層の有無の確認の3点を調査目的とする第2次発掘調査は、1990年9月8日~17日の10日間にわたり実施された。27グリット合計108㎡を調査区域としたが、日程と天候条件から第VII層以下の層位の調査には至らなかった。この調査では新たに第VI層文化層の存在が確認された。

第V層文化層の石器群には、細石刃90点、細石刃石核4点、同原形1点、同打面形成削片3点、稜付削片3点が新たに加わり、細石刃の形態学的特徴や細石刃の剥離技術とその工程が明確になった。本遺跡の第V層文化層にみられる細石刃剥離技術は、削片系の楔形細石刃石核を特徴とし、湧別技法と共通する技術工程的特質をもち、北方系細石刃文化との関連性を示す一方で、製作工程に定型的な削片の剥離を伴わない独特な楔形細石刃石核が存在する。加えて、細石刃の石材に玻璃質安山岩を多用する点に独自の様相を見せる。また、細石刃に共伴する石器群の器種組成がより詳細に把握され、搔器7点、削器5点、細部調整剥片21点、石刃20点、石刃状剥片5点、礫器3点、打製石斧1点の存在が明らかとなったが、細石刃の製作技術に湧別技法に代表される北方系細石刃剥離技術との系統的な繋がりが認められながら、器種組成上で荒屋型彫器が欠落している点に注意される。その他に両面調整の槍先形尖頭器1点が当該文化層に共伴するものと判断された。さらにこれらの石器群に伴う遺構として礫群・配石各1基が検出され、それぞれに付随して大きく2箇所 of 石器ブロックが形成されていることが明らかとなった。特に配石周辺では、細石刃とその関係資料が多数出土し、配石と細石刃製作とに何らかの関係が示唆された。細石刃文化に礫群や配石が共伴した例は全国的にも30数例にすぎず貴重な資料を提供するものである。

第VI層上部文化層は、遺物集中のピークが第VI層上部ではなく第VI層中位ないし下部に位置することが判明し、当該石器群を改めて「第VI層文化層」として捉え直した。検出された石器ブロックは、A・B-11・12区を中心として直径約4mの円形を呈する。遺物の総数はA・B-10~14区で、石器51点、剥片498点、礫1145点の合計1694点である。器種別にみると、ナイフ形石器13点、槍先形尖頭器2点、彫器2点、搔器2点、削器1点、鋸歯状石器1点、揉錐器1点、細部調整剥片6点、石刃11点、石核10点、敲石2点となり、ナイフ形石器を主体とする石器群であることには変わりはない。石刃を素材とした二側縁調整・部分調整を形態的な特徴とする。石器ブロックの中央に位置する礫群は、1084個の礫から構成され、直径約6mの不整楕円形を呈する。石器ブロックは、礫群の北側にあたるA・B-13・14区を中心に特に分布し、礫群を

挟んで対向する位置に存在する石核と剥片の接合が認められた。石核や敲石は特に礫群の周辺に集中し、礫群の周囲で剥片生産や石器製作が行われていた状況を把握できた。

#### (4) 第3次調査の概要

第3次調査はV～Y-11区において検出された第1号礫群とその礫群に付随して細石刃および完形資料を含む石器ブロックの平面的な広がり把握し、第V層文化層における遺構と遺物の分布状況、およびその石器組成と細石刃剥離技術の実態をさらに詳しく究明することを主たる目的として、1991年8月27日～9月5日の10日間にわたり実施された。調査区域として遺物の広がり予想された礫群の南側に新たに30グリット、合計120㎡が設けられた。

第IV層文化層に帰属する石器群には槍先形尖頭器1点、彫器5点、搔器2点、削器4点、細部調整剥片2点、石刃・石刃状剥片9点等、合計26点の石器がある。そして、石器石材に開田高原を含む長野県南西部に大きな原産地のない珪質頁岩を多用する特徴がある。珪質頁岩は、開田高原の旧石器時代や縄文時代の各遺跡では、あまり見られない石材である。この珪質頁岩を用いた石器製作技術には、大形石刃を折断技法によって二ないし三分割し、それらを素材として定型的な彫器を作り出すと同時に、同様の素材によって縦型削器や搔器をも製作する整った石刃技法が窺える。石器組成のうえでもこのような定型的な彫器は高い割合で存在し、当該文化層の特徴となっている。現在までにこのような石器群の類例は、長野県西南部を含む中部地方南部では見い出せない。石器製作技術からみる限り、北海道樽岸遺跡の石器群に類似するが編年的・系統的な位置づけは今後の研究課題の一つである。さらにこの第IV層文化層に前後する第V層文化層の北方系削片系細石刃文化や、いわゆる神子柴・長者久保文化、有舌尖頭器文化との関連は、旧石器時代最終末期から縄文時代草創期にかけての石器文化の系統・編年研究に重要な資料を提供するものである。

第V層文化層に関しては、第1号礫群の全体的構造と石器ブロックの平面的な広がり把握が一目的であったが、遺物・遺構の広がり予想以上であることが明らかとなった。V～Y-7～11区で7基の単位礫群が列状に確認された。また、V・W-5・6区では第2号配石と細石刃関連資料が検出され、配石と細石刃生産との関連性が第2次調査に続いて示唆された。調査全体では細石刃関係資料134点を新たに加えて合計313点となっている。特に削片系楔形細石刃石核とその関係資料は、両面調整技術による細石刃石核素材や細石刃石核原形等に加え、その製作工程の全容を明らかにする資料を得た。それらの多くは玻璃質安山岩製である。同時に行った統計的検討によって、黒曜石製の細石刃に対して玻璃質安山岩製の細石刃は長幅比が小さく、幅広であることが判明した。細石刃に共伴する器種には搔器4点、削器9点、彫器1点、細部調整剥片35点、槍先形尖頭器4点、石刃14点、石刃状剥片8点、礫器1点等があり、また槍先形尖頭器の資料増加と彫器の存在が注意される。しかし出土した彫器1点は形態や石材の点から判断して荒屋型彫器とは異なり、また彫器の器種組成に占める割合がきわめて低いこと

も改めて確認された。

#### (5) 第 4 次調査概要

A・B-11・12区を中心に広がる第VI層文化層の石器ブロックおよび礫群の全容解明と第VII層以下の文化層の確認を目的に第4次調査は1992年8月27日～9月6日の11日間にわたり実施された。調査区はA～C・Z-10～14区の20グリット、合計80㎡である。

調査深度は初めて第VII層以下に及び、一部第X層上部まで掘り下げられた。第VI層以下が未調査であったC-12・13区の第VI層中部において礫群1基と石器ブロック1箇所が新たに検出され第VI層M文化層と呼称することとなり、さらに第VI層中部から下部に位置し、従来第VI層文化層と呼称していた文化層を第VI層L文化層と改称した。また、第VII層上部において新たに礫群2基と石器ブロック3箇所が把握され、第VII層文化層と命名した。なお、第VII層下部以下からは遺構・遺物が検出されていない。この第4次調査において柳又遺跡A地点における縄文時代草創期から旧石器時代第VII層文化層までの編年が、層位的出土に基づいて提示された。なお、第4次調査によって新たに発見された文化層の概要は以下のとおりである。

第VI層M文化層はナイフ形石器1点、石刃3点、細部調整石刃1点、剥片12点の石器群で構成される石器ブロック1ヶ所に57点の礫で構成され、小規模な礫群が伴っている。

第VII層文化層は、ナイフ形石器11点、彫器削器1点、搔器3点、細部調整剥片18点、楔形石器2点、石刃・石刃状剥片23点、石核・石核素材11点、敲石1点、剥片・碎片567点等の石器群で構成される。C-10区を中心とする石器ブロック1、C-14区を中心とする石器ブロック2、C-12区を中心とする石器ブロック3の3ヶ所の石器ブロックと、C-10区を中心とする構成礫287点の第1号礫群、C-14区を中心とする構成礫144点の第2号礫群の2基の礫群がある。

ナイフ形石器を主体とする文化層であるが、同じナイフ形石器を主体とする第VI層L文化層のように槍先形尖頭器は組成していない。ナイフ形石器は玻璃質安山岩製の小形な不定形の剥片素材の鋭利な縁辺を刃部として残し、二側縁加工によって切出形に調整したものが主体である。石刃生産における剥片剝離は、単設打面石核を用い、作業面を固定して徐々に打点を打面奥へと後退させていく点に特徴があり、一定の長さの石刃・石刃状剥片が意識されている。また、石器石材はチャートを主体とするが、玻璃質安山岩が第VI層L文化層以降には見られないような高い割合で消費され、逆に第VI層M文化層や第VI層L文化層に比べて黒曜石の利用頻度が低いという傾向が見られた。以上の特徴から、本文化層は近接するC地点の第V層文化層に該当するものと推測され、南関東の武蔵野台地での立川ローム層第VI層下部・第V層の石器群に対比される可能性をもつといえる。

#### (6) 第 5 次調査概要

第4次調査の調査区域の北側A～C・Z-15～16区について、第4次調査で提示された第VII層文化層の広がり、特にC-14区を中心とした石器ブロック2、第2号礫群の広がりについて



## 第2節 第6次発掘調査の経過

確認することを主な目的とし第5次調査は1993年9月13日～22日の10日間にわたり実施された。また、現地形において、西から東へ傾斜の強くなっている北東部分への遺物の分布のひろがり、層序の確認を行うためにV-16区の試掘を行った。調査区域は合計9グリッド、面積36㎡である。なお、V-16区については、本書でまとめて調査成果を記載しており、第5次調査報告(小林・宮尾 1996)には試掘の成果は掲載されていないので注意されたい。

第5次調査の結果、A～C・Z-15～16区では、第V層文化層の細石刃2点、石刃状剥片1点、槍先形尖頭器1点、削器2点、石核1点、敲石1点と構成礫54点の小規模な礫群1基、第VI層L文化層のナイフ形石器1点、槍先形尖頭器1点、石刃1点、細部調整剥片1点、第VII層文化層の搔器1点、ナイフ形石器1点、石核1点が、それぞれ検出されている。しかし、各文化層とも石器ブロックとして把握できるような石器群の集中は見られなかった。特に第4次調査でC-14区を中心に確認され、C-15区以北に広がるのが予測された第VII層文化層の石器ブロック2や第2号礫群については、C-15区以北には広がらないことが明らかになった。

同時に遺跡北東部分への遺物の広がりを確認する目的で試掘されたV-16区では、従来大部分の調査区で削剝されていた第V層より上位の層位が安定的に遺存している状況が確認された。特に第II層中からは、土器破片が1点出土し、当該区を中心とする部分での土器群の存在を注意させることになった。なお、第5次調査では同区の掘り下げは、日程の都合で第VII層にさしかかった段階で終了している。

第5次調査では、A地点の調査と同時にこれまで樋口・森鳴らの報告でA II地点とされる地点の一部に試掘を実施し、遺存状態やA地点の文化層との関わりを検討した。調査範囲はイ区・ロ区とした2グリッド、面積8㎡である。調査はA地点の基本層序第VI層に相当する深度まで行われ、両面調整石器1点、槍先形尖頭器1点、ナイフ形石器3点、石刃・石刃状剥片10点、細部調整剥片1点、削器1点、敲石3点、台石1点を検出し、柳又遺跡群の一つとして新たにD地点と呼称することとした。

(菊池)

## 第2節 第6次発掘調査の経過

### (1) 第6次発掘調査の方針と経過

#### 概要

第6次発掘調査は1994年9月6日から9月15日までの10日間にわたり実施した。今回の調査は第5次調査で試掘され、第V層より上位の層位が安定した遺存状態を示していたV-16区を含む遺跡北東部について、各文化層の広がり、特に第V層より上位の層位に包含される遺物の広がりを確認するため、U～X-16・17区の8グリッド、面積32㎡を対象に発掘調査を行った。

## 第I章 発掘調査の目的と経過

また、同時に第5次調査から開始した周辺遺跡の遺存状態の確認をする作業として、B地点の一部で試掘を行った。なお、これまでにB地点を含む地形図は作成されていなかったため、発掘班とは別に測量班を編成し、遺跡周辺の地形測量を行った。

A地点における調査深度は、日程の都合から第V層までにとどまった。なお、第5次調査における試掘において第VII層に達していたV-16区に関しては、継続して掘り下げたため、第VIII層に達している。今回の調査の結果、良好に遺存していた第II層から第IV層にかけて、縄文時代草創期末から早期初頭に位置づけられる土器群の分布が明らかになった。また、第V層以下の旧石器時代の文化層については、過去5年のこれまでの調査区に比べ散漫な石器や礫の分布が確認された。

なお、本学では本年度から本学第2部史学科にも考古学専攻が開設され、講義名もこれまでの考古学実習から考古学演習II（考古学実習）と改められた。発掘調査の参加者は、この考古学演習II（考古学実習）履修者56名の他、本学史学科学生ならびに本学大学院学生も加わり、合計60名である。調査期間中は大きく天候が崩れることもなく、順調に発掘調査は進められた。

### 発掘調査日誌

9月6日（晴）発掘参加者は、8時30分に本学本館玄関前に集合し、貸し切りバスとワゴン車に分乗して午前9時に出発、午後3時頃宿舎である市邨学園開田高原研修センターに到着した。到着後発掘器材の整備を行った。

9月7日（晴）草刈り等発掘調査地の整備を行った。併せて前述した方針に従って発掘調査区の設定を行い、V-16区については第5次調査の埋め戻し土を除去した。また、未調査区のU・W・X-16・17区、ならびにV-17区は表土から発掘調査を開始した。

9月8日（晴）参加者は、班編成にしたがってA地点の調査継続とB地点の試掘とを分担した。B地点の試掘は発掘区A地点と同様に1グリッド2×2mで3グリッド設定し、 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ 区と呼称することにした。

9月9日（晴）A地点については第II層以下の掘り下げを行い、土器や石器等の遺物がまばらに検出され始めた。B地点の試掘では、層序が把握されていなかったため特に慎重に掘り下げが進められた。また、測量班は、A地点の調査区ならびにB地点の試掘区を設定し終え、遺跡周辺の地形測量を開始した。

9月10日（晴）A地点については、V-16区を除く調査区全域においてほぼ第III層までの精査が終了し、土器や石器の出土状況の写真撮影と図面記録が行われ、遺物を取り上げた。B地点の試掘は順調に進み、A地点の基本層序で第V層以下に相当する層序が確認されたが、 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma$ 区の3グリッドで層序の傾斜が著しく変化することが確認されたため、新たに1グリッド $\delta$ 区を追加設定した。

9月11日（晴のち曇）B地点の試掘区で層序の傾斜は、特に $\alpha$ 区から $\beta$ 区にかけてA地点基

本層序で第七層にあたる層位で顕著なことが確認された。なお、B地点の試掘区ではほとんど遺物は検出していない。

9月12日（曇）A地点で第四層の精査終了後、石器や土器の出土状況について写真撮影と図面記録が行われ、遺物を取り上げた。B地点の試掘は、A地点の基本層序第七層に相当する層位での精査終了後、調査区の層序を写真撮影し図面に記録した。

9月13日（雨のち晴）A地点第五層の精査終了後、石器の出土状況を写真撮影し、図面に記録したのち遺物を取り上げた。また、並行して調査区層序の写真撮影を行った。B地点の試掘区については、埋め戻しを行い、一連の作業を完了した。また、測量班も遺跡周辺の地形測量を完了した。

9月14日（晴）A地点のみ作業が残っていたため、参加者の総力を結集して調査区層序の図面への記録を行った。その後、第五層の完掘状況を写真撮影し、調査区の埋め戻しを開始した。並行して遺跡からの器材を撤収し、20時より来訪者を交えての懇親会が行われた。

9月15日（晴）宿舎である市邨学園開田高原研修センターの清掃を行い、発掘参加者は貸し切りバスに乗り込み、10時には開田村を後にし、10日間の日程を終了した。

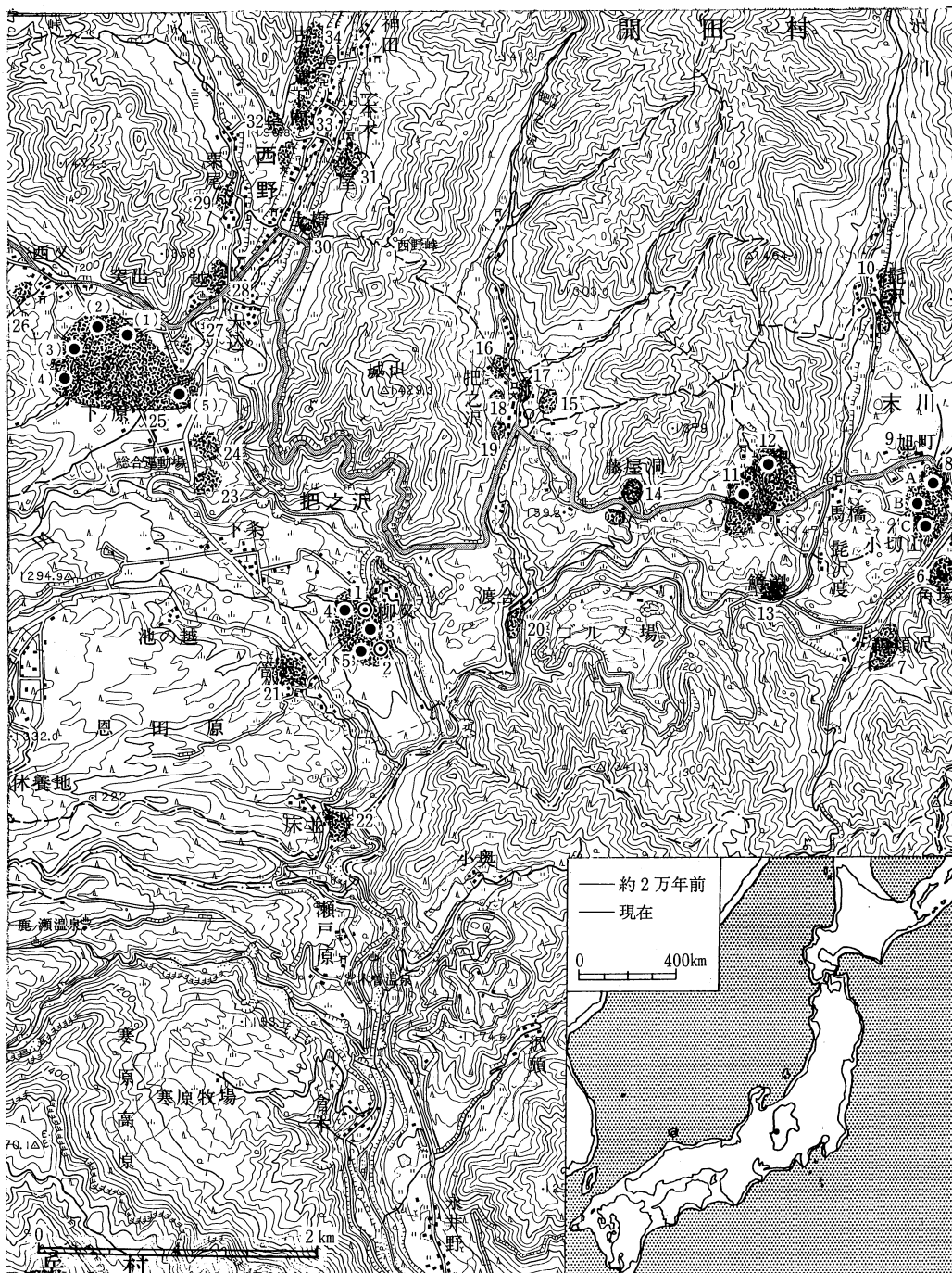
## (2) 整理作業の経過

発掘調査を終え、帰京後の9月25日より出土遺物および記録類の整理作業を開始した。整理作業に着手してから本書の編集作業を完了するまで要した歳月はおよそ1年6ヶ月である。

出土遺物の洗浄ならびに註記は総点数が少ないこともあり、発掘調査期間に完了していたが、遺物を種別し、遺物台帳の作成を終えたのは10月入ってのことである。1994年10月1日に報告書作成に関する最初の打ち合わせを行い、作業分担、執筆分担を立案した。整理作業は石器実測班、土器実測班、母岩別資料分析班、礫分析班、図面作成班に分かれ進めることとした。

1994年12月23日までは順調に整理作業は進んだが、明けて1995年1月8日以降になって整理参加者が減り、約半年の間、整理作業は壊滅状態に陥った。そこで現状の打開にむけて、1995年7月1日に一部の発掘調査参加者が集まり、残務の確認と分担を決めて、整理作業を再開した。母岩別資料分析ならびに礫分析は、ほぼ終了しており、報告書作成に必要な基本的な図面もほぼそろっていたが、それらの報告書用の版下は、手つかずの状態であった。また、石器や土器については実測図の作成すら終了していなかった。これらの残された作業について、池田比呂子、岩名健太郎、宇賀神葉採、及川真紀、風間春芳、片岡治子、堅木宣弘、菊池政幸、設楽政健、島井宏明、杉山友章、野村忠司、羽山尚彦、平吹靖、星宏之、宮田千里、宮本雅道、谷地亜希子、山田美和、山本克らがすべてを負担し、1995年7月25日までに石器や土器の実測図を作成し、すべての版下を完成させた。この時点で報告書の執筆分担を再度定め、9月以降断続的に読み合わせを行い、最終的な編集作業を終了したのは1995年12月30日である。印刷所への入稿は明けて1996年1月12日に行った。校了は3月13日である。 (永井)

第 I 章 発掘調査の目的と経過



第1図 柳又遺跡群の位置(1/50000)

## 第II章 開田高原と柳又遺跡

### 第1節 柳又遺跡の位置と地理

#### (1) 地形と柳又遺跡の位置

柳又遺跡群は木曾川支流の西野川の右岸に形成された河成段丘の縁辺部に並ぶように位置し、時期的にも相互に関連の深い一つの遺跡群を形成している（第1図）。

柳又遺跡群の立地する開田村は長野県の南西部に位置し、標高1000mを越える高地の地域である。また、開田村の西側は岐阜県大野郡高根村と接し、長野県と岐阜県の県境にあたる。そして、柳又遺跡群の東側には、木曾川水系に属する西野川が流れている。西野川は藤沢川・西又川・冷川・末川等の支流を集めながら開田高原を二分し、三岳村で大滝川にそそぎ、木曾福島で木曾川に合流する。

開田高原は御岳山（標高3067m）の北東麓に位置しており、北・東・西側を山地に囲まれている。その平均標高は約1100mで、高原性の盆地である。開田高原の南側は西野川の開折谷によって三岳村へと通じている。西野川は開田高原をほぼ北から南へ向かって貫流しており、この地域の地形を東西に分割する役割を果たしている。さらに西側の地域は西野川の支流である冷川によって南分に二分されており、北側の地域を下の原、南側の地域を恩田原という。A地点、B地点、C地点、柳又西遺跡からなる柳又遺跡群は、恩田原の東北隅一帯の柳又原と呼ばれる地域にある。

西野川は開田村に水源を発し、末川も同様に開田村の北方から始まる。両河川は共に支流を順次合流させながら、柳又の集落の南側、三岳村との村境付近で合流し、さらに三岳村で大滝川と合流したのち、木曾福島町で木曾川に合流することになる。

柳又A地点は西野川によって形成された比高差約50mの急峻な段丘崖線から西に約75m隔てた台地上、標高1123.900m（最高点）に位置しており、現河床面との比高差約70mに達する。A地点の付近には西野川に向かい緩やかに傾斜する起伏の少ない地形が広がっている。その北側には西から東に向かって沢が流れ、南側には小支谷が入り、舌状台地状に区画されている。現在は、裾部を取り囲むように村道2-8号線が施設され、台地上のほぼ中央を南北に通る堀切のような段差と小溝によってさらに東西に区切られている。國學院大學文学考古学研究室による第1次～第6次の調査区域は西側の高い畑地の中にある。

なお、1959～62年にかけて発掘が行われたA I地点（樋口・森嶋 1959）は西側に隣接するが、その正確な位置関係は確認されていない。他にA I地点の西側を通る道路の向かい側にA II地点、北東約45mの位置にA III地点と区分されているが、いずれも詳細な位置は不明である。

第II章 開田高原と柳又遺跡

表1 開田村の遺跡

第1図No.	遺跡名		時 期	文 献	
1	柳又A地点	A I、A II、A III地点	旧石器時代 縄文時代草創期 縄文時代早期 縄文時代前期	藤沢 1956 樋口・森嶋 1959 樋口・森嶋・小林 1965 県教 1969 村数 1986 小林・谷口編 1992 谷口・宮尾編 1995	森嶋 1959 樋口 1961 森嶋 1967 県史 1983 小林編 1990 永峯・谷口編 1993 小林・宮尾編 1996
2	柳又B地点		旧石器時代 縄文時代草創期	樋口・森嶋 1959 樋口・森嶋・小林 1965 県史 1983	樋口 1961 県教 1969 村教 1986
3	柳又C地点		旧石器時代	青木・内川・高橋編 1993	
4	柳又D地点	A III地点の一部	旧石器時代 縄文時代草創期	樋口・森嶋・小林 1965	小林・宮尾編 1996
5	柳又西		旧石器時代 縄文時代草創期	県教 1969 県史 1983	樋口ほか 1968 村教 1986
6	小洞		時代・時期不明	藤森 1933 樋口・森嶋 1959 村教 1986	藤沢 1956 県史 1983
7	うるい沢		平安時代	樋口・森嶋 1959	村教 1986
8	古屋敷	A～C地点	縄文時代早期 縄文時代前期	藤沢 1951 藤沢・小林 1956 藤沢 1961	藤沢 1955 樋口・森嶋 1959 樋口・森嶋・小林 1965
9	血取原		縄文時代前期	村教 1986	
10	髭沢		縄文時代早期 平安時代	藤森 1933 県教 1969 村教 1986	樋口・森嶋 1959 県史 1983
11	中沢A地点	A～D地点	縄文時代早期 縄文時代前期 平安時代	藤沢 1956 県教 1969 村教 1986	樋口・森嶋 1959 県史 1983
12	中沢B地点		縄文時代早期 縄文時代前期		
13	鱒淵		時代・時期不明	樋口・森嶋 1959	村教 1986
14	藤屋洞		縄文時代早期	藤森 1933 県教 1969 村教 1986	樋口・森嶋 1959 県史 1983
15	湯の沢		旧石器時代 縄文時代早期 縄文時代前期	県教 1969 村教 1986	県史 1983
16	西野峠東口		平安時代	藤沢 1956 県史 1983	樋口・森嶋 1959 村教 1986
17	新屋村		縄文時代前期 平安時代	樋口・森嶋 1959	村数 1986

第1節 柳又遺跡の位置と地理

第1図No.	遺跡名		時 期	文 献
18	上の原		縄文時代前期	藤森 1933 樋口・森嶋 1959 村教 1986 藤沢 1956 県史 1983
19	入江		縄文時代前期	藤森 1933 樋口・森嶋 1959 村教 1986 藤沢 1956 県史 1983
20	渡合		時代・時期不明	藤沢 1956 県史 1983 樋口・森嶋 1959 村教 1986
21	管沢	A・B地点	縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代中期	藤森 1933 県史 1983 樋口・森嶋 1959 村教 1986
22	床並		平安時代	藤森 1933 樋口・森嶋 1959 村教 1986 藤沢 1956 県史 1983
23	冷川西台地		縄文時代早期 縄文時代前期	県教 1969 村教 1986 県史 1983
24	つつじが原		縄文時代早期	県教 1969 村教 1986 県史 1983
25	下の原	(1)~(5)地点	旧石器時代 縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代中期	藤沢 1956 樋口・森嶋・小林 1965 県史 1983 樋口・森嶋 1959 県教 1969 村教 1986
26	西又II地点		旧石器時代 縄文時代草創期	樋口ほか 1968 伊深 1971 小林編 1989 神村 1970 伊深 1974
27	川端淵		旧石器時代 縄文時代早期 縄文時代前期	県教 1969 村教 1986 県史 1983
28	越		旧石器時代 縄文時代早期 縄文時代前期	藤沢 1956 樋口・森嶋・小林 1965 県教 1969 村教 1986 樋口・森嶋 1959 樋口 1968 県史 1983 小林編 1988
29	下栗尾		時代・時期不明	藤沢 1956 県史 1983 樋口・森嶋 1959 村教 1986
30	冷川西台地		平安時代	県教 1969 村教 1986 県史 1983
31	大屋		時代・時期不明	村教 1986
32	小馬背		縄文時代草創期	樋口ほか 1968 小林編 1988 神村 1970 小林編 1989
33	下向		時代・時期不明	藤森 1933 樋口・森嶋 1959 村教 1986 藤沢 1956 県史 1983
34	古海道		時代・時期不明	藤沢 1956 県史 1983 樋口・森嶋 1959 村教 1986

しかし、第5次調査の際にAⅠ地点西側の道路の向かい側AⅡ地点の一部については、試掘を実施し、A地点の基本層序と対応する層序と文化層が確認されており、柳又遺跡群の様相の把握に努めている。

柳又遺跡B地点は、A地点の150m程南側に位置し、A地点と連続した台地上にあり、小川と崖にはさまれた狭い台地の縁辺に位置する点でA地点と立地条件は類似する。第6次調査においては、周囲を未補装の農道で囲まれた台地の南端部で試掘を実施し、その遺存状況や文化層の確認が行われた（第Ⅴ章第1～3節参照）。

このB地点からさらに小さな沢を隔てた西側の台地上に柳又西遺跡が近接して存在している。また、A地点とB地点との中間にはC地点があり、A地点を取り囲むように施設されていた村道2-8号線を台地東側部分から直線的に延伸する改良工事にともない、1990年に開田村教育委員会・柳又遺跡C地点発掘調査団1990年に開田村教育委員会・柳又遺跡C地点発掘調査団が発掘調査を実施した（青木・内川・高橋1993）。

(杉山)

### (2) 開田高原の地質

開田高原の地質の生成要因として挙げられるのは、主にその南西方向に位置する御岳山の火山活動である。この御岳山東山嶺の基盤は、美濃帯の中・古生代層と花崗岩・花崗斑岩、そして鮮新から下部更新統の地蔵峠火山岩類・玄武岩類である（植村ほか編 1988）。

まず、御岳山の基盤である古生代層の岩石としては、礫岩・砂岩・粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩などが挙げられる。次に中生代層の岩石としては、礫岩・角礫岩・砂岩・粘板岩などの堆積岩と、石英斑岩・上松苗木型花崗岩などの火成岩類がある。地蔵峠火山岩類・玄武岩類は、第四紀はじめ頃の先御岳火山活動時代の火山岩であり、その時期の堆積物には地蔵嶺礫層・川合礫層があり、火山岩として地蔵嶺礫層には、地蔵峠火山岩類が、その上を覆ったり、取り込んだりする形で存在する。

これらの地質の形成時期から第四紀更新世中頃までの火山活動期が、先御岳活動期と呼ばれるものである。その当時、この付近は海拔約1100～1500メートルの凹凸のある緩やかな丘陵性の高原であったものが、その後、飛驒山地から木曾山地の急激な上昇活動にともない、その時の泥流により地蔵峠火山岩類堆積面が開析される。そして、約80万年前の更新世中期に、美濃帯及びその西側の基盤となる濃飛流紋岩類との断層に火口を開いたのが御岳山である（島田1982）。

次に遺跡の文化層に影響し、御岳山の活動とそれに伴い生成されたテフラ層について述べる。御岳山は、現在まで数万年程度の時間幅で、2回にわたる活動期と静穏期を交互に繰り返してきた。この2回の御岳山活動期は、古期御岳火山・新时期御岳火山と称される。そしてそれぞれの活動期は、古期御岳火山を第1期、新时期御岳火山を第2～4期と更に分けられる。この第1



期から第4期までの各活動期に噴出された火山噴出物が、御岳テフラ層と言われるものである(小林ほか 1977、竹本ほか 1987、植村ほか編 1988)。かつて、いわゆる「信州ローム」と呼ばれたこれらの御岳山起源の火山噴出物は、下位より古期・中期・新时期ロームと区別されていた。近年では御岳の火山活動期が古期・新时期に大別されたことを受け、下位から古期御岳テフラ層・新时期御岳下部テフラ層・新时期御岳中部テフラ層・新时期御岳上部テフラ層と称されている(小林ほか 1977)。

次にこれらの御岳テフラ層について、先述した第1期～第4期それぞれの時期の、生成成分及び地質生成における動的要因を述べる。

まず第1期は、火山活動活発化により、安山岩の溶岩やスコリア・軽石などを交互に噴出し、海拔3500mほどの大成層円錐火山を形成していた。この活動期の末期において、大規模な山体崩壊による和村泥流と呼ばれる堆積物が木曾川沿いを流下、倉越原溶岩流とともに木曾川流域の地質年代の標識となっている。第2期は、第1期以後約10万年という活動休止期間に、第1期に形成されていた古期御岳火山帯が大きく浸食作用を受けた後、約8万年前に始まった。前述した通り、第2期からは新时期御岳火山の活動である。継母岳火山群が、新时期御岳下部テフラを噴出した。他の時期の噴出物がスコリア主体であるのに対して、この時期に限り軽石(パミス)が主体となる。この噴出物は堆積し、それぞれPm-I'・Pm-I・Pm-II'・Pm-II・Pm-III'・Pm-III軽石層と呼ばれ、木曾火山灰、鬼界・葛原火山灰層、黒石原軽石層、阿蘇4火山灰などを挟み、その上位に福島埋没土層を含んで新时期御岳下部テフラ層を形成している。また、この時期に木曾川に沿って流下した土石流が木曾川の中・下流域に、木曾谷層と呼ばれる厚い砂礫層を形成した。第3期は約6万年前の、摩利支天火山群の活動による降下火砕物の堆積物の噴出、複輝石安山岩質の噴出物による成層火山の形成が見られる。パミス主体の第2期とは違い、千本松・三岳・屋敷野・笹川・小木曾の各スコリアを含む。それらの層は、大山関金軽石層・大山倉吉軽石層などを挟んでいる。摩利支天火山群の末期に、火山体の一部に大規模な岩屑なだれが発生し、木曾川沿いに土石流が流れ下り、34,000～45,000年前の火山噴出物と見られる木曾川泥流堆積物を形成した。第4期は、比較的短期間の浸食期を経て、山頂部にほぼ南北に並ぶ現在の四の池・一の池・二の池・三の池・五の池にあたる火口群が順に活動し、安山岩などを噴出した。これらの噴出物が堆積、始良Tnや柳又・開田・境峠の各テフラ層などを挟み込むように新时期御岳上部テフラ層を形成している。この新时期御岳上部テフラ層中においての年代測定値として、開田テフラ層の中の開田キャンプ火砕流堆積物にC-14年代測定値>32,000y.B.P.という年代が得られている(竹本ほか 1987)。

また、上述してきた新时期御岳火山の第2期～第4期における活動期は、関東地方におけるテフラ層と対比した場合、それぞれ第2期は下末吉ローム期(約9万年～6万5千年前)、第3期は下末吉ローム期後半(約6万5千年～5万5千年前)、第4期は武蔵野ローム期から立川ロー

ム期(約5万5千年～2万年前)に比定されている(竹本ほか 1987)。しかし第4期については、武蔵野ローム期から立川ローム期と対比した場合、木曾川泥流堆積物の年代測定値との関係から再検討の必要があると言えよう。御岳山は、2万年前に新期御岳火山の活動が停止した後、死火山とされていたが地獄谷付近において1979年10月に有史以来初めて噴火した。

(和田)

### (3) 開田村の遺跡と柳又遺跡群

開田高原には、柳又遺跡群をはじめとする古屋敷遺跡・小馬背遺跡・西又遺跡等の数多くの遺跡が残されている。開田村内においては、現在までに48遺跡(文化庁編 1983、神村・山下 1986)の存在が確認されている(第1図・表1)。表1を見ると、旧石器時代から縄文時代前期にかけての遺跡が多いことが分かる。

開田村における旧石器時代の遺跡には、柳又遺跡A地点・B地点・C地点・D地点・下の原遺跡A地点・B地点・越遺跡・古屋敷遺跡A地点・B地点・C地点等の各遺跡が主要な遺跡として挙げられる。このうち柳又遺跡A地点・B地点・C地点・下の原遺跡A地点・古屋敷遺跡C地点において、ナイフ形石器を主体とする石器群が出土している。1959年～62年にかけて行われた発掘調査では、柳又遺跡A地点・B地点から出土したナイフ形石器を伴う石器群を、それぞれA I群・B I群という仮称で分類している。この後、調査者樋口昇一らはA I群を編年的に古く位置付けている(樋口・森嶋・小林1965)が、A I群には両面調整の槍先形尖頭器が共伴していることから、編年的位置付けはナイフ形石器文化の後半に求められる。

また、1990年に村道2-8号線の付け替え工事に伴い発掘調査が行われた柳又遺跡C地点からも、ナイフ形石器を伴う3面の文化層が層位的に検出され、開田高原におけるナイフ形石器文化の編年に関して重要な資料が提供されている。それらの文化層の中で最下層位から出土した一群は、角錐状石器や切出形石器を伴う特徴的な石器群であり、現段階においては開田高原における最古の旧石器文化として位置付けられるものであり、A地点における第Ⅶ層文化層に対比されるものである。上位層からはナイフ形石器を伴って、両面調整・片面調整を含む多数の槍先形尖頭器・拇指状搔器等が出土している(青木・内川・高橋 1993)が、樋口昇一らのいうA I群やB I群の石器群よりも後出の段階に属する、いわゆるナイフ形石器文化の最終段階に位置付けられている。

旧石器時代終末期の細石刃文化については、柳又遺跡A地点・C地点ともにそれぞれまとまった資料が得られている。A地点にみられる細石刃文化は、削片系の楔形細石刃石核によって特徴づけられるものであり、湧別技法と共通する北方系の細石刃剝離技術を有している。このA地点と同様の北方系細石刃文化は、開田村の北西に隣接する岐阜県大野郡高根村日和田高原の池の原遺跡B地点でも発見されており、楔形細石刃石核や打面形成削片等が出土している(高根村史編集委員会編 1984、麻生ほか 1991)。一方、C地点から出土した細石刃石器群は、野

## 第1節 柳又遺跡の位置と地理

岳・休場型細石刃石核を特徴とするものであり、西南日本的な細石刃文化の様相を示している。以上にみられるように、開田高原一帯において二つの異なる系統の細石刃文化が存在する。編年的には野岳・休場型細石刃石核を伴う柳又遺跡C地点の一群が古く、削片系の楔形細石刃石核を特徴とする柳又遺跡A地点の一群が新しいことが指摘（谷口 1991）されており、日本の細石刃文化の系統・編年や地域的な動向等の問題を考察するうえで、今後の重要な指標となるであろう。

開田村の縄文時代の主要な遺跡には、古屋敷遺跡A地点・大原遺跡・柳又遺跡A地点・B地点・小馬背遺跡・西又遺跡・菅沢遺跡等があり、特に縄文時代草創期前半に属する遺跡の多いことが特徴的である。

1950・1955年の古屋敷A地点の発掘調査で発見された大形の槍先形尖頭器を主体とする石器群は、石器器種組成の実態や土器共伴の有無において不明な点を残しているものの、縄文時代草創期初頭の神子柴・長者久保文化の前後に編年的に位置付けられている。（藤沢・小林 1956、藤沢ほか 1956）なお、本学考古学研究室が実施した柳又遺跡A地点における第2・3次調査において確認された両面調整の槍先形尖頭器を伴う第IV層文化層の石器群も、細石刃文化と有舌尖頭器文化の中間に編年的に位置付けられるもう一つの石器文化であるが、現段階ではその具体的な系統・編年の位置は詳らかではない。

縄文時代草創期前半の有舌尖頭器を主体とする石器群は、柳又遺跡A地点・B地点・小馬世遺跡・西又遺跡で発見されており、なかでも柳又遺跡B地点・小馬背遺跡・西又遺跡では隆起線文系土器の共伴が確認されている。これらの各遺跡から出土した有舌尖頭器はいずれもいわゆる柳又ポイントの範疇に含められるものであり、逆三角形の短い舌部をもつ点に特徴があるが、遺跡によって有舌尖頭器の形態組成に変化がみられる。なかでも柳又遺跡A地点の有舌尖頭器は、柳又遺跡B地点・小馬背遺跡・西又遺跡出土のそれと比較して最小の部類に属し、編年的には最も新期に位置付けられるものと考えられる（小林編1990）。

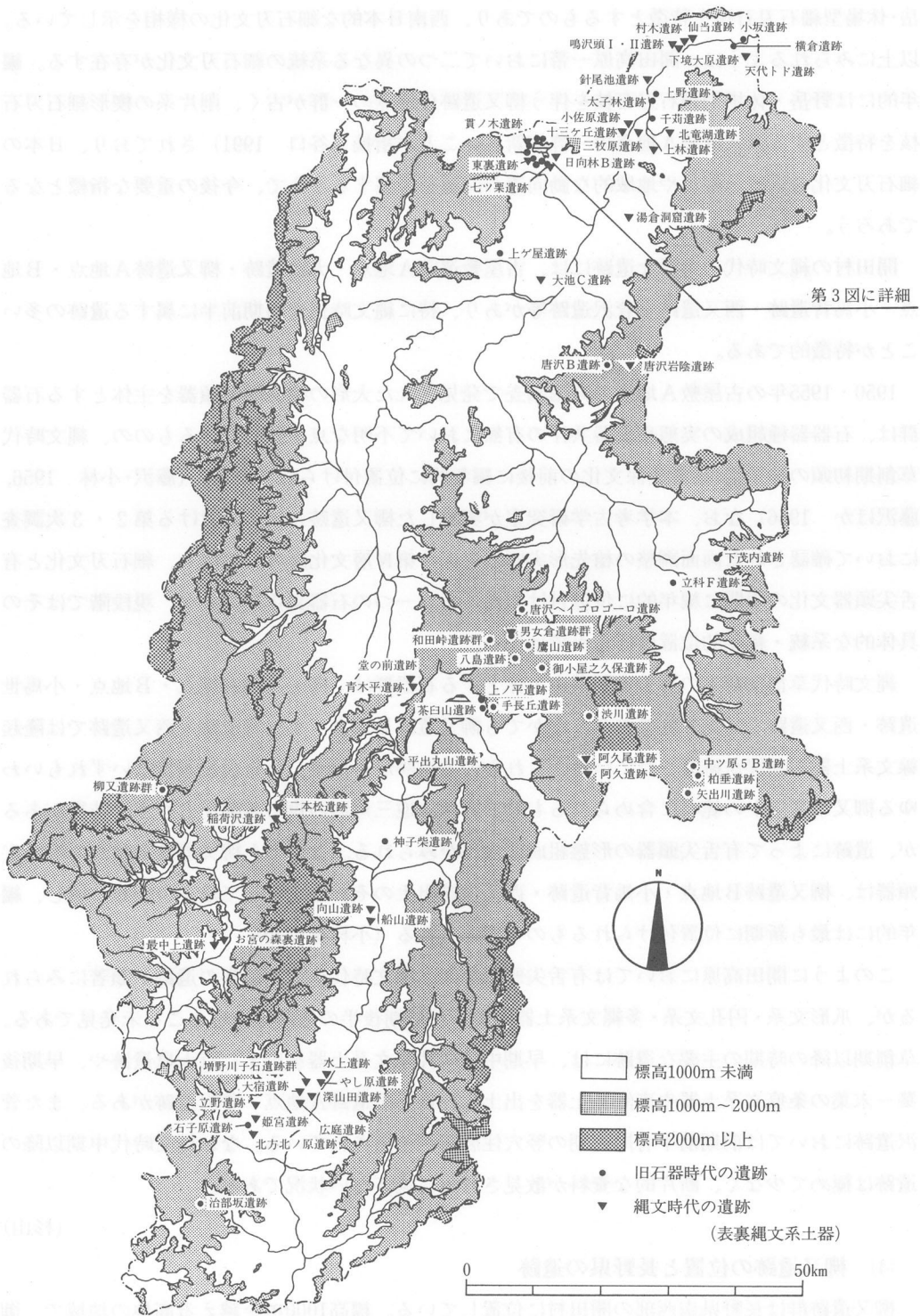
このように開田高原においては有舌尖頭器を伴う縄文時代草創期前半の遺跡が顕著にみられるが、爪形文系・円孔文系・多縄文系土器を伴う草創期後半の遺跡は今のところ未発見である。草創期以降の時期の主要な遺跡には、早期中葉の押型文系土器を出土した大原遺跡や、早期後葉～末葉の条痕文系土器や東海系土器を出土した古屋敷遺跡A地点・菅沢遺跡がある。また菅沢遺跡においては前期前半有尾式期の竪穴住居跡が検出されている。なお縄文時代中期以降の遺跡は極めて少なく、断片的な資料が散見されるに過ぎない状況である。

（杉山）

### （4）柳又遺跡の位置と長野県の遺跡

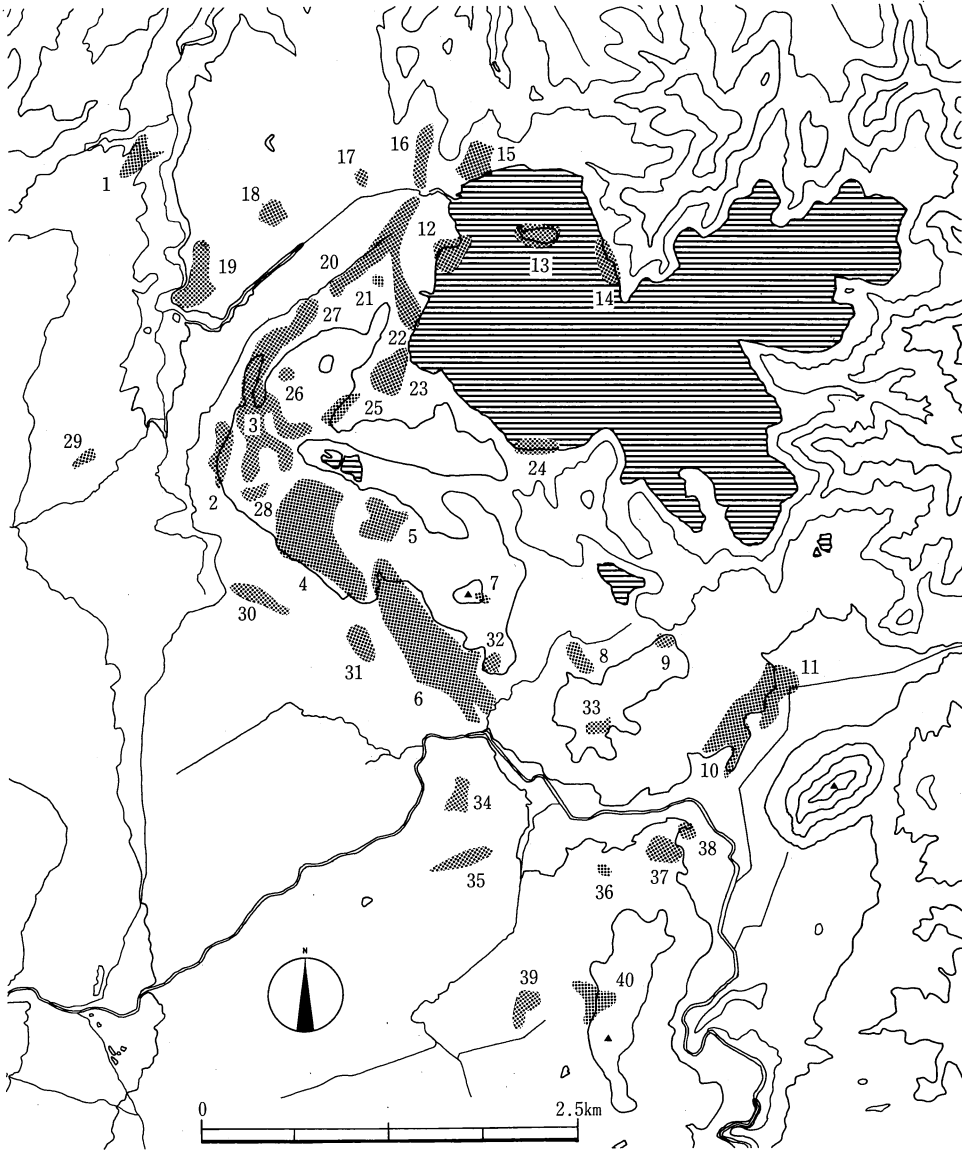
柳又遺跡群は長野県南西部の開田村に位置している。標高1000mを越える高地の地域で、御岳山の北東麓に位置し、木曾川支流の西野川右岸に位置する（第2図）。

第II章 開田高原と柳又遺跡



第2図 長野県の地形と本書に関連する遺跡(1/1000000)

第1節 柳又遺跡の位置と地理



1. 星光山荘遺跡 2. 西岡A遺跡 3. 貫ノ木遺跡 4. 上ノ原遺跡 5. 大久保南遺跡 6. 東裏遺跡  
 7. 裏の山遺跡 8. 鉢ノ木遺跡 9. 大平B遺跡 10. 日向林B遺跡 11. セツ栗遺跡 12. 立が鼻遺跡  
 13. 琵琶島遺跡 14. 縦ヶ崎遺跡 15. 杉久保遺跡 16. 川久保遺跡 17. 小丸山遺跡 18. 向新田遺跡  
 19. 清明台遺跡 20. 仲町遺跡 21. 神山北遺跡 22. 海端遺跡 23. 狐久保遺跡 24. 砂間遺跡  
 25. 神山A遺跡 26. 神山C遺跡 27. 照月台遺跡 28. 西岡B遺跡 29. 瑞穂A遺跡 30. 緑ヶ丘遺跡  
 31. 小丸山公園遺跡 32. 伊勢見山遺跡 33. 大平A遺跡 34. 柳原遺跡 35. 陣馬遺跡 36. 清水東遺跡  
 37. 吹野原A遺跡 38. 吹野原B遺跡 39. 丸谷地遺跡 40. 大道下遺跡

第3図 野尻湖周辺の遺跡(1/50000)

長野県では柳又遺跡群をはじめとする後期旧石器時代の遺跡が数多く発見されており、豊富な石器群を出土する遺跡も多い。

長野県内の後期旧石器時代の遺跡は、河川の段丘上にあるものと、海拔1000mを越す高原地帯に位置するものとに大別できるが、前者には飯山市周辺の千曲川をのぞむ比較的低い段丘上の遺跡や、伊那谷の天竜川の段丘上の遺跡などがあり、後者には飯綱・戸隠・菅平・霧ヶ峰周辺、あるいは野辺山・開田などの各高原地帯にある遺跡が相当する。その他、和田峠・男女倉・鷹山あるいは渋川・池の平等の八ヶ岳山塊に点在する遺跡のように黒曜石原産地周辺に分布する、いわゆる黒曜石原産地型遺跡がある（戸沢 1986）。

長野県内で最も古い時期の遺跡としては、動植物の化石から年代が推定されている信濃町野尻湖の遺跡群や始良火山灰層の下部で石器が発見され、22000年～30000年前の旧石器文化であると判断された飯田市石子原遺跡が挙げられる。野尻湖周辺に確認された遺跡群（第3図）では、野尻湖立が鼻遺跡で、大量の動物化石に混じって少量の道具が伴う出土状況を示しており、狩り場であると同時に動物解体場であったと推定されている。近年では、上信越自動車道建設に伴い、信濃町日向林B遺跡で世界最多の局部磨製石斧が発見される（谷 1994、谷 1995）など旧石器文化全般の研究における重要な指標となる遺跡が多い。飯田市石子原遺跡においては礫器、両面加工石器、先端のとがったピック、基部加工の尖頭器等の石器群が出土し、小形の石核石器を含むといった野尻湖立が鼻遺跡にはみられない特徴を示している。

長野県の旧石器時代の特徴の一つに、黒曜石原産地を核とした茂呂型ナイフ形石器と、千曲川流域に産する頁岩を素材とする杉久保型ナイフ形石器というの二つのナイフ形石器文化が南北で対立するように分布している点がある。

茂呂型ナイフ形石器文化を代表する遺跡としては、和田峠や大門峠周辺に点在する男女倉遺跡群や鷹山遺跡群をはじめ、八ヶ岳山塊の渋川遺跡や池の平遺跡、霧ヶ峰山塊の諏訪郡下諏訪町星々塔遺跡等が挙げられる。その他、黒曜石原産地からやや離れるが諏訪湖東岸の台地上にある諏訪市茶白山遺跡や、手長丘遺跡も茂呂型ナイフ形石器を出土する代表的な遺跡である。

杉久保系ナイフ形石器は、野尻湖岸にある杉久保遺跡を標式とし、飯山盆地の北東にある千曲川河岸の小段丘上に立地する太子林遺跡等も杉久保形ナイフに似たものが出土している。

後期旧石器時代後半には、槍先形尖頭器が出現するが、その分布は先に述べた茂呂系ナイフ形石器の分布圏の核である黒曜石原産地の和田峠周辺や、霧ヶ峰・八ヶ岳山麓一帯の遺跡を中心としている。槍先形尖頭器を主体とする遺跡は、諏訪湖東岸の台地上にある上ノ平遺跡ならびに北踊場遺跡が代表的で、他には南佐久群川上村馬場平遺跡や飯山市関沢遺跡等からも槍先形尖頭器を主体とする石器群が出土している。

旧石器時代末期になると、細石刃文化が登場するようになるが、県内では南佐久郡南牧村の矢出川遺跡において、日本で最初の細石刃文化が発見される。矢出川遺跡にみられる非削片系

## 第1節 柳又遺跡の位置と地理

の円錐形・半円錐形細石刃石核は、南佐久郡川上村柏垂遺跡、小県郡長門町鷹山遺跡、諏訪市手長丘遺跡・下伊那郡高森町鐘鑄原遺跡等でも出土している。この円錐形・半円錐形細石刃石核に対して、削片系の楔形細石刃石核が出土する遺跡には飯山市千苺遺跡・上水内郡信濃町仲町遺跡・長野市小野平遺跡・南佐久郡川上村柏垂遺跡等があり、巨視的に見た場合、東アジアの細石刃文化の南北二系統の在り方と関連して貴重な資料を提供している。また、旧石器時代の最終末、すなわち縄文文化への移行期には、大形局部磨製石斧や尖頭器を特徴とする神子柴文化が展開する。これは上伊那郡南箕輪村の神子柴遺跡が標式となっており、県内では小県郡真田町唐沢B遺跡をはじめ数多くの遺跡が発見されている。

なお、柳又遺跡群では、御子柴文化に関わる石器は発見されていないが、有舌尖頭器と土器とが伴出し、柳又型ポイントの標式遺跡となっている。同時に柳又遺跡A地点では、北方起源と推定される大形の石刃を生産する第Ⅳ層が発見され、神子柴文化との関連、有舌尖頭器と土器をもつ文化との関連のうえで、興味深い資料となっている。

上記のように長野県には後期旧石器時代の各文化における重要な資料を提供する遺跡が数多く存在している。また、旧石器時代以外の遺跡には言及しなかったが、広大な県域を有する長野県には、縄文時代以降も各時代において重要な遺跡が数多く存在しており、今後数多くの資料が発見されていくことと思われる。

(杉山)

今回の柳又遺跡A地点の発掘調査では、柳又遺跡A地点の所在する開田高原では過去に出土例のなかった表裏縄文系土器が発見されている(第3章第4節参照)。これまで隆起線文系土器などの縄文時代草創期前半に位置づけられる土器群は、前述されているように開田村では多くの発見例があり、柳又遺跡A地点でも過去の調査、現在の本学考古学研究室の調査ともに発見例があり、該期の研究に少なからず資料を提供してきたが、縄文時代草創期後半に位置づけられる土器群の存在は未確認の状態が続いていた。

表裏縄文系土器は、地域的には中部地方を中心に広く分布し、編年的には縄文時代草創期末葉から早期初頭に位置づけられている。特に長野県にはその出土の知られた遺跡が多く、管見によれば40遺跡を越える(表2)。これらの遺跡は長野県内のほぼ全域に分布しているが、特にまとまった資料を提供している遺跡には、北信で信濃川を挟んでほぼ対岸に位置する小佐原遺跡と三枚原遺跡とがある。小佐原遺跡(広瀬 1981、1982)では器体の内面と外面とに縄文が施された文字どおりの表裏縄文系土器と、縄文は外面にしかみられないが、整形技法を同じくする土器が出土しており、三枚原遺跡(広瀬 1995)では口縁部付近の内面と外面とに縄文が施された表裏縄文系土器が出土している。また、これらの遺跡にほど近い鳴沢Ⅰ・Ⅱ遺跡では、表裏縄文系土器と室谷下層式並行と考えられる土器の共伴事例が報告(広瀬 1995)され、編年の位置づけに貴重な資料を提供している。

表2 表裏縄文系土器出土の遺跡

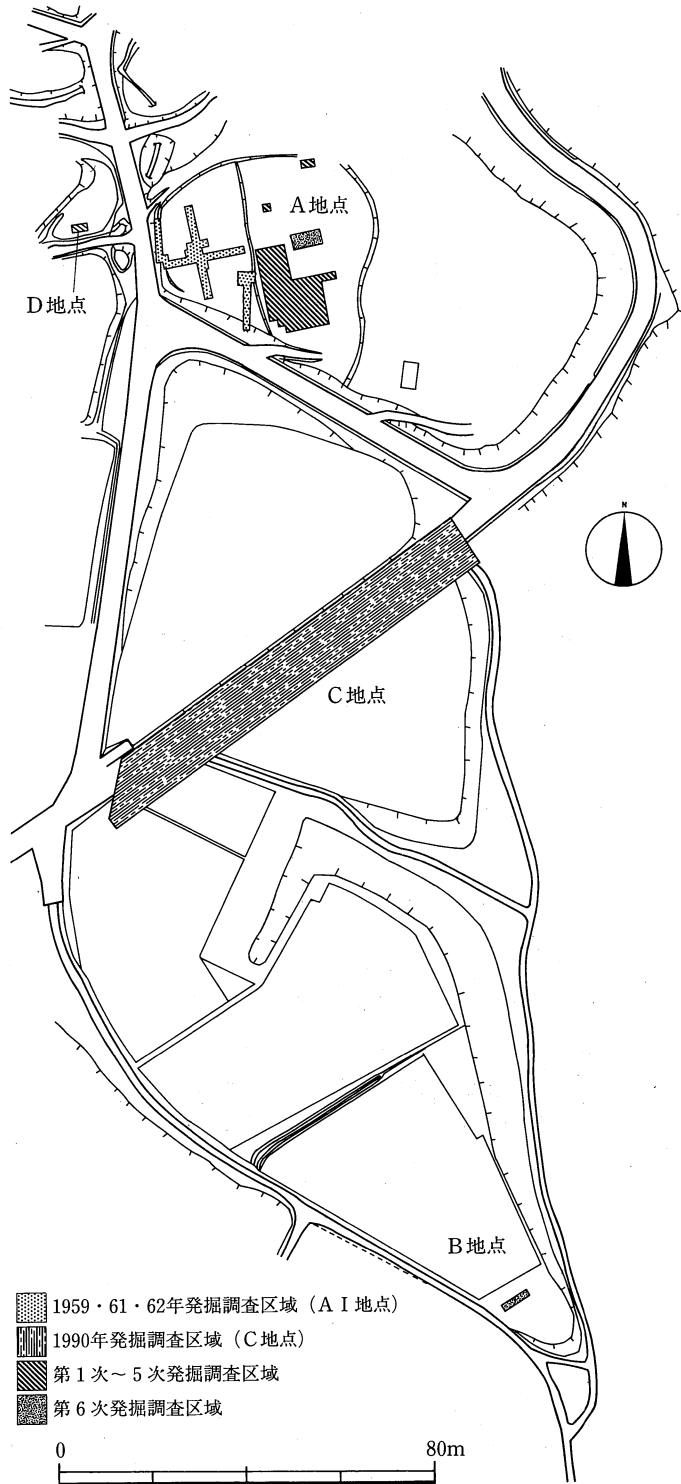
遺跡名	所在地	表裏縄文	無文	撚系文	押型文	文献
		○	○	○	○	
村木	長野県下水内郡栄村	○			○	広瀬ほか 1995
仙当	長野県下水内郡栄村	○			○	広瀬ほか 1995
天代トド	長野県下水内郡栄村	○			○	広瀬ほか 1995
鳴沢頭 I・II	長野県飯山市	○			○	広瀬ほか 1995
下境大原	長野県飯山市	○			○	広瀬ほか 1995
小佐原	長野県飯山市	○				広瀬 1981
針尾池	長野県飯山市	○			○	広瀬ほか 1995
北竜湖	長野県飯山市	○		○	○	広瀬ほか 1995
十三ヶ丘	長野県飯山市	○			○	広瀬ほか 1995
三枚原	長野県下高井郡木島平村	○			○	高橋 1977 木島平村教委 1977
上村中道	長野県下高井郡山ノ内町	○		○	○	山ノ内町教委 1985
湯倉洞窟	長野県下高井郡高山村	○	○	○	○	関 1973 関 1974
七ツ栗	長野県下高井郡信濃町	○			○	広瀬ほか 1995
日向林 B	長野県下高井郡信濃町	○			○	広瀬ほか 1995
貫ノ木	長野県下高井郡信濃町	○			○	広瀬ほか 1995
東裏	長野県下高井郡信濃町	○	○		○	広瀬ほか 1995
大池 C	長野県長野市	○			○	長野市教委 1974
唐沢岩陰	長野県小県郡真田町	○			○	永峯・樋口 1967
男女倉 C	長野県小県郡和田町	○			○	和田村教委 1975 上田小県誌 1995
栃原岩陰	長野県南佐久郡北相木村	○		○	○	小松 1976 小松 1978
堂の前	長野県塩尻市	○		○	○	塩尻市教委 1985
青木平	長野県塩尻市	○		○	○	塩尻市教委 1985
二本木	長野県木曾郡日義村	○	○	○	○	神村 1983
稻荷沢	長野県木曾郡日義村	○	○	○	○	神村 1983
お宮の森裏	長野県木曾郡上松町	○	○	○	○	新谷 1995
最中上	長野県木曾郡上松町	○			○	上松町教委 1993
阿久尻	長野県茅野市	○			○	広瀬ほか 1995
阿久	長野県諏訪郡原村	○			○	笹沢ほか 1982
平出丸山	長野県上伊那郡辰野町	○		○	○	辰野町誌編纂委 1990
向山	長野県上伊那郡宮田村	○		○	○	友野 1976 田中 1972
舟山	長野県駒ヶ根市	○		○	○	太田 1958 林 1971 駒ヶ根市教委 1971
水上	長野県下伊那郡松川町	○		○	○	長野県教委 1973 下伊那史 1991
やし原	長野県下伊那郡松川町	○			○	長野県教委 1973
増野川子石	長野県下伊那郡高森町	○			○	酒井ほか 1973
広庭	長野県下伊那郡高森町	○			○	高森町教委 1980 下伊那史 1991
深山田	長野県下伊那郡高森町	○		○	○	広瀬ほか 1995
大宿	長野県下伊那郡高森町	○		○	○	広瀬ほか 1995
立野	長野県飯田市	○		○	○	松島 1955 松島 1957 下伊那史 1991
姫宮	長野県飯田市	○			○	上郷町教委 1981 下伊那史 1991
北方北ノ原	長野県飯田市	○				広瀬ほか 1995
大谷寺洞穴	栃木県宇都宮市	○				埴 1976
室谷洞穴	新潟県東蒲原郡上川村	○		○	○	中村 1964
石畑岩陰	群馬県吾妻郡長野原町	○		○	○	市 1988
花の湖	岐阜県恵那郡坂上町	○			○	原・紅原 1958 原・紅原 1974
鳥浜貝塚	福井県三方郡三方町	○				森川ほか 1979



第1節 柳又遺跡の位置と地理

その他、東信では栃原岩陰遺跡、唐沢遺跡、男女倉C2遺跡、中信では木曾川流域の青木平遺跡、堂の前遺跡、稻荷沢遺跡、二本松遺跡、南信でも天竜川流域の増子川子石遺跡、立野遺跡等でも多数の表裏縄文系土器が出土しているが、これまで該期に伴う明確な遺構は発見されていなかった。今回の調査の前年、ちょうど柳又遺跡A地点で第5次調査が行われていた時期、柳又遺跡の所在する開田高原に程近い木曾川流域で発掘調査されたお宮の森裏遺跡で、表裏縄文系土器を出土する竪穴住居跡の発見があった(新谷 1995)。お宮の森裏遺跡は距離的に柳又遺跡に最も近いうえ、出土している土器自体も類似する部分が多く、同遺跡の報告に示された土器の内容には特に注意する必要がある。本報告では、これらの表裏縄文系土器出土の遺跡についての報告や、表裏縄文系土器に関連する論文を参考にして観察できる事項をまとめた。出土点数が少ないため、編年的な位置づけに関しては論及していない。

(及川)



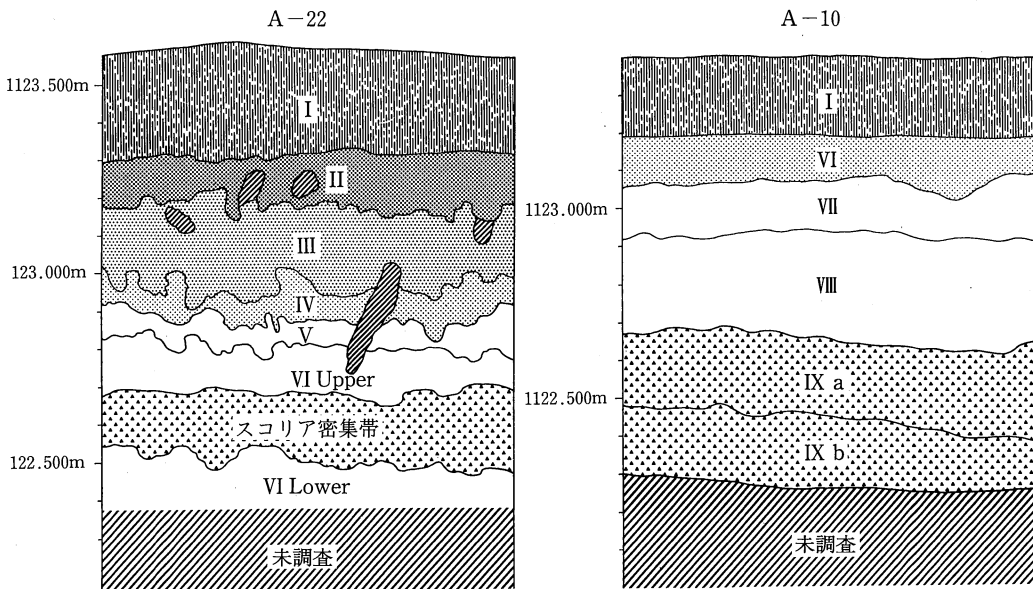
第4図 遺跡周辺と発掘調査区域(1/1600)

## 第2節 第6次発掘調査

### (1) 発掘調査区域の設定

本学の柳又遺跡A地点における発掘調査は、1989年から実施され、すでに5年を数えている。調査年次によっては一部区域で上層の発掘と下層の発掘というかたちで、同一区域に重複した場合もあったが、調査面積は304㎡に達している。調査年次別の発掘区域とその面積は以下のとおりである(第6図)。第1次でA-5~16、B-6~16、A-22区の24グリッド(面積96㎡)、第2次でA・B-10~14、C-7~14、Z~T-11、T・U-28区の27グリッド(面積108㎡)、第3次でZ~V-5~10区の30グリッド(面積120㎡)、第4次でA~C、Z-10~14区の20グリッド(面積80㎡)、第5次でA~C、Z-15~16区の9グリッド(面積36㎡)。これらの調査区域は、すべて第V層まで発掘が終了している。また、A~C-10~16区は第VIII層まで発掘を終了している。

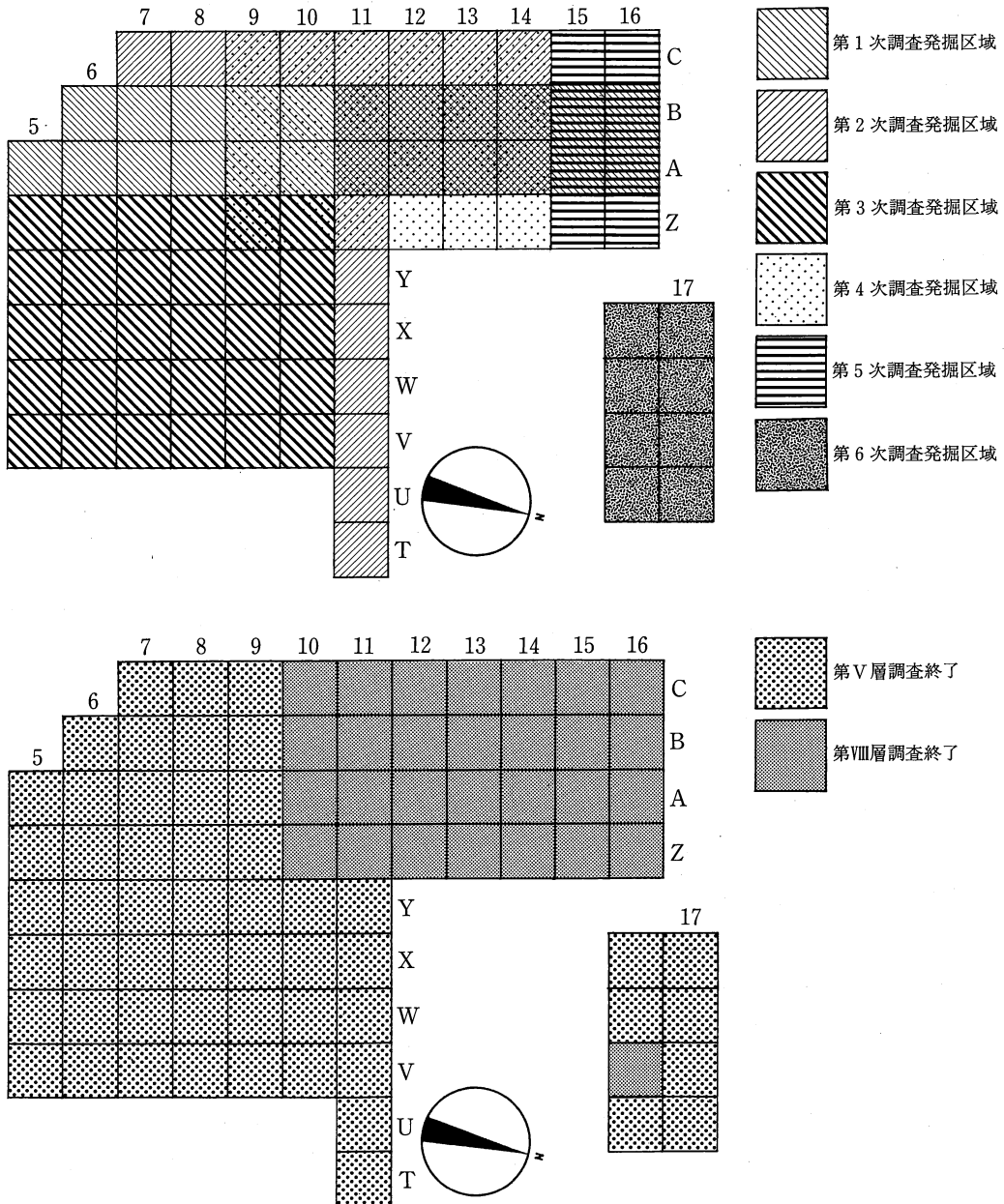
第6次調査は、第5次調査で試掘したV-16区を含むX~U-16・17区の8グリッド、面積32㎡の調査区を設定した。特に第5次調査の試掘で確認された良好な遺存状態を示す第V層より上位の層中における遺物の包含を確認することを主目的とし、かつこれまでに知られている各文化層の遺跡北東部における分布状況を把握することを目指して発掘調査を行った。V-16区は第5次調査の試掘において、第VII層まで調査深度は達している。第V層より上位の各層位が良好に遺存しており、第II層中からは土器破片が1点出土している。柳又遺跡A地点におけるプライマリーな層位からの土器破片の出土は、A-22区第III層からの19点を数えるに過ぎない。



第5図 遺跡の基本層序(1/20)

第2節 第6次発掘調査

いが、V-16区での試掘結果から、今回の調査では多数の土器破片の出土が期待された。なお、V-16区の層序、ならびに出土遺物は第5次調査の報告（小林・宮尾編 1996）に掲載せず、一括して本書で提示してある。



第6図 発掘調査区と調査深度

第6次の発掘調査区域は過去5年の設定に準じている。第2次調査の時に設けられた基準杭No. 1～6に基づいている。磁北に対してN-12°23'25"-Eの傾きをもつ南北軸と、これに直交する東西軸にしたがってグリッドを配置している(第4図)。1グリッドは2×2mである。また、標高原点もこれまでと同様に、A地点の立地する台地西端部に施設されている水準点(標高1125.700m)から遺跡内に原点移動し、標高1125.700mに設定した。(星由)

## (2) 基本層序

本遺跡の基本層序は、第1次調査で確認したA-22区と第2次調査で確認したA-10区とで土層観察したものに基いており、以下に示すとおりである(第5図)。

第I層：表土(耕作土)。層厚約20～30cm。

第II層：黒褐色土層。白色粒子を微量に含む。層厚はA-22区で約15cm。

第III層：暗茶褐色土層。白色粒子を多量に含む、下部には青灰色スコリアを含む。層厚はA-22区で約20cm。

第IV層：暗褐色土層。第III層と第V層の漸移層である。白色粒子と赤色・青色スコリア(径2～3mm)を多量に含む。層厚はA-22区で約10cm。

第V層：暗黄褐色のソフトローム層。第IV層より小粒の赤色、青色、白色スコリアを含む。色調は下半部がより明るい。層厚はA-22区で約10cm。

第VI層：暗黄褐色のハードローム層。スコリア(径10～15mm)を多量に含む、赤色スコリアは第V層に比べて大きい。部分的にクラック帯が認められる。層厚はA-22区で約60cm。A-10区で約20cm。A-22区では、この層の中位に固くしまった青灰色スコリアの密集帯が挟まれており、上下に分層することができる。この場合には、上部を第VI Upper層、下部を第VI Lower層とする。ただし、台地上部平坦部分にあたるA・B-10～14区では、このスコリア密集帯は認められず、分層することはできない。

第VII層：明黄白色のハードローム層。青灰色スコリア(径1～5mm)を多量に含む。第VI層よりも色調が明るく、粘性があって軟質である。層厚はA-10区で約10cmである。

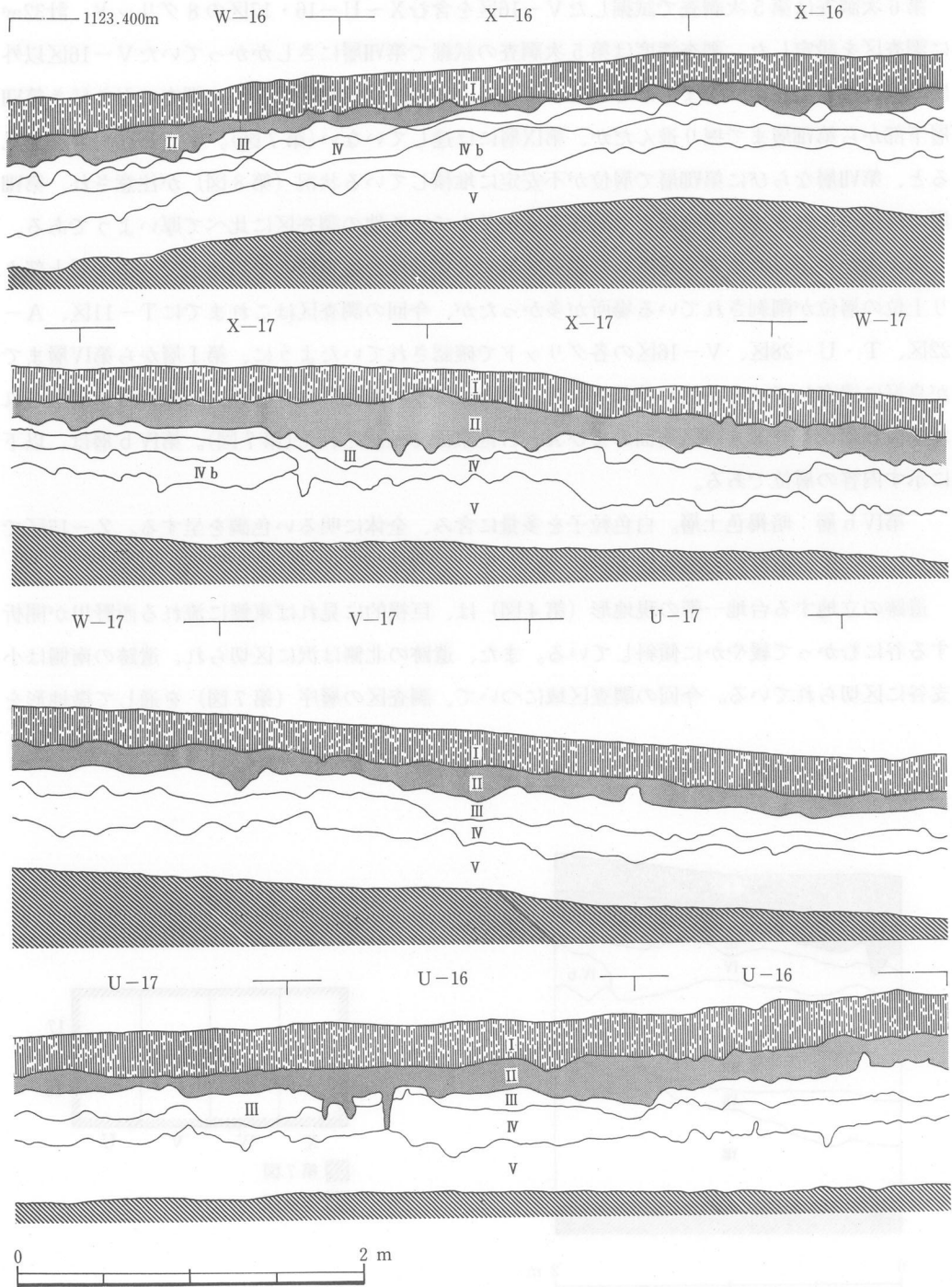
第VIII層：スコリアを多量に含むローム層。第VII層と第IX層の漸移層である。赤色・青色・青灰色スコリア(径1～8mm)を多量に含む、固くしめる。A-10区で約30cmである。

第IX層：層厚は約120～150cmのスコリア堆積層。性状と層厚から判断して御岳第2スコリア層[S-2](木曾谷第四期研究グループ1967)に同定される。非常に固く、A-10区では約40cmを掘り下げたに過ぎないが、最上部には次の2層に細分された。

第IX a層：細粒の青灰色スコリア(径1～10mm)を主体として、赤色スコリア(径1～8mm)と微量の白色スコリア(径1～4mm)を含む。層厚は約20cm。

第IX b層：赤色スコリア(径1～15mm)を主体として、青灰色・白色スコリア(径3～15mm)を含む。層厚は約20cm。

第2節 第6次発掘調査



第7図 発掘調査区の層序(1) (1/40)

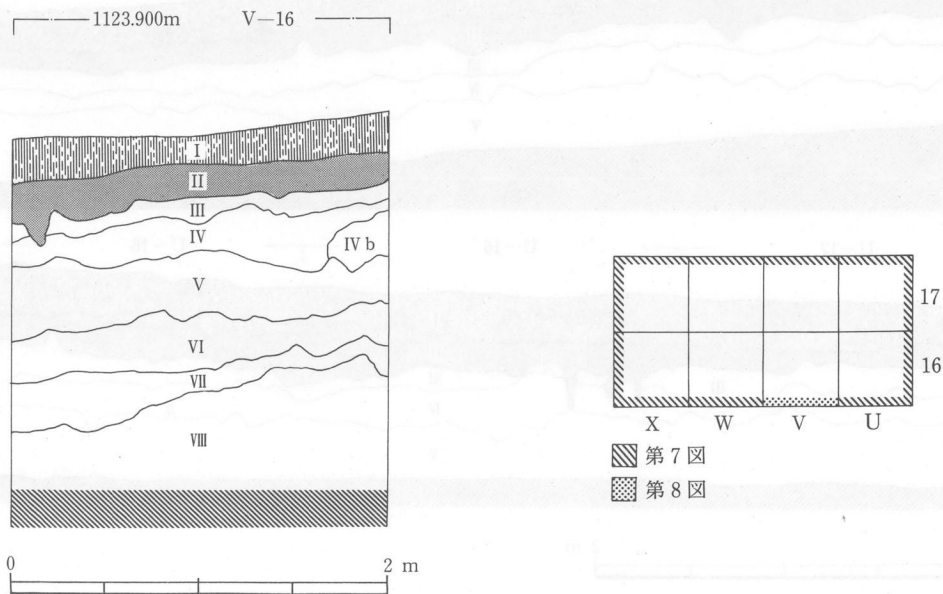
(3) 調査区層序と遺跡の地形

第6次調査は第5次調査で試掘したV-16区を含むX~U-16・17区の8グリッド、計32㎡に調査区を設定した。調査深度は第5次調査の試掘で第VII層にさしかかっていたV-16区以外は日程の都合上、第V層までにとどまっている。なお、V-16区は今回の調査で引き続き第VII層下部から第VIII層まで掘り進んだが、第IX層には達していない(第7図)。V-16区の層序を見ると、第VII層ならびに第VIII層で層位が不安定に堆積している状況(第8図)が注意され、第VIII層の堆積がこれまでに第VIII層まで調査深度が及んでいる他の調査区に比べて厚いようである。

第1次から第5次までに発掘した調査区域の大部分は台地頂部の平坦地上で、第V層上部より上位の層位が削割されている場所が多かったが、今回の調査区はこれまでにT-11区、A-22区、T・U-28区、V-16区の各グリッドで確認されていたように、第I層から第IV層までが良好に遺存している状態が確認された。また、第5次調査においてZ-15区付近で観察された第IVb層がV~X-16区南面およびX-17区東面で確認された(第7図)。第IVb層は、以下に示す内容の層位である。

第IVb層：暗褐色土層。白色粒子を多量に含み、全体に明るい色調を呈する。Z-15区で層厚約12cmを測る。

遺跡の立地する台地一帯の現地形(第4図)は、巨視的に見れば東側に流れる西野川が開析する谷にむかって緩やかに傾斜している。また、遺跡の北側は沢に区切られ、遺跡の南側は小支谷に区切られている。今回の調査区域について、調査区の層序(第7図)を通して微地形を



第8図 発掘調査区の層序(2) (1/40)

概観すると、各層位は南北方向には多少の凹凸はあるもののほぼ平坦に堆積しており、層厚はほぼ一定で比高差も約10cm内に収まっている。それに対して、東西方向は層厚はほぼ一定であるが、各層位ともに西から東に向かって下っていき、50～60cmの比高差が認められ、明らかに傾斜していることが分かる。この傾斜はちょうど巨視的に見た現地形の傾斜に一致するものであり、発掘が終了している第V層までに關する東西方向の地形は、現地形と同様の傾斜を想定できよう。ただし、河川の開析深度を考慮しなければならないので、河川に対する比高差を含めた景観ではない点には注意する必要がある。

(星宏)

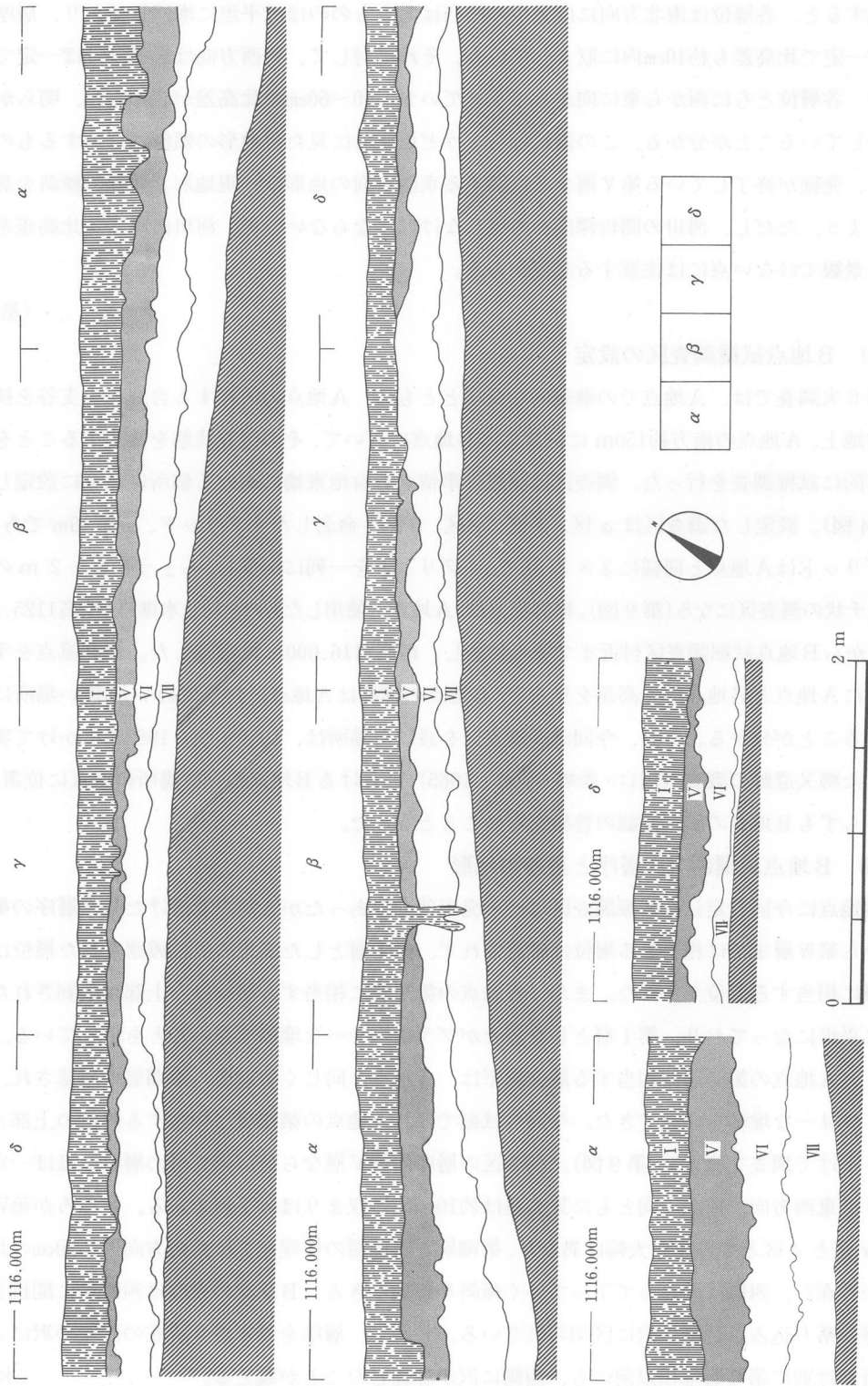
#### (4) B地点試掘調査区の設定

第6次調査では、A地点での継続的な発掘とともに、A地点の所在する台地と小支谷を挟んだ台地上、A地点の南方約150mに位置するB地点において、その遺存状態を確認することを主な目的に試掘調査を行った。調査区は諸般の事情から台地東端にあたる個所に任意に設定した(第4図)。設定した調査区は $\alpha$ 区、 $\beta$ 区、 $\gamma$ 区、 $\delta$ 区と命名した4グリッド、面積16m<sup>2</sup>である。1グリッドはA地点と同様に2×2mで、4グリッドを一列に配置し、ちょうど8×2mのトレンチ状の調査区になる(第9図)。標高原点は、A地点で使用したものと同一水準点(標高1125.700m)からB地点試掘調査区付近まで原点移動し、標高1116.000mに設定した。標高原点を手がかりにA地点とB地点の比高差を見ると、B地点の標高はA地点に対して約7m低い場所に位置することが分かる。なお、今回試掘調査区を設けた場所は、1959年から1962年にかけて実施された柳又遺跡の調査(樋口・森嶋・小林 1965)におけるB地点の発掘場所の南東に位置し、はからずもB地点の範囲確認の性格をもつこととなった。

#### (5) B地点試掘調査区層序と遺跡の地形

B地点に今回設定した試掘調査区は、未発掘部分であったがA地点で設けた基本層序の第II層から第IV層までに相当する層位は確認されず、第I層とした表土の次に確認された層位は第V層に相当する層位であった。また、A地点の第V層に相当する層位は、上部が削剝されたように平坦になっており、第I層とした表土がプライマリーな堆積でないことを示している。しかし、A地点の第V層に相当する層位以下は、A地点と同じく第VI層、第VII層と確認され、プライマリーな堆積を確認できた。今回の試掘では、A地点の第VIII層に相当する層位の上部まで掘り下げて調査を終えた(第9図)。調査区の層序は第V層ならびに第VI層の層厚はほぼ一定であり、東西方向、南北方向ともに比高差は約10cm内に収まりほぼ平坦である。ところが第VII層は $\alpha$ 区と $\delta$ 区とで層厚が大幅に異なり、第VIII層と第VII層の層理面では東西方向で約50cmの比高差が存在し、西側に向かって下っていく傾斜を確認できる。B地点の東側は西野川に開析された谷に落ち込み、西側は沢に区切られている。しかし、層序を見る限り現在の西側の沢による開析とは別に第VII層堆積以前にも、西側に沢が存在したことが窺える。

(木内)



第9図 B地点試掘調査区の層序(1/40)



## 第Ⅲ章 縄文時代の遺物

### 第1節 概要

第6次発掘調査の結果、U～X-16・17区では縄文時代の遺物が計45点発見された。第5次調査におけるV-16区の試掘で発見された土器破片1点(第14図22)を合わせると、合計46点を数える。その内訳は石器3点、土器43点である。

石器は、第1次～第5次までの発掘調査で石鏃13点・有舌尖頭器20点・槍先形尖頭器2点・両面調整石器9点・細部調整剥片1点の資料が得られている。これらの出土層位はすべて表面採集及び第Ⅰ層(耕作土)から出土したもので、プライマリーな出土状況ではない。有舌尖頭器は草創期前半の隆起線文系土器群に共伴することの知られる石器(樋口・森嶋・小林 1965)である。同時に第1次～第5次までの発掘調査で発見されている他の石器もまた、隆起線文系土器に伴う可能性は高いが、本遺跡の出土遺物中には早期以降の土器片も含まれており断定はできない。第6次調査で発見された石器は、石鏃3点のみで有舌尖頭器は出土していない。

上記以外の土器には、1959年の調査で発見された早期粕畑式土器、前期木島式土器がある(森嶋 1959)。また、柳又遺跡B地点では草創期隆起線文系土器のほか、前期の土器の出土が報告されている(樋口 1961)。

1990年より本学が行っている過去5回の発掘調査でも、第1次調査においてA-22区の第Ⅲ層より早期前半の押型文土器破片2点、縄文を施文した早期の土器破片17点の計19点、第2次調査においてT-11区の第Ⅲ層から草創期の土器破片1点とC-9区の第Ⅴ層から草創期の土器破片がそれぞれ2点出土しており、第3次調査ではX-8区の第Ⅰ層から微隆起線文土器片が1点出土している。第5次調査ではV-16区の第Ⅱ層から土器片破片が1点出土(本書で報告)しているほかに、草創期の土器1点がある。第6次調査ではU～X-16・17区の第Ⅱ層～第Ⅳ層にかけて土器破片が45点出土した。これらの資料により、本遺跡における縄文時代の様相が少なからず明らかとなった。(野村)

### 第2節 遺物の分布と層位

第1次～第5次の発掘調査区域は、台地頂部の平坦地上を中心に設定されている。この平坦部分は畑地として開墾され、第Ⅴ層上部より上位の土層は削剝された状態になっている。したがって縄文時代の包含層が残されていない部分が多く、わずかにC-9区第Ⅴ層出土の草創期の土器片2点、X-8区第Ⅰ層(耕作土)出土の草創期の土器片1点が存在する程度である。

一方、縄文時代の包含層と思われる第Ⅱ層～第Ⅳ層上部の残されている既調査区は、A-22区とT-11区の2区だけで、A-22区の第Ⅲ層から早期の土器破片19点、T-11区の第Ⅲ層から草創期の土器破片1点が出土している。A-22区は旧地形が埋没谷状に落ち込んで、耕作の影響をほとんど受けなかったようで、層序は第Ⅰ層から厚く整然と堆積した状態であった。T-11区は緩く東側の西野川へ向かって傾斜しており、耕作による影響が少なかったとみられる。今回調査したU-X-16・17区における層序もまた、耕作による影響が少なかったと見られ、第Ⅰ層から整然と堆積した状態であった。当該調査区における微地形は、調査区の層序で第Ⅱ層から第Ⅳ層上部を見る限り、南から北へ向かって約10cmの比高差を認めるが、さほどではない。しかし、西から東へ向かっては、約50～60cmの比高差を示し、東側に向かって緩やかに傾斜している（第7図）。そのためか第Ⅳ層では堆積状況の乱れがやや認められる。

今回の報告する遺物は石器3点、土器破片43点の計46点である。石器はいずれも石鏃である。一方、土器破片は隆起線文系土器に比定される第1群土器と、表裏縄文系土器に比定される第2群土器に大別され、接合作業を通して行った個体分類によって、第1群土器で2個体（個体A・B）、第2群土器で6個体（個体C～H）の計8個体が把握されている（第4節参照）。

土器の出土層位は、第Ⅰ層4点、第Ⅱ層29点、第Ⅲ層3点、第Ⅳ層7点となり、第Ⅱ層から第Ⅳ層にかけて幅広く分布するが、点数のうえでは第Ⅱ層からの出土が多い。大別した土器群毎に出土層位を見ると、第1群土器では第Ⅳ層1点、第Ⅱ層2点、第Ⅲ層1点、第Ⅳ層2点となり、第2群土器は第Ⅱ層18点、第Ⅲ層1点、第Ⅳ層2点となる。

第1群土器は第Ⅰ層から第Ⅳ層にかけて、第2群土器は第Ⅱ層から第Ⅳ層にかけて幅広く分布しているが、土器群別に層位毎の出土数を比較すると、第1群土器では第Ⅱ層と第Ⅳ層とに出土数のピークがあり、第2群土器では第Ⅱ層に出土数のピークがある。遺物出土点数の多い層位を本来の包含層と考えれば、各土器群の包含層は上記の層位に相当する。その場合、第2群土器の出土ピークである第Ⅱ層をまたいで、第1群は第Ⅰ層と第Ⅳ層に出土ピークがあるが、より下層に本来の包含層を求めるとすれば、第1群土器の包含層は第Ⅳ層ということになる。

垂直分布図上でこれらの土器破片の出土状況を確認すると、前述した微地形に対応する層位の傾斜に沿って土器破片が分布する様子が窺える。特に接合した個体、あるいは同一個体と認定した個体を指示する配線（第10図）を見るとその状況が具体的に把握できる。大別した土器群を個体別に相互に比較すると、第1群土器の個体A・Bと第2群土器の個体C～Hとは垂直分布の上で上下関係を持ち、第1群土器の個体接合線に対して、第2群土器の同一個体指示線は多少の交差はあるものの相対的に上位で結ばれている。このような微地形の傾斜と対応する土器破片の分布状況は、遺物の出土層位がほぼプライマリーであり、出土点数に基づく本来の包含層の特定に妥当性を与えるものである。

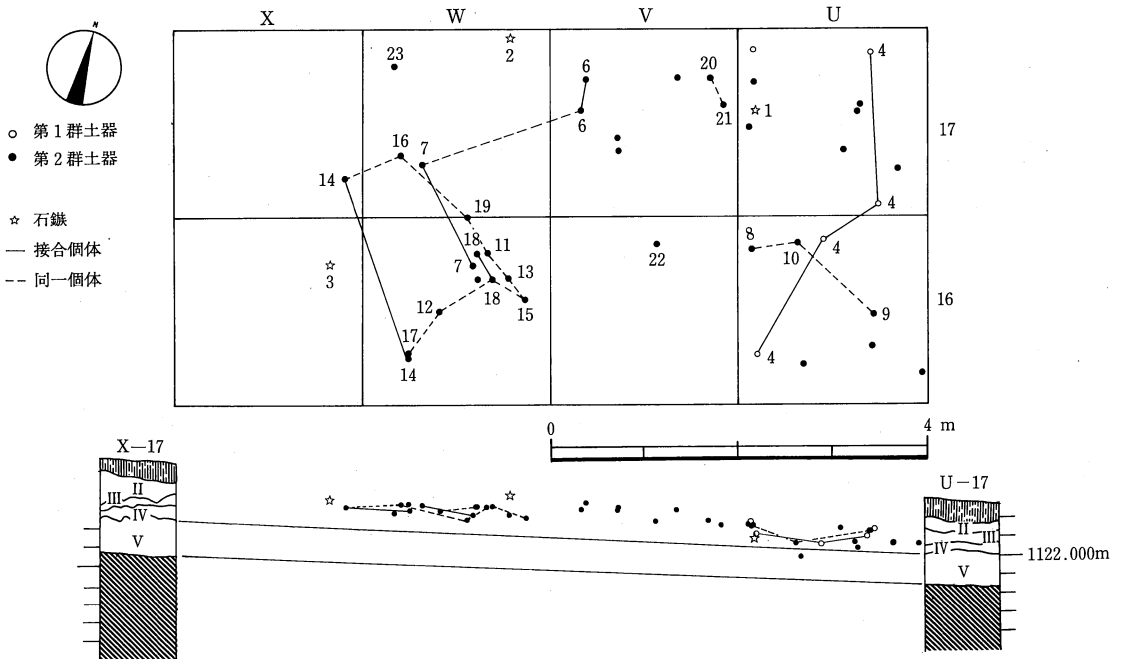
第1群土器が比定される隆起線文系土器を含む縄文時代草創期前半の文化層は、これまでに

第2節 遺物の分布と層位

第III層下部から第IV層中に措定されており（永峯・谷口編 1993、谷口・宮尾編 1995）、第1群土器の包含層を第IV層とする本調査の層位的所見とも合致する。また、第2群土器の包含層を第II層と捉えた場合、第1群土器に比べて相対的に上位に位置することになり、第2群土器が比定される表裏縄文系土器と第1群土器が比定される隆起線文系土器との編年的関係の一般的な見解とも矛盾しない。

平面分布から見た場合、U-16区8点、U-17区11点、V-16区1点、V-17区7点、W-16区10点、W-17区4点、X-16区1点、X-17区1点と本調査区のほぼ全域で散漫に出土している。大別した土器群毎に見ると、第1群土器は調査区最東のU-16・17区に分布が限られる。一方、第2群土器は第1群土器と重複して調査区全体に分布するものの、特にW-16・17区、V・U-16区、W~V-17区の3か所にまとまっており、大別した2つの土器群の間で、分布のまとまりに相違が見られる。なお、第2群土器の分布のまとまりを個別別に見ると、W-16・17区には個体Cと個体Eが、V・U-16区には個体Dと個体Gが、W~V-17区に個体C、個体F、個体Hがあり、個体Cを介してW-16・17区のまとまりとW~V-17区のまとまりには関連性が指摘でき、第2群土器の分類に分布のうえからも妥当性を与えている。

石鏃3点はそれぞれU-17区、W-17区、X-16区であり、平面分布上のまとまりは見られない。前述した土器の平面分布のまとまりと重ね合わせると、石鏃は主に第2群土器の分布上のまとまりと一致する。さらに出土層位は第II層2点、第IV層1点であり、第2群土器とは出土層位の遺物数の傾向のうえでも一致する。（野村）



第10図 縄文時代の石器と土器 分布状態(1/80)

### 第3節 石 器

縄文時代の石器として石鏃3点がある。3点の石鏃はいずれも小形で、基部形態が凹基無茎か平基無茎である(小林・佐原 1964)。なお、平面形態は二等辺三角形と正三角形とに区別される(鈴木 1974)。このような形態の特徴と、今回の調査で同じ第II層～第IV層にかけて出土している土器群(第4節参照)の存在を考え合わせると、縄文時代草創期～早期初頭に帰属する可能性は高いが、過去の調査で他に早期の押型文や、前期の土器破片が出土しており、帰属時期を断定するには至っていない。

なお、石鏃の出土位置や計測値等のデータは一覧表は巻末(表3 73頁)に示してある。

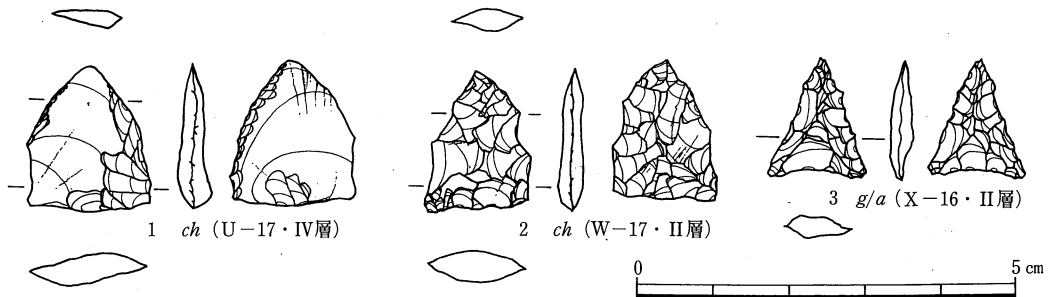
#### 石鏃(第11図1～3)

1は平基無茎石鏃で、平面形態は二等辺三角形を呈しており、両縁辺部は外湾する。剥片を折断して石鏃に適した素材を作り出し、いわゆる両面調整はほとんど行われてはいない。そのため、剥離面を大きく残し、表面右側縁と左側縁にわずかに調整が加えられているにすぎない。素材剥片の打点側を基部とし、主要剥離面を残す裏面では、バルブを除去するように基部調整が行われている。なお、素材の剥離面を残す同様の石鏃は、第3次調査においても報告(永峯・谷口 1993)されている。調整は表面から裏面、先端部から基部へと進行する。チャート製。第IV層出土。

2は平基無茎石鏃である。平面形態は二等辺三角形であり、全体に粗い調整のため縁辺部は不定形をなしている。また、右逆刺は折損している。調整は表面から裏面へ、先端部から基部へと進行している。チャート製。第II層出土。

3は、凹基無茎石鏃である。平面形態は、二等辺三角形を呈し、側縁は直線的で、基部のえぐり込みは浅い。他の2点に比べると調整は全体に緻密であり、裏面から表面へ先端部から基部へと進行している。玻璃質安山岩製。第II層出土。

(羽山)



第11図 縄文時代の石器 石鏃(1/1)

## 第4節 土 器

今回調査対象にしたX～U-16・17区からは、総数43点とこれまでの調査中最も多く出土した。第5次調査におけるV-16区の試掘によって、当該地区では第V層上位より上層の良好な遺存が確認され、また、すでに土器破片1点が発見されていたが、予想以上に多くの土器破片を発見することになった。

これらの土器破片を報告するにあたって、最初に破片の部位の同定を行ったが、いずれもかなりの小破片であるため、明確に部位を特定できる口縁部や底部の破片を、その他の破片から抽出し、それ以外は胴部の破片とした。ただし、底部破片は今回の出土資料には含まれていない。その後、これらの破片の接合作業を通じて、可能な限り個体分類を行った。把握した個体数は全部で8個体であり、個体A～個体Hとアルファベットで個体番号を表記した。これらは土器破片数にして27点を数えるが、これらは同時に文様の有無や成形・整形の特徴から、以下の2つの土器群に大別される。各土器群に分類したそれぞれの個体は、( )に個体番号を併記してある。

第1群土器：器表面がよく磨かれた無文土器。隆起線文をもつ破片はないが、隆起線文系土器に比定した。(個体A・B)

第2群土器：器体外面に縄文があり、器体内面に指頭圧痕等の整形痕が顕著に見られる土器。表裏縄文系土器に比定した。(個体C～H)

第1群土器が隆起線文系土器、第2群土器が表裏縄文系土器に比定される根拠は、以下の項目で群別に記載するが、第2群土器とした表裏縄文系土器は、柳又遺跡A地点と同遺跡の所在する開田村内の他の遺跡を含め、はじめての発見である。

なお、個体分類ができなかった16点の土器破片は、いずれも小破片でそれら自体から大別に見合うだけの属性をも抽出できなかったため、その他の土器群としてある。また、これらは凶化や採拓が困難なため、本報告書に掲載をしていない。

(及川)

### (1) 第1群土器 (第12図4・5)

第1群土器に分類した破片は6点ある。それらの破片は個体Aと個体Bの2個体に分けられ、個体Aとして4点、個体Bとして2点を数える。いずれも胴部破片であり、口縁部や底部は含まれていないため、器形を復元することはできない。

第1群土器は無文土器をまとめたものであるが、第2群土器に比べ金雲母を多量に含み、研磨されたように滑らかな器面を呈する。草創期の土器群では、隆起線文系土器に特にこのような特徴が指摘されている(小林編 1982)。隆起線文系土器は、過去に柳又遺跡A地点(小林・

谷口編 1991)、柳又遺跡B地点(樋口・森嶋・小林 1965)で、その存在が確認されている。本調査において出土した第1群土器には、隆起線文自体は見られないものの、胎土、器面調整等で過去の出土例との類似が認められることから、隆起線文系土器に比定できるものと考えられる。以下個体別に記載する。

なお、これらの土器破片の出土位置ならびに観察事項は、巻末(表3 73頁)に掲載してある。

**個体A (第12図4)**

4は4点の破片が接合した胴部破片である。色調は内外面ともに暗褐色を呈する。焼成は良好で非常に硬質に仕上がっている。胎土には金雲母、白色粒子を含み、特に金雲母の量は非常に多い。内面には横位の擦痕が認められる。外面は極めて滑らかに磨かれている。

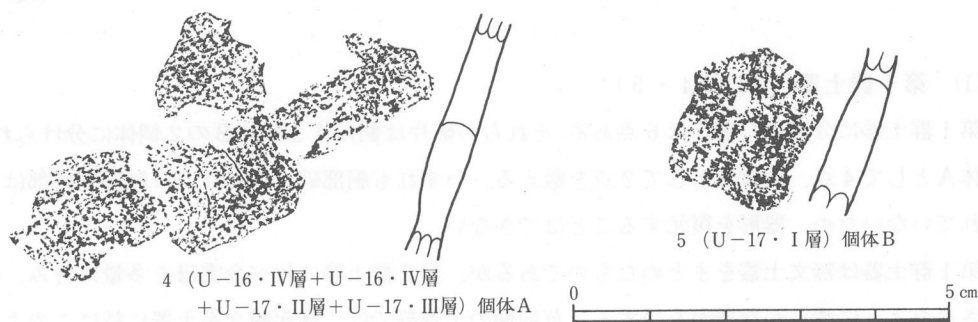
**個体B (第12図5)**

個体Bには、接合しない胴部破片2点があるが、実測可能な1点を5として図示した。色調は外面が黄褐色、内面は黒褐色を呈す。焼成は良好で硬質に仕上がっているが、個体Aほどではない。胎土には長石、特に金雲母を多量に含むほか、毛痕のような細い気泡が認められる。器面は極めて滑らかである。また、器体内面には炭化物の付着が明瞭に観察される。

(佐々木)

(2) 第2群土器 (第13図6~19、第14図20~23)

第2群土器に分類した21点の土器破片は、個体C~個体Hの6個体に分けられる。これらの個体は、接合した破片を含むもののいずれも破片で構成されており、器形を復元し得るものは存在しない。また、底部破片は1点も発見されていない。わずかに口縁部破片を含む個体が個体C(第13図6)と個体D(第13図8)の2個体あり、いずれも口縁の外反する器形を推定できる。この2個体は口唇の作りに違いがあり、個体C(第13図6)は口唇がやや肥厚し強く外反するのに対し、個体D(第13図8)の口唇は直線的に立ち上がっている。このような相違は製作工程上から見ると、口縁までの器体成形後に、さらに粘土帯を1枚巻きつけるか否かにかかっている。なお、個体Cの口唇端部には縄文原体が押圧施文されており、個体間で文様施文



第12図 縄文土器(1) 第1群土器(1/1)

上も口唇の作りに差異がある点が注意される。

各個体を構成する破片の表面には縄文が観察される。前述の個体Cならびに個体Dに含まれる口縁部破片（第13図6・8）の外面に施された縄文は、器体に対して縦走するが、個体Cや個体Dに限らず胴部破片の外面に施された縄文は、いずれも器体に対して斜行する。つまり、縄文の施文方向には一個体のなかで少なくとも二方向あるものが存在することがわかる。ちなみに器面の粘土の移動方向を観察する限り、本遺跡の資料は斜位に施文されるか横位に施文されるかのいずれかである。個体Cと個体Dとに関する限り、部位と縄文の施文方向には相関が認められる。このような縄文の施文方向の相違が、土器器面の文様帯を意識してあえて縄文の流れを違えたものなのか、あるいは器形に制約された技術上の問題に過ぎないものなのか、判断できる材料はないが、部位によって施文方向が異なる点だけは指摘しておきたい。なお、土器の内面にあたる裏面には指頭圧痕などの整形痕が顕著に残されているが文様は認められない。

第2群土器を比定した表裏縄文系土器は、花の湖遺跡の発掘調査で発見され（原・紅村 1958）、その後、大谷寺洞穴遺跡（埴 1976）、増野川子石遺跡（酒井 1973）などの調査を通して内容が明らかにされた土器群である。いくつかの見解はあるものの（戸田 1988、宮崎・金子 1989、宮崎・金子 1995、山形 1991、広瀬 1995）概ね草創期末葉から早期初頭に位置づけられる。また、表裏縄文系土器が発見される遺跡は第2章第1節(4)でまとめたように、中部地方を中心に分布することが把握されている（宮下 1976）。

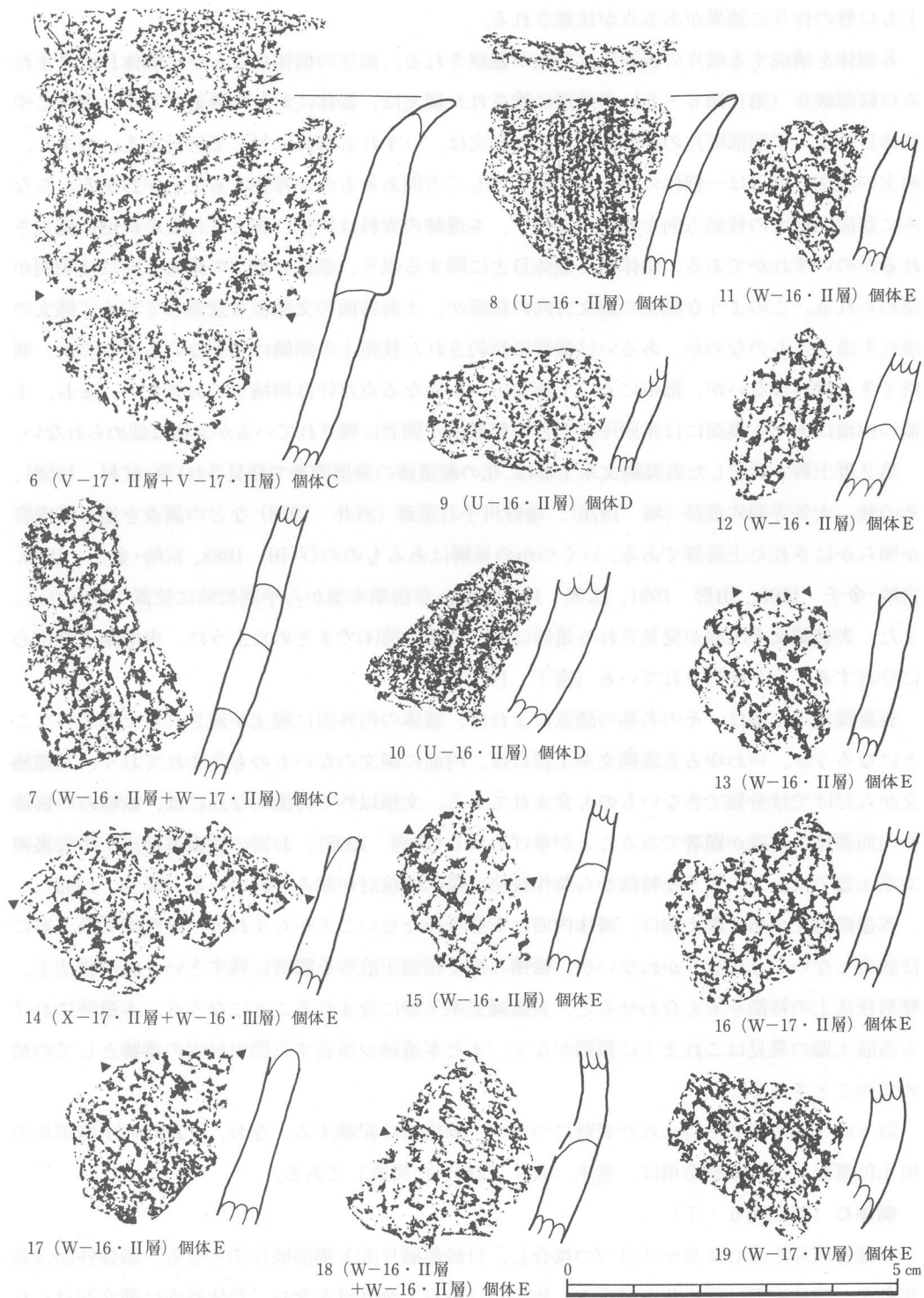
表裏縄文系土器は、その名称の語意によれば、器体の内外面に縄文が施された土器ということになるが、いわゆる表裏縄文系土器には、内面に縄文のないものも含まれており、文様施文からだけでは分類できないものも含まれている。文様以外で特徴的な点には、輪積みの痕跡や内面調整の痕跡が顕著であることが挙げられる（広瀬 1995）。お宮の森裏遺跡出土の表裏縄文系土器では、このような特徴から製作技法の復元的検討が試みられている（新谷 1995）。

本遺跡出土の第2群土器は、器体内面に文様を持たないことからすれば、表裏縄文系土器には該当しないことになりかねないが、輪積み痕や指頭圧痕等を顕著に残すという成形技法上、整形技法上の特徴を考え合わせると、表裏縄文系土器に含まれることになる。本遺跡における当該土器の発見はこれまでに類例がなく、また本遺跡が所在する開田村内の遺跡としての初めてのことである。

以下に今回の調査で得られた資料について、個体別に記載する。なお、これらの土器破片の出土位置ならびに観察事項は、巻末（表4・73頁）に掲載してある。

#### 個体C（第13図6・7）

口縁部破片を含む4点が2点ずつ接合し、口縁部破片(6)と胴部破片(7)となる。器体外面は黄褐色を、器体内面は黒褐色を呈する。胎土には長石・金雲母を含む。器体外面に縄文が見られる。器体内面に文様はないが、指頭圧痕や指頭のナデが観察できる。

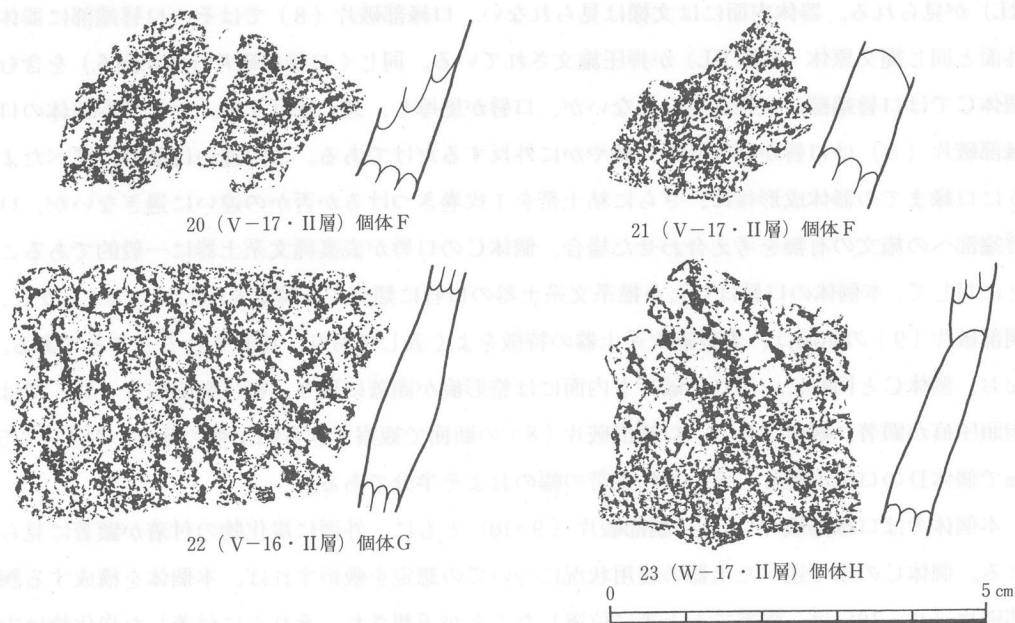


第13図 縄文土器(2) 第2群土器(1/1)



口縁部破片(6)の接合箇所は、成形時の粘土帯接合面にあたる。しかし、接合する2つの破片は器厚が異なり、接合後の器体断面形は、接合箇所より下位で薄くなって外面に段差を生じている。そして、器体の薄くなっている下位の外面には、口縁に対してやや斜行する縄文(原体RL)が観察されるが、上位の外面には口縁に対して縦走する縄文(原体RL)が見られ、下位の外面と連続しない。また、接合箇所になる上位破片の下端では縄文が不自然に欠け落ちている。ちなみに胴部破片(7)では、口縁部破片(6)の下位と同様に口縁に対してやや斜行する縄文(原体RL)が観察される。文様の施文方向の違いについては、土器の器面全体の中で文様帯構成を意識し、文様効果が異なるように単に施文方向を違えている場合も考えられるが、口縁部破片(6)の粘土帯接合面にあたる接合箇所で器厚が異なり、外面に段差を生じている事実から考えて、上位の粘土帯を積み上げた際に引き伸ばされた粘土の器体外面部分が剥落した結果として、不連続な縄文が生じたものと思われる。その一方で器体外面が剥落したはずの下位部分にも縄文が見られることから、本個体では少なくとも口縁付近では粘土帯を積むたびに、縄文を施文するという工程がとられていたことになる。これに類する土器製作技法は、本遺跡と類似した土器のあるお宮の森裏遺跡で指摘されている(新谷 1995)。お宮の森裏遺跡では、この技法が表裏縄文系土器に後続する押型文土器に特徴的に見られることから(小杉 1987)、この技法の見られる土器を表裏縄文系土器の中でも新段階に位置づけている。この見解に従えば、本個体も同段階に位置づけられるものである。

このような土器製作技法の適用を本個体では口縁付近に限定したが、その根拠として口縁部



第14図 縄文土器(3) 第2群土器(1/1)

破片（6）と胴部破片（7）との間で輪積みされる粘土帯の幅が異なる点と胴部破片（7）における縄文施文のタイミングが挙げられる。口縁部破片（6）で観察できる粘土帯の幅は、肥厚し外反する口唇の欠け口で観察できる粘土帯の接合痕と前述の接合部位の観察から約3cmと推定されるが、胴部破片（7）の断面割れ口で観察される最低2枚の粘土帯は、その1/3足らずのおよそ1cm単位である。そして、胴部破片（7）の縄文は、これらの粘土帯の積み上げを終えた後に施文されており、口縁部破片（6）とは明らかに施文のタイミングが異なっている。以上のように部位によって粘土帯の幅、文様施文のタイミングを使い分けている点には留意しなければならない。

その他に本個体では、土器の使用状況を炭化物の付着から窺い知れる。口縁部破片（6）の内面には油脂状の炭化物が付着しているが、胴部破片（7）には炭化物の付着はない。口縁部の内側に炭化物が付着する現象や胴部外面にのみ被熱を受けている状況は、前述のお宮の森裏遺跡の資料にも見られ、それを「土器使用時において煮沸された内容物が、液上に飛び跳ねたため口縁部に付着した」（新谷 1995）結果であると推察している。本個体にもお宮の森裏遺跡と同様の状況が想定できるものと思われる。

#### 個体D（第13図8～10）

口縁部を含む破片3点から構成されるが、接合した破片はない。器体内外面とも暗褐色を呈し、胎土に長石・金雲母を含む。口縁部破片（8）では器体外面に口縁に対して縦走する縄文（原体RL）が見られ、胴部破片（9・10）では器体外面には口縁に対して斜行する縄文（原体RL）が見られる。器体内面には文様は見られない。口縁部破片（8）ではその口唇端部に器体外面と同じ縄文原体（原体RL）が押圧施文されている。同じく口縁部破片（第13図6）を含む個体Cでは口唇端部に文様は見られないが、口唇が肥厚し、強く外反する。対して本個体の口縁部破片（8）は口唇が肥厚せず、緩やかに外反するだけである。この違いは最初に述べたように口縁までの器体成形後に、さらに粘土帯を1枚巻きつけるか否かの違いに過ぎないが、口唇端部への施文の有無を考え合わせた場合、個体Cの口唇が表裏縄文系土器に一般的であることに対して、本個体の口唇はむしろ撚糸系土器の口唇に類似する特徴を示している。しかし、胴部破片（9）の屈曲は、表裏縄文系土器の特徴をよく表しており、注意されるべきところである。なお、個体Cと同様にいずれの破片も内面には整形痕が顕著に残り、特に胴部破片（10）では指頭圧痕が顕著に観察できる。口縁部破片（8）の断面で観察できる粘土帯の幅は、およそ1.5cmで個体Dの口縁部破片（6）の粘土帯の幅のおよそ半分である。

本個体では口縁部破片（8）、胴部破片（9・10）ともに、外面に炭化物の付着が顕著に見られる。個体Cの項で述べた土器の使用状況についての想定を敷衍すれば、本個体を構成する胴部破片（9・10）は、胴部でも上半に位置したことが予想され、それらに付着した炭化物は内容物がふきこぼれた結果と想像される。本個体と同様に、胴部に炭化物が付着している個体F

の胴部破片(20・21)の場合も、胴部上半であることが推定されることになる。

#### 個体E (第13図11~19)

胴部破片11点から構成される。2点が接合する破片が2例ある。器体の内外面ともに赤褐色を呈し、第2群土器の他の個体に比べて非常に堅緻である。胎土には砂粒・白色粒子を多く含む。器体外面には斜行縄文(原体RL)が見られる。一方、器体内面には文様はないが、指頭整形痕がよく観察される。指頭整形痕は粘土帯と粘土帯との接合部分に集中し、粘土帯に平行して丹念にナデつけられている。また、粘土帯と粘土帯との接合部分の内面は盛り上がり、器体が厚くなっている。

なお、外面では粘土帯と粘土帯との接合部分に盛り上がりは見られない。むしろ胴部破片(12、15、16)の外面に見られるようにヒビ状の輪積み痕が顕著で、粘土帯の積み上げに際しての外面の整形は内面に比べて粗かった様子が窺える。ちなみに外面の縄文はヒビ状の輪積み痕をまたいでおり、少なくとも胴部では粘土帯の積み上げ終了後に施文されている。他にはこの外面に刻まれた縄文は節が浅いことが注意される。堅緻に焼成されていることをもって、器面があまり痛んでいないとすれば、元来器面に刻まれた縄文の節が浅かったといえる。このように器面に刻まれた縄文の節が浅くなるには、器面が乾燥してから施文した場合が考えられる。

目を転じて成形や整形に関わる点に目を向けると、胴部破片(13、14、17)の上端の割れ口と胴部破片(18)の接合箇所には擬口縁(佐原 1974)が観察できる。擬口縁は粘土帯の積み上げ段階に、作業の中断があった可能性を示しており、乾燥の進んだ器面に施文された縄文が見られることと矛盾しない。

成形途上で乾燥という工程をとる場合、大形土器の製作、屈曲の激しい器形の土器の製作などが考えられる。これまで知られている表裏縄文系土器にはそれほど大形のものはないが、胴部付近の屈曲が強いものは多数存在する。また、個体Cや個体Dでも触れたお宮の森裏遺跡の報告では擬口縁が顕著なことから胴部付近の屈曲が強いこととの相関、擬口縁が胴部の最大径付近に見られることを指摘(新谷 1995)している。本個体については、胴部破片(18)に見られる器体の屈曲からも、お宮の森裏遺跡と同様の器形が復元でき、提示した破片が胴部最大径付近であることが推察される。

ところで、これらの擬口縁の断面形は内面側に傾斜しているが、外面側はほぼ器体の外面にあたる。胴部破片(14)では擬口縁となっている割れ口の内面側縁辺に、積み上げた粘土帯が残っているが、外面側縁辺には残存しない。この点は外面に見られるヒビ状の輪積み痕が見られる胴部破片(12、15、16)の存在や、胴部破片(12、13、16)で粘土帯と粘土帯との接合部分の内面が盛り上がること、そこに集中する内面の指頭整形痕の存在とも矛盾しない。つまり、粘土帯を積み上げた際に、内面側は丁寧に整形して接着効果を高めるが、外面側は簡単な整形で済ませているのである。このように内面と外面とで整形手法に差がある事実もまた、これら

の破片が胴部最大径付近のもので、内傾するように粘土帯を積み上げたことを傍証していると思われる。

**個体F** (第14図20・21)

胴部破片が2点ある。接合する破片はない。器体は内外面ともに暗褐色を呈している。胎土には、金雲母のほか繊維状の気泡が認められる。器体外面には、斜行縄文(原体 RL)を観察できる。内面には文様は見られないが、指頭整形痕が顕著に見られる。また、器体外面には同時に油脂状の炭化物の付着が多く、先に示した推定を敷衍すれば、本個体に分類される胴部破片もまた、胴部でも上半に位置するものと考えられよう。

**個体G** (第14図22)

胴部破片1点。器体外面は暗褐色を、内面は褐色を呈する。胎土に石英が含まれる。器体外面は、斜行縄文(原体 RL)を観察できる。内面には文様がなく、横方向にナデた指頭整形痕と指頭圧痕が観察できる。破片の上端と下端とがほぼ平行しており、粘土帯の接合面で破損したものと考えられる。この破片の上下幅が粘土帯の上下幅と考えるならば、3cm程度の粘土帯を積み上げていったことが推定できる。破片上端の器厚はやや薄くなっているが、粘土帯の積み上げに際して、接合部分を圧着させるため、強く指頭を押し当てた結果、薄くなったものと推定される。

**個体H** (第14図23)

胴部破片1点。器体の内外面ともに暗褐色を呈する。胎土には白色粒子が含まれる。器体器表面は斜行縄文(原体 RL)を観察できる。内面には文様は見られない。器体の断面形を観察すると、粘土帯と粘土帯との接合部分で折れ曲がるように屈曲している。この部分の内面では特に指頭整形痕が明瞭に認められる。このような器体の断面形は個体Eの胴部破片(18)でも見られたもので、お宮の森裏遺跡第11号住居跡出土土器に類似した資料がある。同遺跡の報告で「胴部が最大径になる部分では上からの加重が最もかかるため、土器製作時においては、この部分で粘土帯を積み上げる行為を一時停止し、ある程度乾燥させて形崩れを防止した」(新谷 1995)ことが想定されており、個体Eについて同様の手法を読み取ることができた。本個体については、擬口縁の割れ口をもった破片ではないが、器体の断面形から判断して同じ手法を推定でき、胴部破片(23)は最大径付近に位置するものと思われる。ただし、本個体は胴部破片でありながら内外面に炭化物の付着が観察されており、胴部上半に位置する破片であることが同時に推定される。

器体の断面形が屈曲する部分を粘土帯の上端とし、それにほぼ並行する破片下端の割れ口を接合面ないしはそれに近い部分と考えると、粘土帯の上下幅は2.5cm程度と推定され、個体Gで推定した粘土帯の幅と近似する。

(及川・設楽)

## 第IV章 旧石器時代

### 第1節 概 要

第6次調査は、第5次調査の際に試掘したV-16区で明らかになった第V層上位よりも上層における縄文時代の遺物の包含状態を把握することが主な目的であったが、同時に旧石器時代の各文化層について、遺跡北東部における遺物のひろがりを確認することも目的にしていた。第5次調査で発掘したA-C・Z-15・16区の北東にあたるU-X-16・17区の8グリッド、面積32㎡に設定した調査区は、これまでの調査区中最北東部に位置する。V-16区は第5次調査の試掘で、第VII層まで掘り下げられており、今回の調査では引き続き第VII層から第VIII層までを掘り下げた。その他の調査区は、日程の都合により第V層までの掘り下げに留まった。調査の結果、当該区域の第V層は西から東へ向けて傾斜しており、その比高差は50～60cmであることが判明した。今回の調査で出土した旧石器時代の遺物は、調査面積32㎡でわずかに144点に過ぎず、散漫な分布状況を示している。これらは第IV層から第V層上部にかけて出土している。これまでの調査区域に比べ、遺物量の少なさが顕著である。

今回の発掘では調査深度が第V層までにとどまったこともあり、出土遺物の文化層認定にあたっては、第1次調査～第5次調査で把握された各文化層の認定基準である出土層位と石器群の特徴に準拠し、主に各石器の出土層位に従って文化層を認定した。ただし、各文化層の石器群で特徴的な器種に関しては、該当する文化層に認定している。また、母岩別資料分析を行った結果、第1次調査～第5次調査において文化層の帰属が明らかとなっている母岩別資料と接合した場合は、出土層位にかかわらずこれまでに把握されている各母岩別資料の帰属する文化層とした。

その結果、今回の調査資料の大部分は第V層文化層に帰属することになった。それらの中には、第V層文化層に特徴的な石器である細石刃石核1点が含まれ、出土層位に従った文化層認定の蓋然性を高めている。その一方で、第V層出土の石器中に、第VI層L文化層母岩別資料8とした接合する剥片1点(第25図5)もあることから、同様に第VI層L文化層に帰属する石器が含まれている可能性も否定できない。

その他に、今回の調査で特筆される点は、V-16区において第5次調査まで遺物が未検出だった第VIII層中から、敲石1点、台石1点、剥片2点、礫9点が出土したことが挙げられる。これらの遺物は出土層位に従って、新たに第VIII層文化層として捉えることとした。しかし、第VIII層の調査はV-16区の面積4㎡に限られるうえ、当グリッドで観察する限り、第VII層以下はこれまでの調査区に比べ層厚があり、層位的な乱れが著しい。そのため、第VIII層文化層としたこ

これらの遺物が、プライマリーな遺存状態を示していないおそれも考えられる。

今回の調査で追加された出土資料は、第V層文化層（第17～21図）で細石刃石核1点、挟入石器3点、細部調整石刃2点、石刃1点、細部調整剥片5点、微細剝離痕付剥片3点、敲石4点、剥片・碎片87点、礫13点である。第VI層L文化層（第22～26図）では、削器1点、石核1点、剥片・碎片8点、礫1点である。

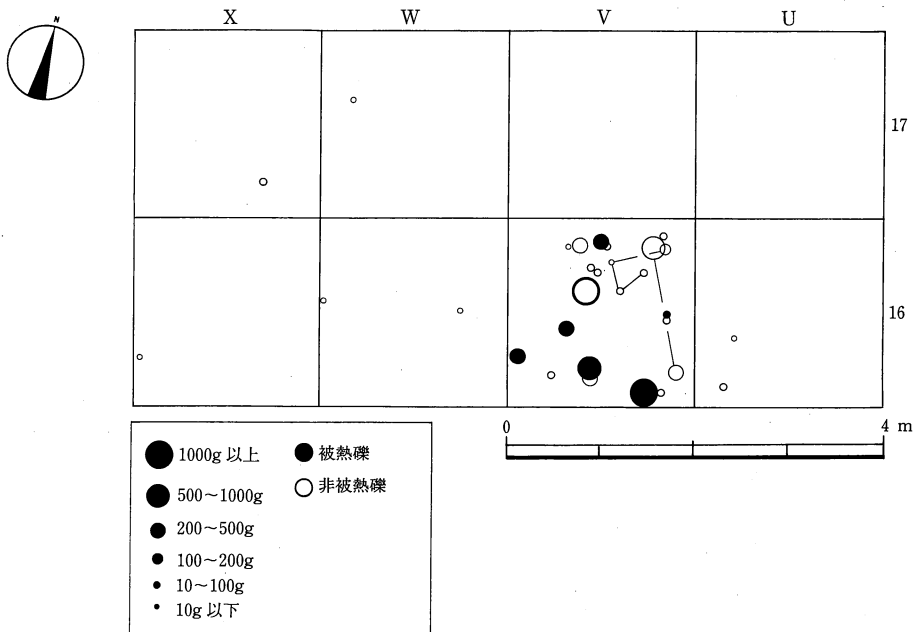
各文化層の石器石材には、第V層文化層でチャート・黒曜石・玻璃質安山岩・砂岩・安山岩があり、第VI層L文化層でチャート・黒曜石がある。なお、新たに設けた第VIII層文化層には剥片石器が存在しない。

本章における本文中の番号は、挿図に対応した石器番号である。これらは文化層を越えて、旧石器時代の本章全体で通し番号となっている。また、石器の出土位置や計測値などのデータは巻末（表5 74頁）にまとめて掲載した。ただし、母岩別資料に関してはこれまでの母岩別資料の提示方法に準拠し、各母岩別資料毎に通し番号（表6 75頁）を付してある。

（風間）

## 第2節 石器の分布と層位

第1次調査～第5次調査における発掘区であるT～Z・A～C-5～16区は、台地頂頭部の



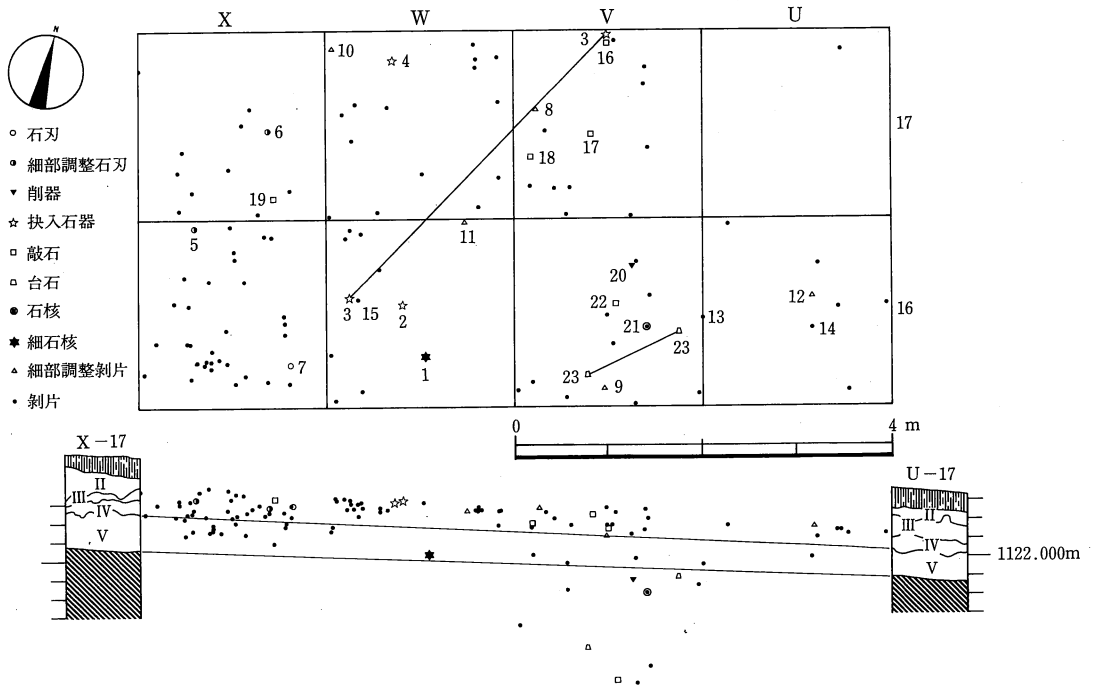
第15図 礫の重量・被熱状態(1/80)

第2節 石器の分布と層位

平坦面を中心に位置し、現地の畑作利用に伴う第V層上位より上層の削剝が著しかった。これまで第II層から第IV層の堆積が確認されたグリッドは、A-22区、T-11区のみであったが、第5次調査において試掘されたV-16区で、第II層から第IV層までの層位が良好に遺存している状態が確認された。続く第6次調査では、このV-16区を含むU~X-16・17区の計8グリッド、面積32m<sup>2</sup>を対象に調査を行った(第6図)。

今回の調査では特に前述の第II層から第IV層中における遺物包含層の確認に主眼がおかれたが、旧石器時代の各文化層についても遺跡北東部での遺物の広がり注意到注意が払われた。前年の試掘で第VII層まで一度掘り下げられていたV-16区を除いては、本年度の調査深度は第V層までにとどまっているが、第V層では特に台地の東側を流れる西野川に向かって緩やかに傾斜しておりX-16・17区からU-16・17区にかけて高低差約60cmの埋没谷状になっている。そのため、削剝から免れた第II層~第V層までの各層位が確認できた(第7図)。

第V層までに出土した旧石器時代の遺物は、調査面積32m<sup>2</sup>に対して石器23点、剥片・碎片84点、礫31点であり、これまでの調査区域の同面積あたりの遺物出土点数と比較して非常に少ない。その分布状況もすべてのグリッドに遺物は存在するものの散漫な状態で、石器ブロックや礫群として把握することのできる集中は認められない。石器や剥片・碎片は第IV層~第V層に分布するが、特に第V層上位にまとまりがみられる(第16・17図)。



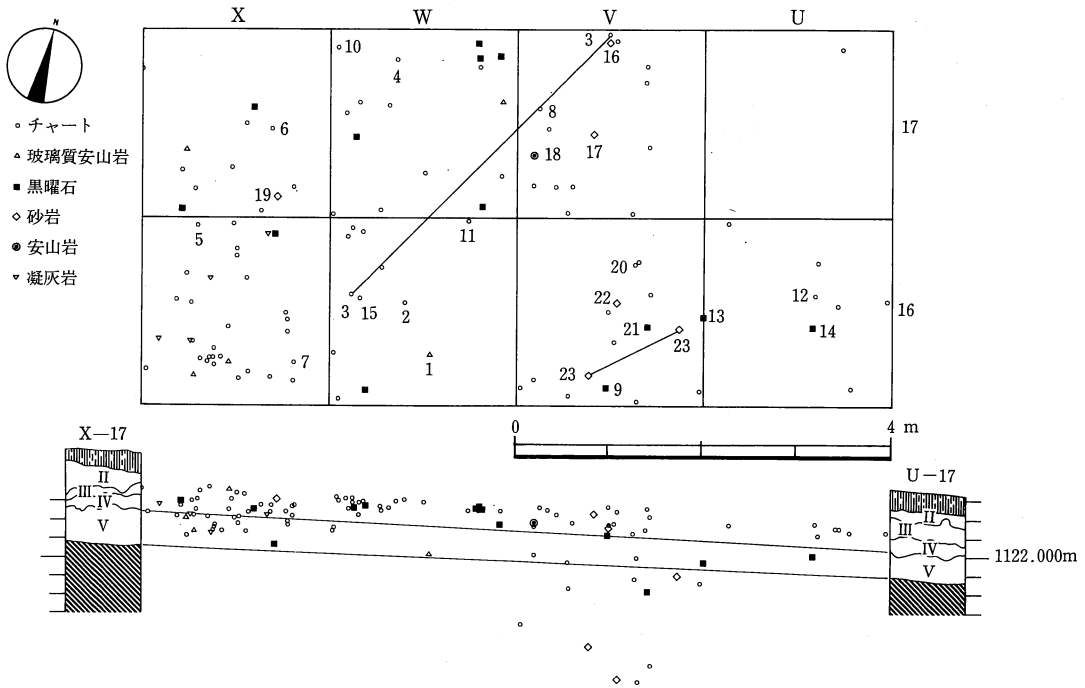
第16図 旧石器時代の石器 器種別分布状態(1/80)

第IV章 旧石器時代

今回、調査深度が第V層までに留まったこともあり、出土遺物の文化層認定は、基本的には出土層位に基づいて行い、大部分の出土遺物を第V層文化層の石器群とした。それらのなかには第V層文化層の指標的石器である細石刃石核が1点含まれており、当該文化層に帰属する判断性を高めている。しかし、母岩別資料分析の過程で第IV層L文化層母岩別資料8への帰属が明らかになった資料があり、あくまでも暫定的な文化層認定である点を断っておきたい。なお、石器製作技術上の特徴や石器石材の特徴から第IV層文化層に帰属することが明確な石器は、今回の調査では検出されていない。

第V層文化層は第1次～第5次までの調査を振り返ると、台地の頂頭部付近のC-7～14区以東で細石刃関係資料の集中がみられる。また、その南東V～Z-5・6・7区においても細石刃関係資料の広がりがみられるが、北側のA～C・Z-15・16区では、細石刃関係資料は発見されていない。

今回の調査では削片系の細石刃石核が1点のみ第V層から出土しているが、細石刃やその他の細石刃関連資料の出土はない。第V層文化層では他に石刃1点、細部調整石刃2点、抉入石器3点、敲石4点、剥片・碎片35点があるが、石器ブロックとして捉えられる平面分布上のまともは見られない。なお、これらの石器のなかには一部第III層や第IV層出土のものも含まれるが、その特徴から第V層文化層と認定した。また、今回の発掘資料については、前回まで調



第17図 旧石器時代の石器 石材別分布状態(1/80)



## 第2節 石器の分布と層位

査で蓄積した資料とともに行った母岩別資料分析の結果、剥片剥離工程等の復元が可能な母岩別資料は得られなかった。

また今回の調査で第V層中から出土した礫は8点のみであり(第15図)、平面的にも、層位的にもまとまりは見られず、礫群は存在しない。今回の出土礫について、前回の調査までに出土した礫をも対象にして接合を試みたが、接合した礫は1点もない。

第IV層L文化層は第1次～第5次までの調査において、台地の頂頭部よりやや東側のA～C・Z-10～14区で礫群および石器ブロックが確認されている。また、その南東にあたるV～Z-5～9区では第IV層を完掘していないもののナイフ形石器、槍先形尖頭器等の密集がみられる。第5次調査の調査区域A～C・Z-15・16区ではナイフ形石器1点が検出されているが、明確な石器ブロックは把握されなかった(第16・17図)。

第6次調査の調査区域内で唯一第IV層が完掘されているV-16区では削器1点、石核1点、剥片2点が出土しており、出土層位に基づいて第IV層L文化層を認定した(第16・17図)。また、X-16区の第V層から出土した剥片1点は、母岩別資料分析の過程で、第5次調査で出土したA・B-13・14区に分布する第IV層L文化層母岩別資料8と接合し、第IV層L文化層への帰属が明らかとなった。なお、このように母岩別資料分析の結果、第IV層L文化層石器群に帰属する石器が第V層から出土している点は、先に示した出土層位に基づく文化層認定の蓋然性と矛盾するが、部分的調査の継続である本遺跡の調査方法に制限された暫定的処置の含まれている点を留意し御容赦願いたい。

V-16区では第VI層から礫が5点出土している(第15図)が、いずれも15～250gと小形で、平面的にも層位的にも散漫な分布をしており、礫群としての把握は困難である。なお、第V層文化層に帰属させた礫同様、第VI層出土の礫についても、前回までの調査で蓄積した出土礫を含めて接合を試みたが、接合事例はない。

V-16区ではさらにこれまで遺物出土の認められなかった第VIII層中から敲石1点、台石2点、剥片3点が検出された。これらを出土層位に準じて新たに第VIII層文化層と認定した。その他に第VIII層からは礫18点の出土(第15図)があるが、これらは平面的にも層位的にも分布のまとまりは認められない。しかし、これらの礫には800～2000gのものが4点含まれており、今回の調査で出土した他の層位出土の礫に比べて突出して大きい。

V-16区のみでしか第VI層以下の層位を確認できないため断定的ではないが、第VII層以下の層位は不安定な堆積を示しており、層厚が安定していない。調査区の東西方向に見られる比高差およそ60cmの傾斜が、このような不安定な層序を生み出す要因をなしている場合も考えられ、その影響を受けてこれらの遺物が本来包含層に存在していないことも考慮しなければならない。

(堅木)

### 第3節 第V層文化層の石器

第V層文化層の石器群は、旧石器時代終末期の細石刃文化期に属するものである。第6次調査の結果、細石刃関係資料では細石刃石核1点が新たに追加された。その他に石器19点、剥片87点、礫13点の合計119点の資料が得られた。

その結果、第1次～第6次調査を通じて当該文化層の出土資料は合計5560点にのぼり、第V層文化層に関する調査面積は304㎡、76グリッドに達している。

細石刃関係資料は、第1次～第6次調査を通じて細石刃275点、細石刃石核9点、細石刃石核原形3点、細石刃石核素材5点、細石刃石核打面形成削片12点、細石刃剥離作業面再生剥片5点、細石刃石核調整剥片6点の遺物が出土している。細石刃生産工程における全段階の資料はすでに出揃っており、細石刃剥離技術に関する特徴や文化系統に関する分析が詳細に発表されている(谷口 1991)。

本遺跡の細石刃剥離技術に関して特に注目されるのは、削片系細石刃石核とその製作工程上に生じる両面調整素材や打面形成削片などの関係資料が主流をなしている一方で、定型的な削片を伴わない楔形細石刃石核が内在している点にある。このように削片系細石刃石核と非削片系細石刃石核とを同時に出土する状況は、近接する柳又遺跡C地点においても確認されており、開田高原における該期の一般的な様相のようである。このことは、湧別技法の流れを汲む北海道・東北日本の技術系統を有する文化と、野岳・休場技法のような西南日本に背景を持つ技術系統の文化とが一遺跡に共存していることを意味し、細石刃文化の系統と編年に関して重要な問題を提起するものである(谷口 1991)。

同様の削片系の細石刃剥離技術は、開田村の北西に位置する岐阜県大野郡高根村日和田高原池の原遺跡B地点でも確認されており、楔形細石刃石核に伴うかたちでの打面形成削片などの出土が報告されている(高根村史編集委員会 1984、麻生ほか 1991)。これらの遺跡は、当該期の文化系統の展開を論ずる上で重要な資料を提供するであろう。

第6次調査で新たに追加された資料は、細石刃石核1点、抉入石器3点、細部調整石刃2点、石刃1点、細部調整剥片5点、微細剥離痕付剥片3点、敲石4点であり、これらの追加による石器器種組成に大きな変化はない。利用石器石材には、チャート、黒曜石、玻璃質安山岩、砂岩、安山岩があり、第3次調査報告や第4次調査報告(永峯・谷口編 1993、谷口・宮尾編 1995)でまとめられた傾向を追認している。

(宮本)

#### 細石刃石核 (第18図1)

楕円形の両面調整素材を用意し、その長軸上の一端から削片を剥離して打面を作出し、その端部から細石刃を連続的に剥離した削片系細石刃石核である。玻璃質安山岩製。素材は、周縁

から求心的に調整され、特に縁辺部には細部調整が交互に施され、直線的な稜が形成されている。作業面には、打点を残さない剥離面が見られ、複数回の打面再生が行われたことがわかる。少なくとも現存する打面から両側面への再調整は行われていない。なお、作業面に残る完全な細石刃剥離痕は、長さ3.7cm、幅1.25cmを測り、長幅比は2.96である。細石刃の形態は第3次調査報告（永峯・谷口編 1993）で詳細に分析されている。その分析結果と比較して、本資料の計測値は、長幅比が小さく幅広になるという玻璃質安山岩の特徴を再認識させるものとなっている。細石刃剥離作業面は、長さ3.98cm、幅2.58cmで、打面角は約72°である。

#### 抉入石器（第18図2～4）

抉入石器は3点出土した。いずれもチャート製である。

2は右側縁および背面下部に節理面を残す横長剥片を素材とし、その末端部と頭部とに抉入部が作出されている。実測図正面右側縁の抉入は、腹面側から大きく急斜度に剥離が施された後、さらに細かく調整されている。正面左側縁の下部には鋸歯状の抉入部が認められる。3は碎片2点が接合したものである。横長剥片を素材とし、節理面の構成する末端部に抉入が作られている。正面上縁には連続する微細な剥離痕が認められ、尖端は使用痕状の摩耗が顕著である。正面上半部は節理面に沿って折損している。4は縦長剥片を素材とし、両側縁に抉入部が作られている。いずれも平面形は緩やかな凹形を呈し、抉りは弱い。素材末端部側の折れ面は左側縁の調整よりも古く、頭部側の折れ面は最も新しいものである。

（宮本）

#### 細部調整石刃・石刃（第18図5～7）

細部調整石刃・石刃は合計3点出土した。いずれもチャート製である。

5はチャート製の細部調整石刃である。背面を構成する剥離面はすべて上方向からの加撃によるもので、単設打面石核からの連続的な石刃剥離を示している。打面は正面左方向からの単剥離打面である。左側縁に連続的に細部調整が加えられ、右側縁には部分的な調整が加えられている。

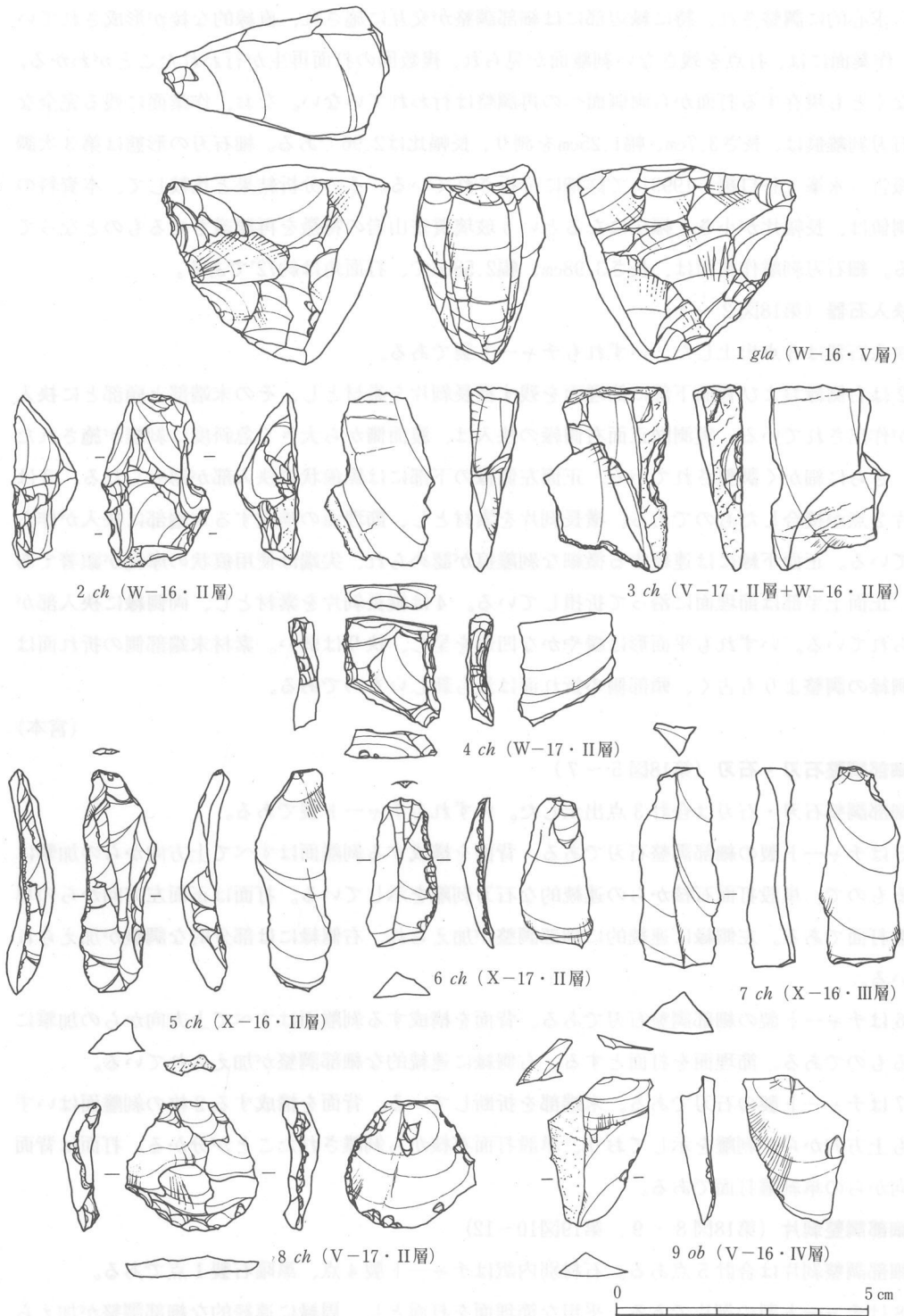
6はチャート製の細部調整石刃である。背面を構成する剥離面はすべて上方向からの加撃によるものである。節理面を打面とする。右側縁に連続的な細部調整が加えられている。

7はチャート製の石刃である。末端部を折断している。背面を構成する2枚の剥離面はいずれも上方向からの剥離を示しており、単設打面石核から剥離されたことが分かる。打面は背面方向からの単剥離打面である。

#### 細部調整剥片（第18図8・9、第19図10～12）

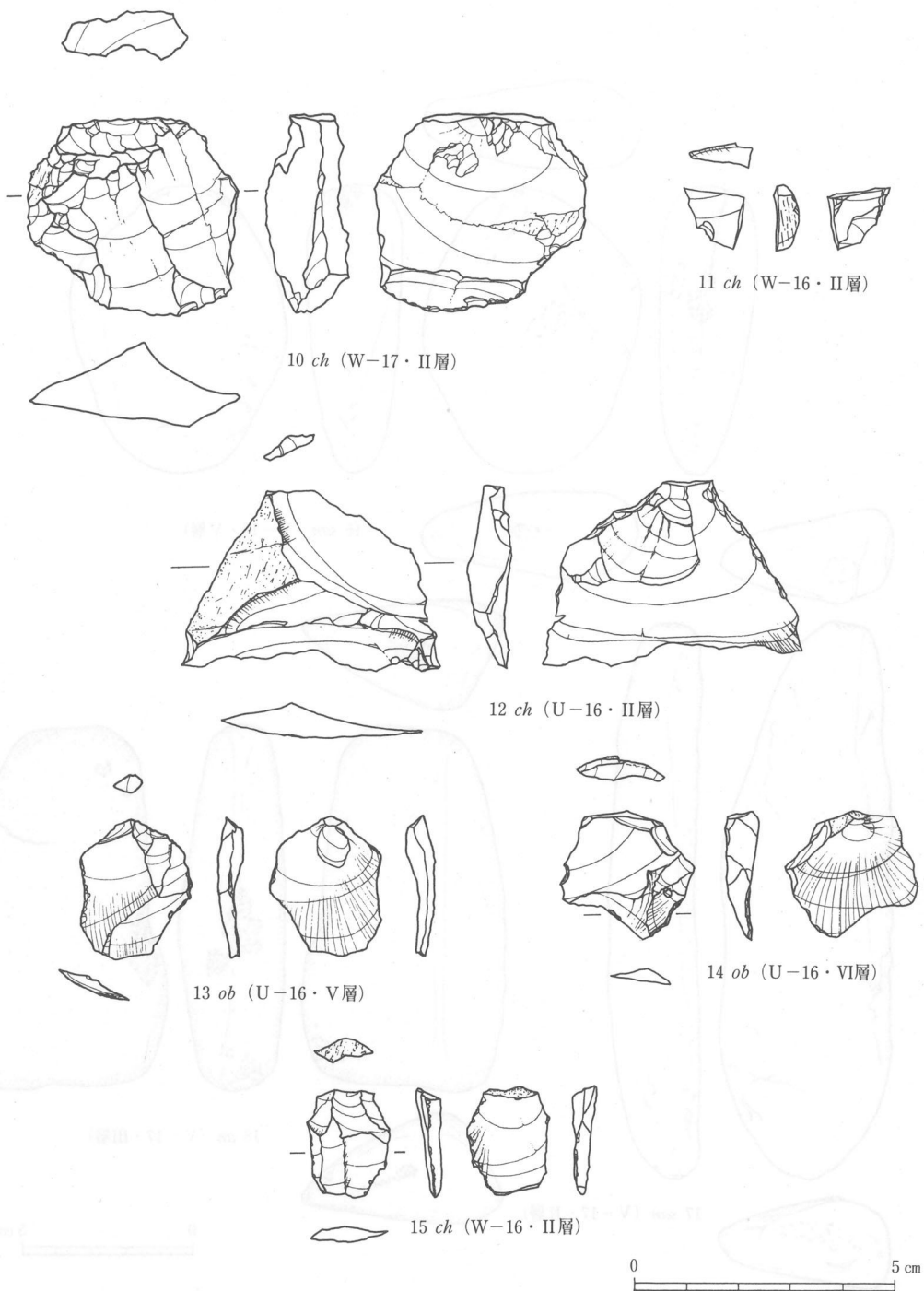
細部調整剥片は合計5点ある。石材別内訳はチャート製4点、黒曜石製1点である。

8はチャート製の剥片である。平坦な節理面を打面とし、周縁に連続的な細部調整が加えられている。

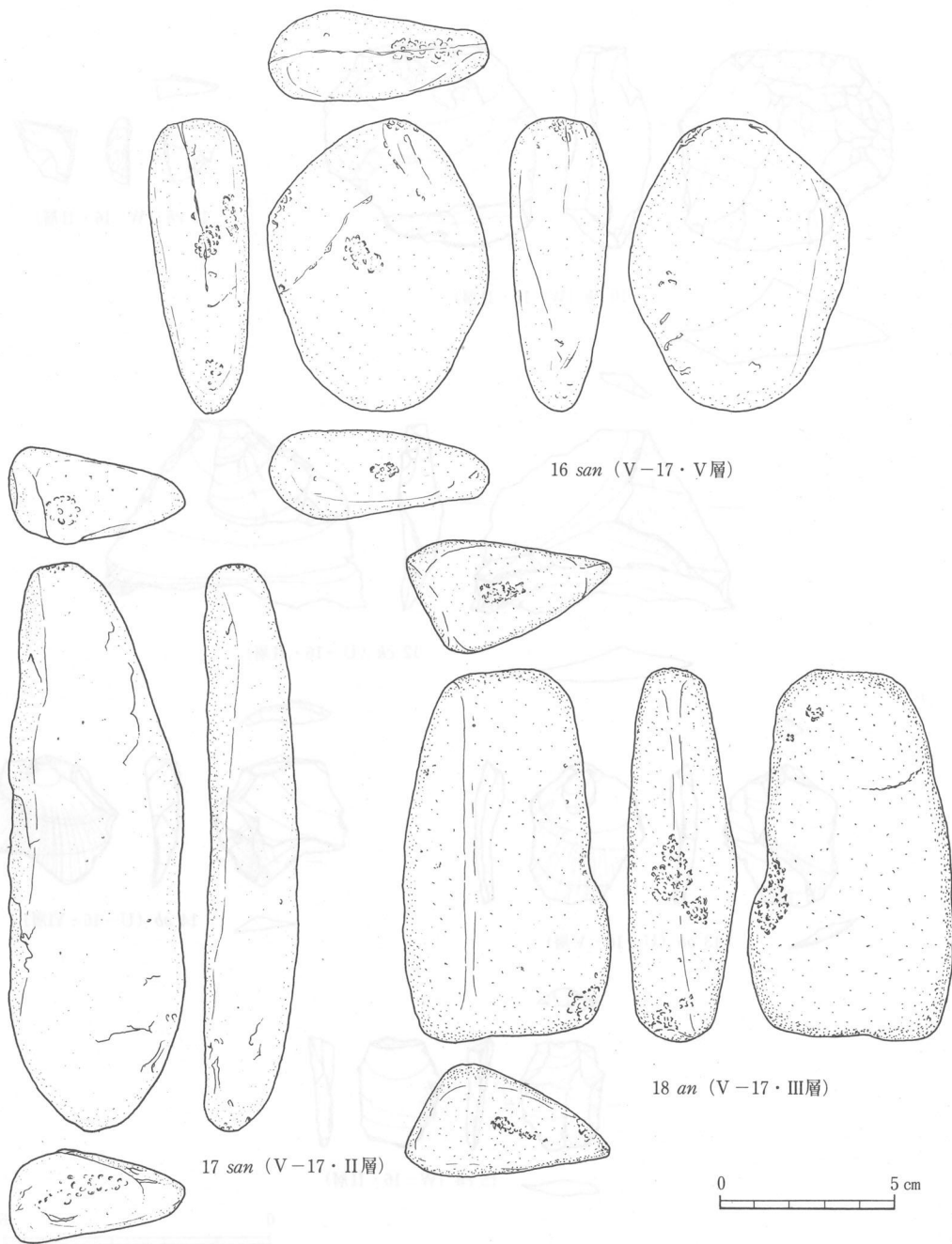


第18図 第V層文化層の石器(1) 細石刃石核・抉入石器・細部調整剥片・石刃(3/4)

第3節 第V層文化層の石器



第19図 第V層文化層の石器(2) 細部調整剥片・微細剝離痕付剥片(3/4)



第20図 第V層文化層の石器(3) 敲石(1/2)

9は背面の一部に節理面を残す黒曜石製の縦長剥片である。打面は複剥離打面であり、右側縁に細部調整が加えられている。右側縁上部を折損している。

10はチャート製の剥片である。打面は単剥離打面である。下端は背面→腹面方向に折断され、左側縁下部に掛けて断続的に細部調整を加えている。

11は右側縁が節理面によって折損されたチャート製の小形剥片である。頭部は背面→腹面方向に折断され、左側縁に細部調整を加えている。

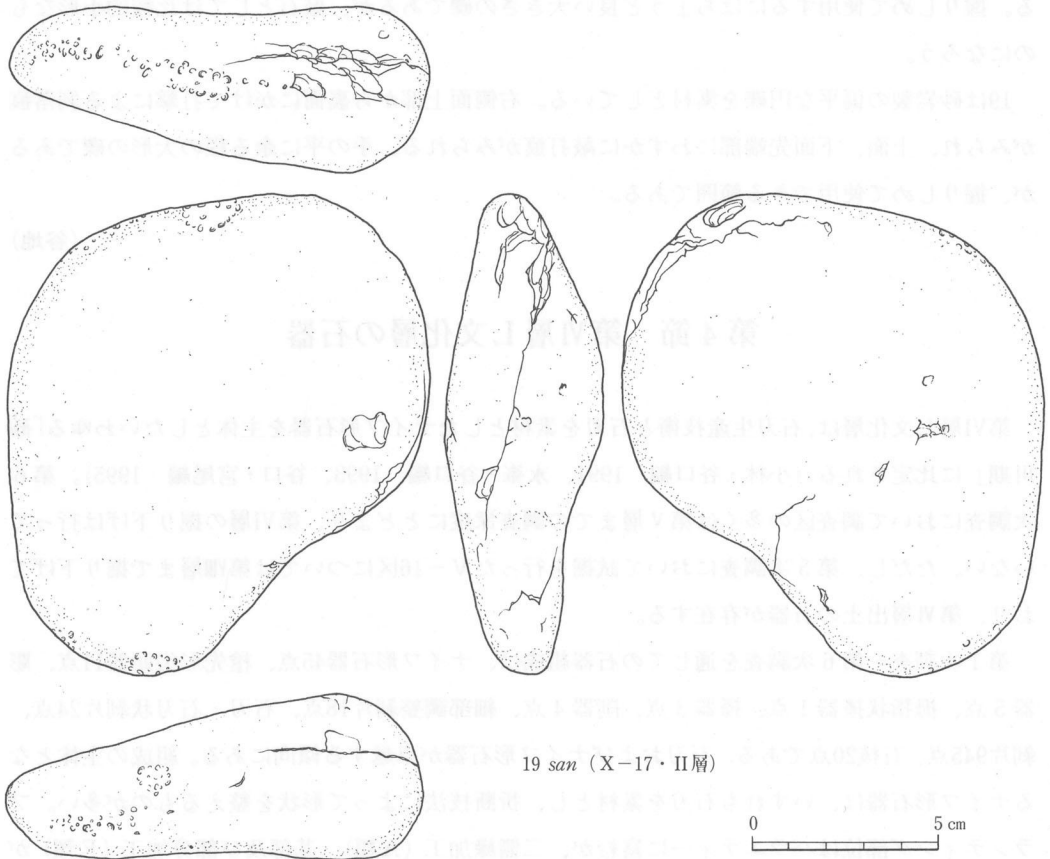
12は背面の一部に節理面を残すチャート製の不定形剥片である。打面は正面左方向からの単剥離打面である。直線的な左側縁と下端部の一部に細部調整を加えている

微細剥離痕付剥片 (第19図13~15)

微細剥離痕付剥片は合計3点ある。石材別の内訳はチャート製1点、黒曜石製2点である。

13は黒曜石製の縦長剥片である。正面右方向からの単剥離打面を残し、頭部調整が認められる。左右両側縁に断続的な剥離が認められる。

14は黒曜石製の縦長不整剥片である。打面は複剥離打面である。右側縁下部に微細な剥離が



第21図 第V層文化層の石器(4) 敲石(1/2)

わずかに認められる。

15はチャート製の縦長剥片である。平坦な節理面を打面とする。左右両側縁に断続的に微細な剥離が認められる。

(岩名)

#### 敲石 (第20図16～18、第21図19)

敲石は4点出土している。18が安山岩である以外は、すべて砂岩である。

16は砂岩製の楕円礫を用いている。左側面、表面中央部、上面、下面のそれぞれにわずかな敲打痕がみられる。手の平に収まる大きさで敲石としては小形なものである。

17は砂岩製の縦長の礫を利用している。断面が三角形を呈し、ちょうど三角柱状になる礫の上面、下面にわずかな敲打痕がみられる。細長く、握りしめて使用するにはちょうど良い大きさの礫である。

18は安山岩製の長立方形の礫を素材としている。右側面中央部から裏面にかけて比較的大きく顕著な敲打痕がみられるが、正面下部、上面、下面にはわずかな敲打痕がみられるのみである。握りしめて使用するにはちょうど良い大きさの礫であるが、敲石としては比較的小形なものになろう。

19は砂岩製の偏平な円礫を素材としている。右側面上部から裏面にかけて打撃による剥落痕がみられ、上面、下面先端部にわずかに敲打痕がみられる。手の平に余る程の大形の礫であるが、握りしめて使用できる範囲である。

(谷地)

## 第4節 第VI層L文化層の石器

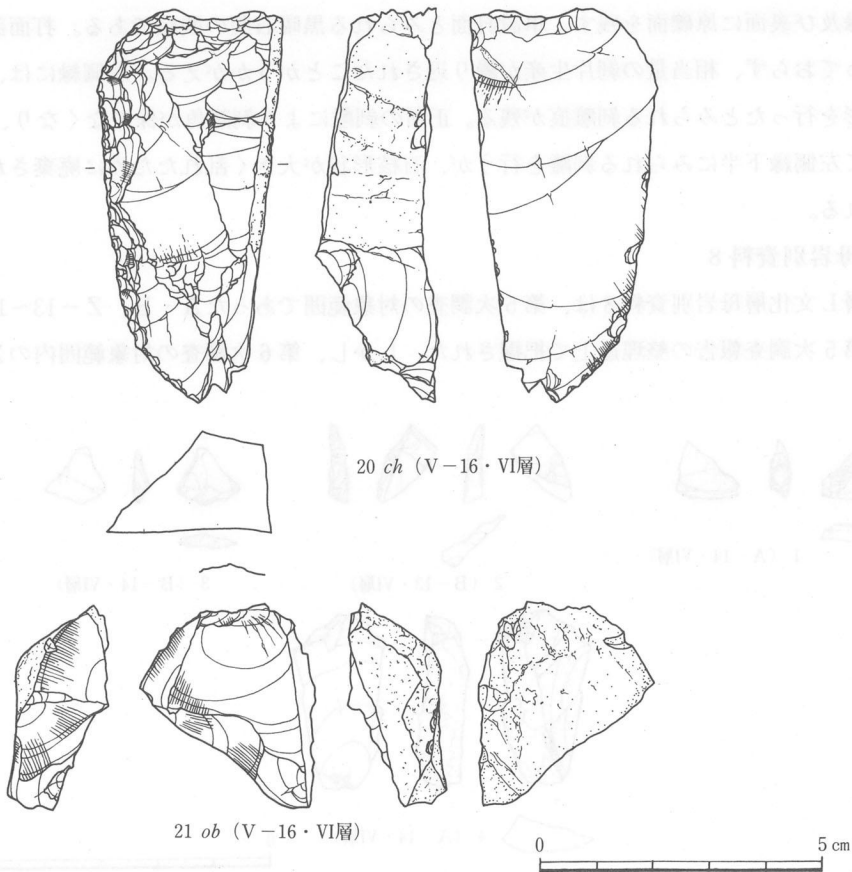
第VI層L文化層は、石刃生産技術と石刃を素材としたナイフ形石器を主体としたいわゆる「砂川期」に比定される(小林・谷口編 1991、永峯・谷口編 1993、谷口・宮尾編 1995)。第6次調査において調査区の多くは第V層までの調査深度にとどまり、第VI層の掘り下げは行っていない。ただし、第5次調査において試掘を行ったV-16区については第VIII層まで掘り下げしており、第VI層出土の石器が存在する。

第1次調査～第6次調査を通じての石器組成は、ナイフ形石器45点、槍先形尖頭器11点、彫器5点、拇指状搔器1点、搔器3点、削器4点、細部調整剥片18点、石刃・石刃状剥片24点、剥片945点、石核20点である。石刃およびナイフ形石器が卓越する傾向にある。組成の主体となるナイフ形石器は、いずれも石刃を素材とし、折断技法によって形状を整えるものが多い。ブランディング部位はバラエティーに富むが、二側縁加工(A類)、基部及び部分加工(E類)が卓越する傾向がみられる。剥片剥離技術は、両設・単設・複設など石核の打面形成にバラエテ



第4節 第VI層L文化層の石器

イーがあるものの、特に両設打面の形成という点に特徴が認められる。これらはいわゆる「砂川期」にみられる一般的特徴として捉えられる。他に当該期の特徴としては、組成に槍先形尖頭器が新たに加わるという点があげられる。初期の段階の槍先形尖頭器にみられるファシットを有する槍先形尖頭器は本遺跡では認められないが、片面調整の槍先形尖頭器は数点含まれている。両面調整の槍先形尖頭器は素材と調整技術の面から、当該期における器種製作技術の基本構造である石刃技法からはずれた製作体系であるといえるが、第3次調査資料に見られるような片面調整の槍先形尖頭器は石刃あるいは石刃状剥片を素材としているものが明らかに含まれる。当該期の槍先形尖頭器の製作技術は、部厚な素材を平坦剝離によって整形し、両面調整の槍先形尖頭器を製作する技術と、石刃を素材として、周縁にブランディング状の加工を施す技術の2つの体系があると考えられる(諏訪 1988)。また、この段階では槍先形尖頭器が組成に占める割合は比較的低く、槍先形尖頭器の製作に用いられる技術が未確立である。その後、槍先形尖頭器へと置換される役割をナイフ形石器などが依然として担っていたことなどが推測される。



第22図 第VI層L文化層の石器 削器・石核(3/4)

第6次調査において新たに追加された資料は、削器1点、石核1点、剥片1点の合計3点である。このうちX-16区出土の剥片1点は、A・B、Z-13~15区に分布するナイフ形石器とその碎片を含む第VI層L文化層母岩別資料8と接合する。

第VI層L文化層の石材は、第4次調査に示されたとおりチャートが81%と主体をなし、ついで黒曜石16%、玻璃質安山岩2%の構成比を示す。今回出土資料の石材組成は、チャート2点、黒曜石1点で、この構成比に沿ったもので石材組成に変化を与えない。遠隔地石材に属する黒曜石が比較的多く利用されている点と玻璃質安山岩の利用が低比率である。

(1) 石器

削器 (第22図20)

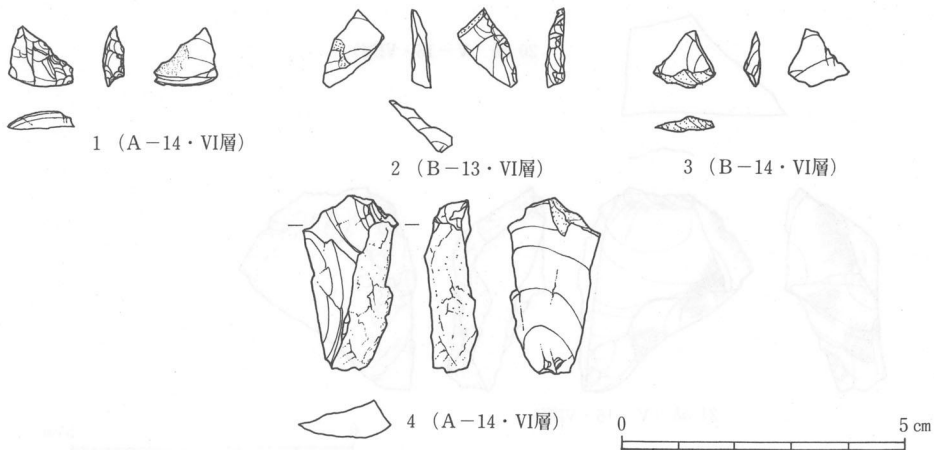
右側面に節理面を残す比較的部厚で大形の縦長剥片を素材とし、鋭利な左側縁に緩斜度の連続的な調整を加えたチャート製の削器である。左側縁部の裏面には、使用によるとみられる微細な剥離痕が観察される。

石核 (第22図21)

右側縁及び裏面に原礫面を残す、単設打面とみられる黒曜石製の残核である。打面部はほとんど残っておらず、相当量の剥片生産が繰り返されたことがうかがえる。左側縁には、石核形状の整形を行ったとみられる剥離痕が残る。正面の剥離により剥離角が保てなくなり、90°打面転位して左側縁下半にみられる剥離を行うが、石核形状が大きく乱れたために廃棄されたものと思われる。

(2) 母岩別資料8

第VI層L文化層母岩別資料8は、第5次調査の対象範囲であったA・B、Z-13~15区に分布し、第5次調査報告の整理途上で把握された。しかし、第6次調査の対象範囲内のX-16区



第23図 第VI層L文化層母岩資料8(1) ナイフ形石器碎片(3/4)

#### 第4節 第VI層L文化層の石器

から出土した剥片1点が接合することが第5次調査報告の刊行以前に判明し、第6次調査資料では数少ない第VI層L文化層の資料となったので、第5次調査報告書ではなく、あえて第6次調査報告において一括して掲載する。

また、第VI層L文化層母岩別資料8は、ナイフ形石器の碎片を複数含む資料で、ナイフ形石器の製作途上における破砕と、その後の再調整の進行過程をよく示している。そこでこのナイフ形石器の再調整過程については、接合資料に基づく剥片剥離技術とは別に記載したい。

以下に石器実測図・分布図(第23～27図)を示し、若干の観察事項を提示する。なお、これらの石器の出土位置や計測値などのデータは巻末(表6 75頁)に付してある。

##### ナイフ形石器製作工程における破砕と再調整過程(第23・24図)

ナイフ形石器の碎片は4点ある(第23図1～4)。4に対して3、2、1と順次に接合し、それぞれが接合した状態で各々部分調整を施されたナイフ形石器(第24図)となる。本資料は第VI層L文化層に通有的な石刃素材の部分調整ナイフ形石器であるが、基部加工は見られない。

発見されている資料で見ると3回の部分調整がやり直された碎片4点からなるこのナイフ形石器は、A・B、Z-13～15区で南北2m、東西4mの範囲にまとまって分布おり、出土状況から判断すれば、使用による折損とそれに伴う再調整の進行を想定するよりも、むしろ製作工程のなかでの破砕とそれに伴う再調整の進行を示すものと考えられる。

このようなナイフ形石器の製作工程における破砕と再調整過程を示す資料は、ナイフ形石器の機能部位を含む「かたち」と廃棄に至る判断基準を推察できる点で興味深い。

##### ナイフ形石器1+2+3+4

石刃を素材として、打面側を基部に鋭利な右側縁を刃部に設定し、左側縁に部分調整を施している。先端部のブランディングで1の部分が破砕したと思われる。

##### ナイフ形石器2+3+4

1の部分の破砕後でも刃部が3分の2ほど残り、形態を維持できるため、破砕した部分に改めて部分調整を施して器体を復元する。この時のブランディングで再び2の部分が破砕したものと考えられる。

##### ナイフ形石器3+4

2の部分の破砕後、まだ刃部が3分の1ほど残り形態をかろうじて回復できるため、破砕した部分に再々度、部分調整を施して器体の維持を行おうとする。しかし、その際に節理に沿って残っていた刃部が破砕し、機能部位を完全に損失したため器体の回復を断念する。

以上のように本資料は、ナイフ形石器の製作工程において部分的に破砕した場合に、それを「再生するか」「廃棄するか」判断する基準が、機能部位となる刃部を残存しているか否かにかかっていることを示していると同時に、特定の部分に必ず部分調整を施し、その「かたち」を

維持、復元することを示している。刃部の残存だけが問題であるとすれば、前段階の部分調整が残っている2+3+4の状態や3+4の状態のままでも使用に堪えるように思われるが、実際には前段階で破砕しているという事実があるにも関わらず、そのリスクをおかしてまで再度、あるいは再々度部分調整を試みるのである。このような製作段階における「再生するか」「廃棄するか」を判断する基準が、純粹な意味で「かたち」に固執したものである可能性が高いが、石材入手や素材生産の問題に関連する場合も考慮しなければならない。本ナイフ形石器を含む第VI層L文化層母岩別資料8は、柳又遺跡ではいずれの文化層においても量比ともに最も多いチャートであり、石材入手の困難さは積極的には考えられない。ただし、柳又遺跡の各文化層で使用されるチャートは節理が多い、石器製作においては粗悪なものが多いことも事実であり、素材となる石刃生産の困難さと関連している場合は想定しうる。

**接合資料と剥片剝離技術 (第25~27図)**

**石材**

チャート

**石質**

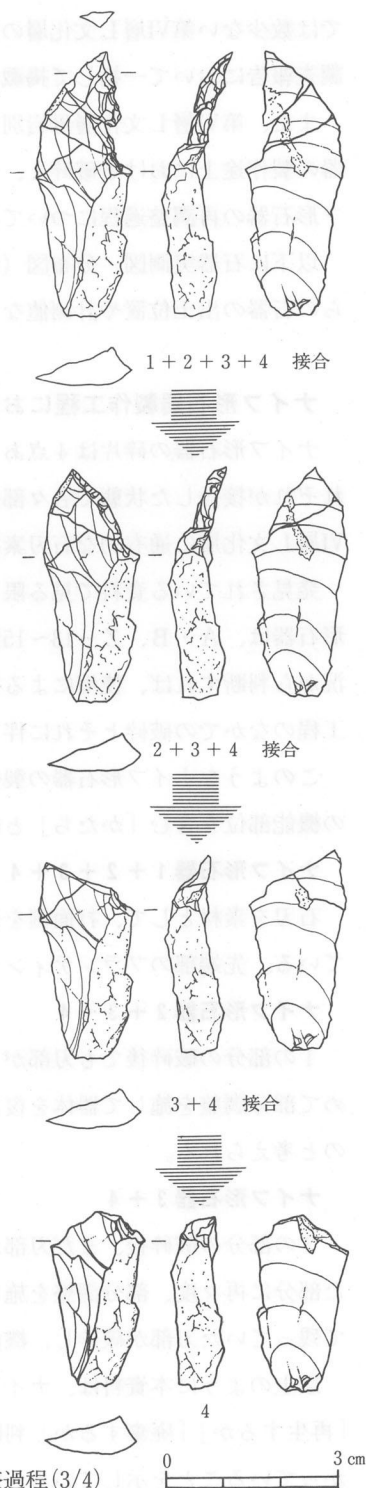
縦横に節理が見られるが、比較的均質かつ緻密で鈍い脂肪光沢がある。割れ口は貝殻状断口を呈する良質な石材である。色調は青灰色で、所々に鉛色の部分をもつ。

**素材**

角礫の一部を節理に沿って分割したもの。4の右側縁、6の裏面、7の右側面および裏面に残る平坦な節理面はその際の分割面であると考えられる。

**資料**

石核2点、ナイフ形石器の碎片4点、剥片1点の接合資料7点がある。



第24図 第VI層L文化層母岩別資料8(2) ナイフ形石器再調整過程(3/4)

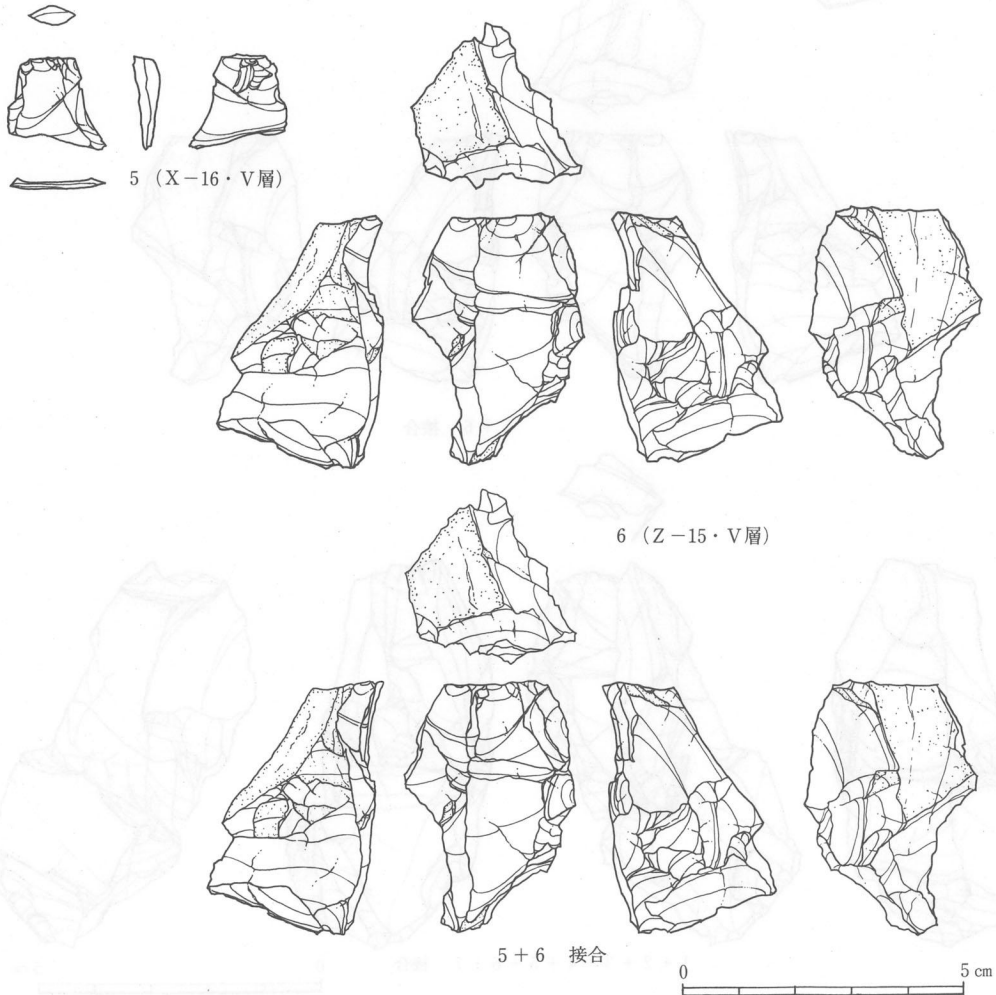
第4節 第VI層L文化層の石器

ナイフ形石器の碎片1～4は、前述したとおり、ナイフ形石器の製作工程における破碎と再調整を示す資料である。

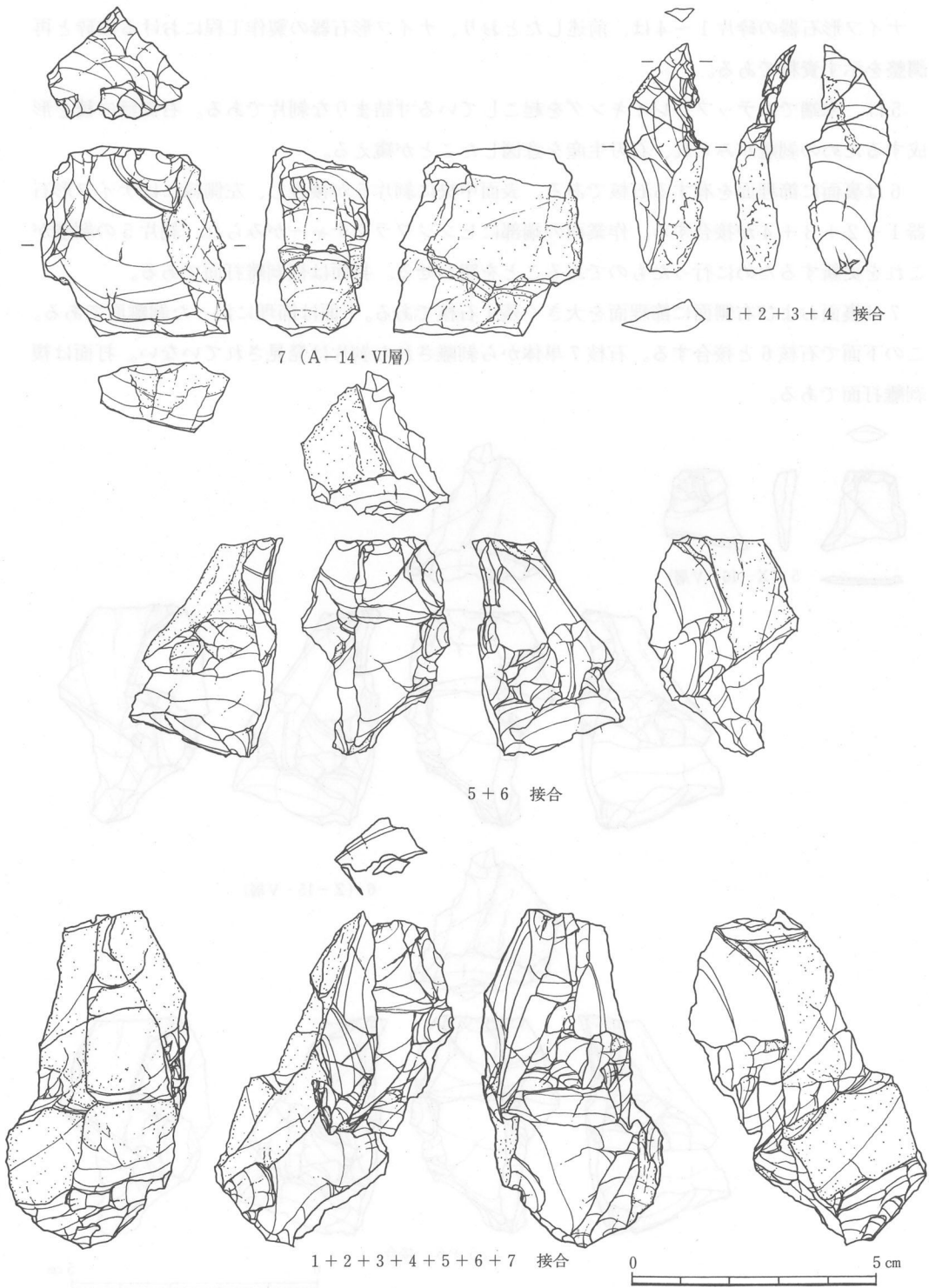
5は、末端でステップフレイキングを起こしている寸詰まりな剥片である。右側縁に稜を形成するための剥離がみられ、石刃生産を意図したことが窺える。

6は裏面に節理面を有する石核である。表面中央に剥片5が接合し、左側縁にはナイフ形石器1+2+3+4が接合する。作業面の端部にヒンジフラクチャーがみられ、剥片5の剥離がこれを更新するために行ったものであることを窺わせる。打面は複剥離打面である。

7は裏面および右側面に節理面を大きく残す石核である。下面は節理に沿った剥離面である。この下面で石核6と接合する。石核7単体から剥離された剥片は発見されていない。打面は複剥離打面である。



第25図 第VI層L文化層母岩別資料8(3) (3/4)



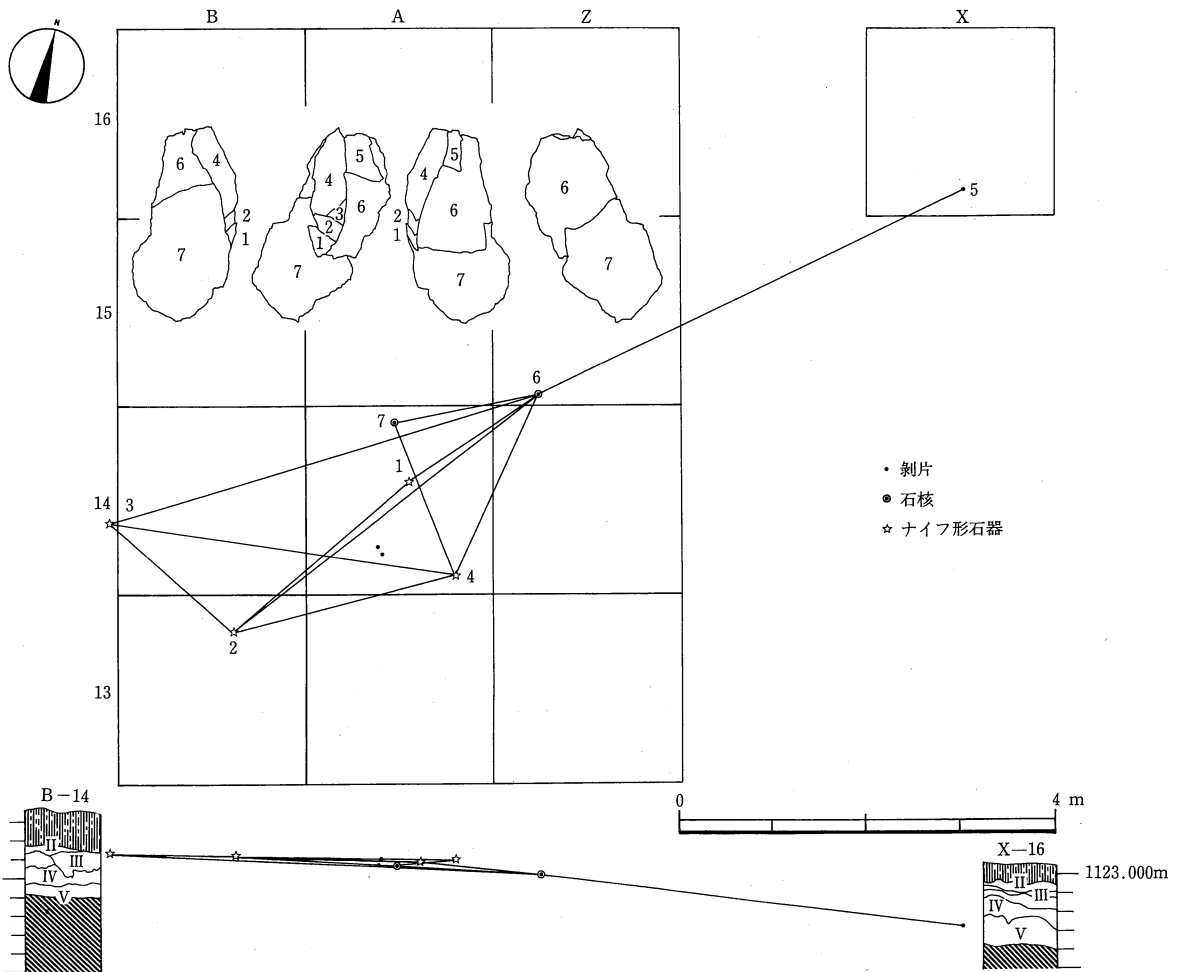
第26図 第VI層L文化層母岩別資料8(4) (3/4)

接合資料と剥片剥離工程

本資料の接合は、石核6単体と石核7単体とで剥片剥離が行われた段階と石核6+7の段階で剥片剥離が行われた段階がある。ただし、石核7単体で行われた剥片剥離を示す資料は発見されていない。

石核6+7の段階では最初、上面に打面を設定し、右側面にみられる石核整形や右側縁の稜形成に伴う作業面調整を行うことで全体を角柱状に保ちつつ、石刃の剥片剥離を繰り返す。ナイフ形石器1+2+3+4は、このような工程の中で数回の石刃剥離後に剥離された石刃を素材としたものである。その後90°打面転位して、石核7の上面を打面とする剥片剥離を行うが、その過程で石核7の下面に見られる節理に沿って石核6と石核7に分割される。

石核7単体では、その後少なくとも1回の剥片剥離が行われているが、作業面途中でステッ



第27図 母岩別資料8：分布図(1/80)

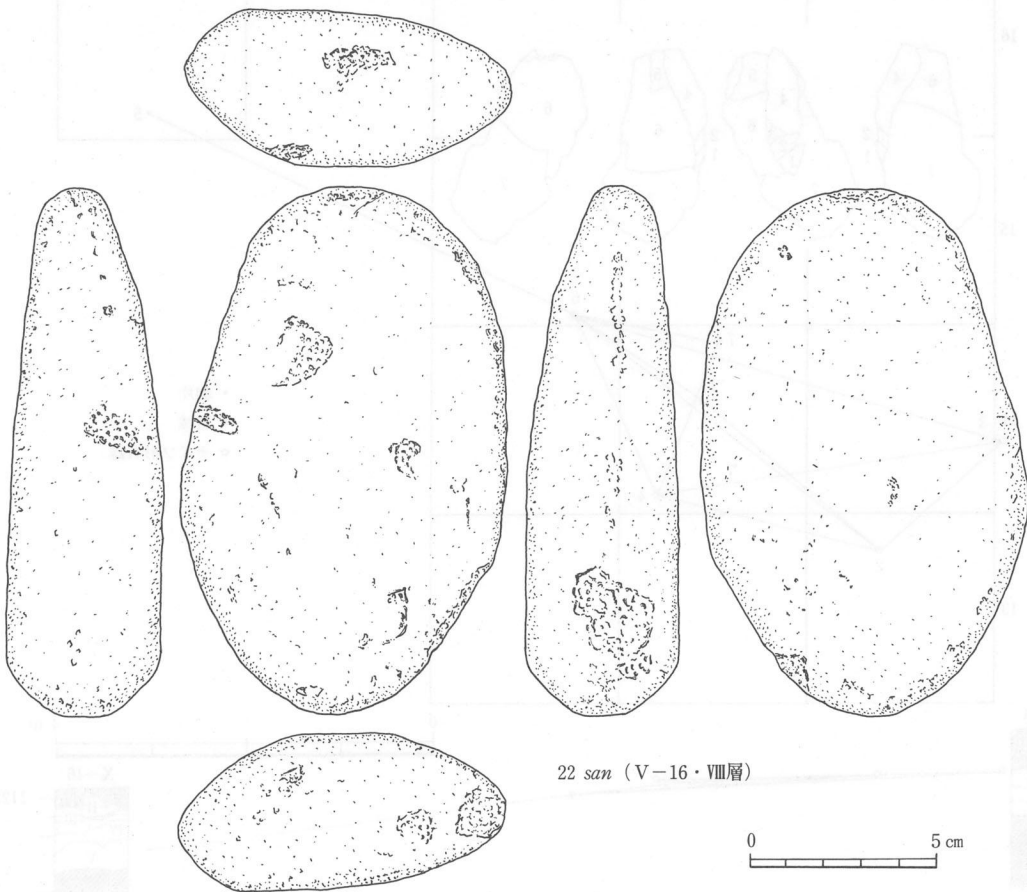
プレイングを起し、小形の不定形な剥片となっている。

石核6単体では、その後少なくとも3回以上の剥片剥離が行われている。最後に剥離された剥片5は、その前段階の剥片剥離で生じた作業面末端のヒンジフラクチャーで乱れた作業面の形状を更新することを目的としたものと推定されるが、剥片5の剥離もまたステッププレイングを起し、作業面の形状をさらに乱す結果となっている。

**分布**

第V層から2点、第VI層から7点が出土している。A・B、Z-13~15区にまとまって分布するが、X-16区に剥片5だけが離れて存在する(第27図)。

ナイフ形石器の製作工程や剥片剥離工程から見た場合、A・B、Z-13~15区で石器素材の生産および石器製作が行われている状況を推定できる。ただし、石核6の作業面調整が目的と考えられる剥片5がやや離れてX-16区で出土する点は注意される。分布状態から見た時、剥片5は何らかの目的をもって、生産の場から持ち出されたものといえるかもしれない。その場



第28図 第八層文化層の石器(1) 敲石(1/2)

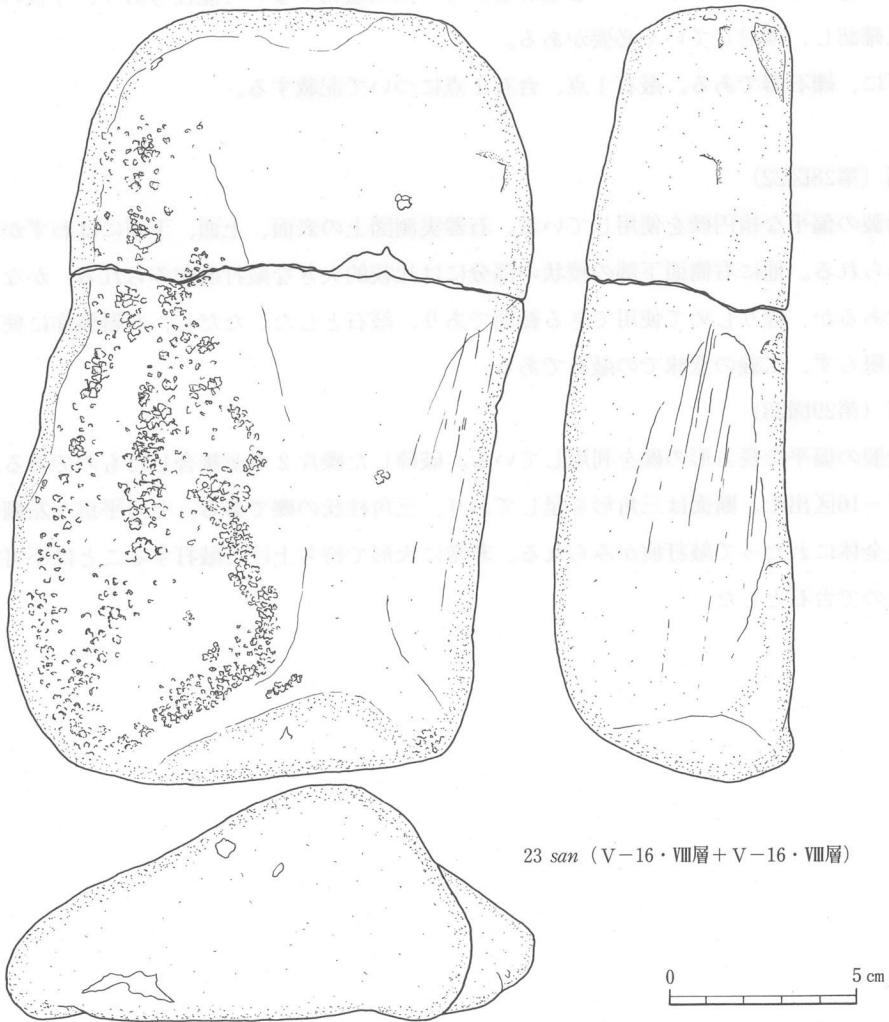


合、剥片をも目的的剥片と評価し得ることになる。

(山本)

### 第5節 第VIII層文化層の石器

第4次調査と第5次調査とでA～C、Z-10～16区、面積112m<sup>2</sup>について第VIII層を完掘した結果、第VII層上部で確認された第VII層文化層を最後に、第VII層下部以下では遺物包含層が存在しないことが判明していた。ところが今回の調査で第5次調査の試掘から継続して調査したV-16区において、第VIII層中から敲石1点、台石1点、剥片2点、礫8点の計12点が検出された。



第29図 第VIII層文化層の石器(2) 台石(1/2)

#### 第IV章 旧石器時代

これら石器の出土層位は、第VII層文化層の石器群や礫群が確認された第VII層上部よりも明らかに下位にあたる。また、同時にV-16区では第VII層文化層の確認されている第VII層上部では石器群や礫群は1点も出土しておらず、第VI層L文化層と対して、間層をはさむように出土している。今回の調査成果を報告するにあたって、これらの石器の出土層位に基づいて第VIII層文化層とすることにした。

ただし、第VIII層文化層について、この付近で第VIII層まで調査深度が達しているのは、V-16区の1グリッド、面積にしてわずか4㎡だけの調査結果であることに留意する必要がある。また、調査区U~X-16・17区は第V層の堆積で東西方向に比高差およそ60cmをもつ傾斜地であること、V-16区の南面層序で見た場合第VII層以下は層厚が安定せず、層位的に乱れがある可能性を考慮すると、プライマリーな包含層からの出土遺物でない可能性もあり、今後の調査でさらに確認し、検討していく必要がある。

以下に、礫石器である。敲石1点、台石1点について記載する。

(谷地)

##### 敲石 (第28図22)

砂岩製の偏平な楕円礫を使用している。石器実測図上の表面、上面、下面にはわずかに敲打痕がみられる。他に右側面下部の稜状の部分には比較的大きな敲打痕がみられる。かなり大形の礫であるが、握りしめて使用できる範囲であり、敲石とした。ただし、石器製作に使用されたとは限らず、広義の意味での敲石である。

##### 台石 (第29図23)

砂岩製の偏平な長方形の礫を利用している。破碎した礫片2点が接合したものである。2点ともV-16区出土。断面は三角形を呈しており、三角柱状の礫である。その平坦な左側面の緩斜面上全体にわたって敲打痕がみられる。非常に大形で持ち上げて敲打することは不可能と思われたので台石とした。

(谷地)

## 第V章 B地点試掘と表面採集資料

### 第1節 概要

柳又遺跡B地点はA地点の150m程南方にあり、A地点と連続した台地上に位置する。その中間には1990年に発掘調査が行われたC地点（青木・内川・高橋 1993）がある。B地点はA地点とともに、過去1959年から1962年にかけて4次にわたる発掘調査が実施され、細石刃やナイフ形石器を伴う複数の旧石器文化とともに、縄文文化初頭にみられる有舌尖頭器が発見され、旧石器時代から縄文時代への移行過程を明確に示す資料を提供している（樋口・森嶋・小林 1965）。

今回の調査では、柳又遺跡群の具体的な様相の把握を将来的な目的におき、現状確認のため、B地点で試掘を実施した。B地点の試掘区は、1959年から1962年にかけて発掘された位置の南東に位置し、はからずもB地点の範囲確認の性格をもつことになった。

試掘の結果、A地点の基本層序第V層、第VI層に相当する層位から細石刃1点、石刃1点、剥片・碎片35点、礫5点、計42点が発見された。（宇賀神）

### 第2節 縄文時代の石器

B地点における縄文時代の石器として、表面採集された有舌尖頭器2点を紹介する。B地点出土の有舌尖頭器は、A地点出土の有舌尖頭器に対応する形態があまりみられないことが指摘されている（小林編 1990）が、今回紹介する有舌尖頭器2点は、長幅比などで把握した形態にA地点のものと共通する点がみられる。

#### 有舌尖頭器（第30図1・2）

1は表面に節理面の残るやや粗悪なチャート製。形態の調整は表裏とも左側縁部の身部末端から先端に向い、折り返して右側縁部の先端から末端に向い、斜状平行剝離を示す。このような身部の調整後、改めて舌部を作り出している。幅1に対する舌部の比は0.05と舌部が極端に短く、柳又特有の逆三角形の短い舌部を持つ（小林 1967）という特徴を持っている。幅と長さの比はおよそ1：2。幅と長さの比が1：2を示すものは有舌尖頭器の中でも新出の部類にあたるという指摘（小林編 1990）があり、そのデータと照らす限り新出のもののみなせる。

長さ4.69cm、幅3.01cm、厚さ0.91cm、重さ11.28 cm。

2はチャート製。表面は身部末端から先端に向って、裏面は先端から身部末端に向い、斜状平行剝離を呈する。1と同様に、最後に舌部を作り出している。また表面左側縁部・裏面左側

縁部には、さらに細かな調整を認めることができる。これは表面左側縁部の抉入状に欠落した部分に合わせて身部を再調整したものと考えられる。幅1に対する舌部の比は0.20で、1とは対照的に舌部の突出が大きいタイプである。幅と長さの比はおよそ1：2。1と同様、新出のものともみなせる。

長さ3.7cm、幅1.97cm、厚さ0.55cm、重さ3.66cm。

(片岡)

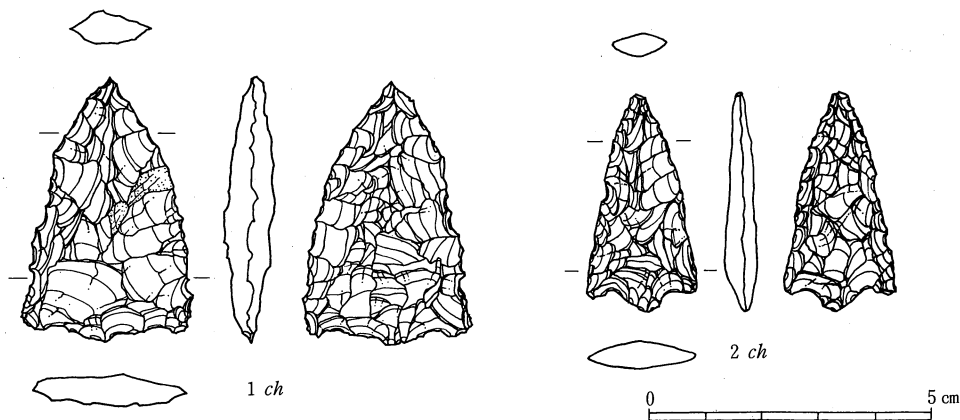
### 第3節 旧石器時代の石器

B地点において出土した旧石器時代の遺物は、第V層41点、第VI層1点、計42点出土した(第31～34図)。他に第I層(耕作土)から、細部調整剥片1点が出土している。

第V層からは細石刃1点、石刃1点、剥片・破片34点と、礫5点が出土している。石材別内訳は、チャート36点、玻璃質安山岩4点、ホルンフェルス1点である。礫はいずれもチャートである。第VI層からはチャート製の細部調整剥片剥片が1点出土しているだけである。以下に主な石器についてそれぞれ記載する。

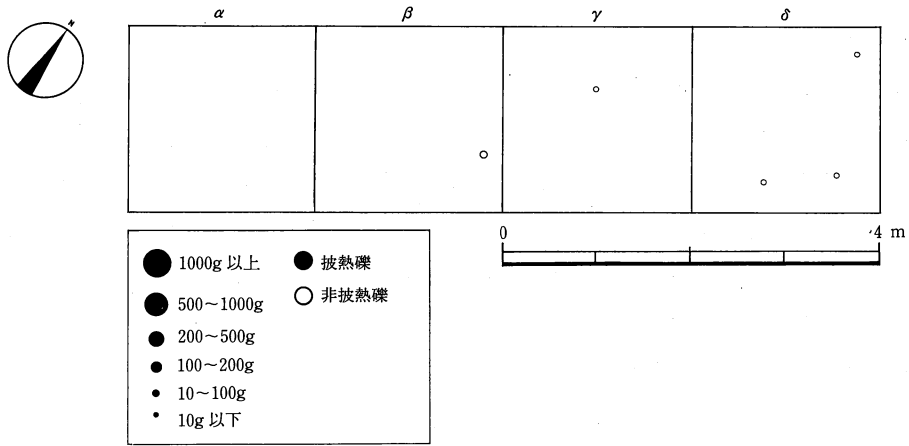
#### 細石刃(第34図1)

玻璃質安山岩製。β区第V層にて折断した状態で出土。出土層位と器種から判断して、A地点第V層文化層に相当する文化層がB地点にも存在していたと思われる。細石刃は本資料1点のみである。なお、細石刃石核や打面形成削片等の細石刃関係資料はなく、分布状況や検出された石器の数量から見ても、石器ブロックのような集中は把握できない。背面は3面の剥離面で構成されている。加撃あるいは打撃の方向はすべて主要剥離面と同じである。打面が小さく残っているが、打面調整や頭部調整は見られない。

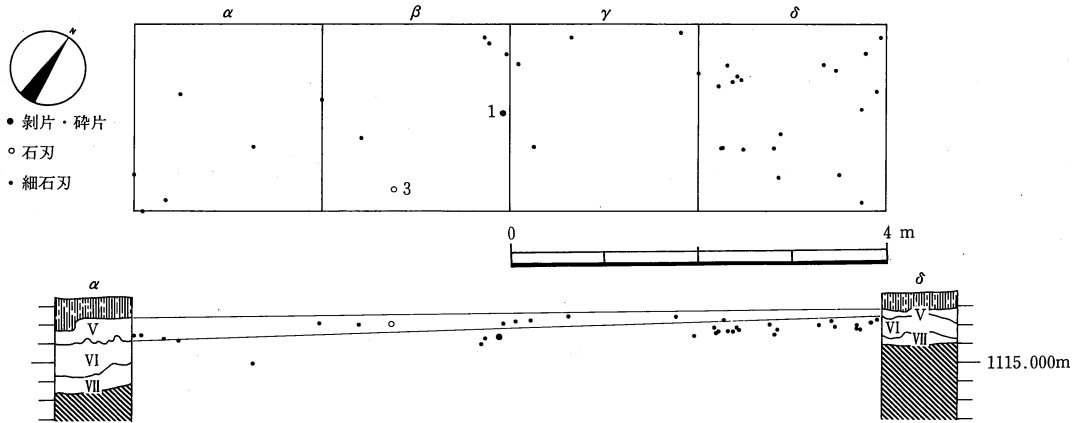


第30図 B地点 縄文時代の石器(3/4)

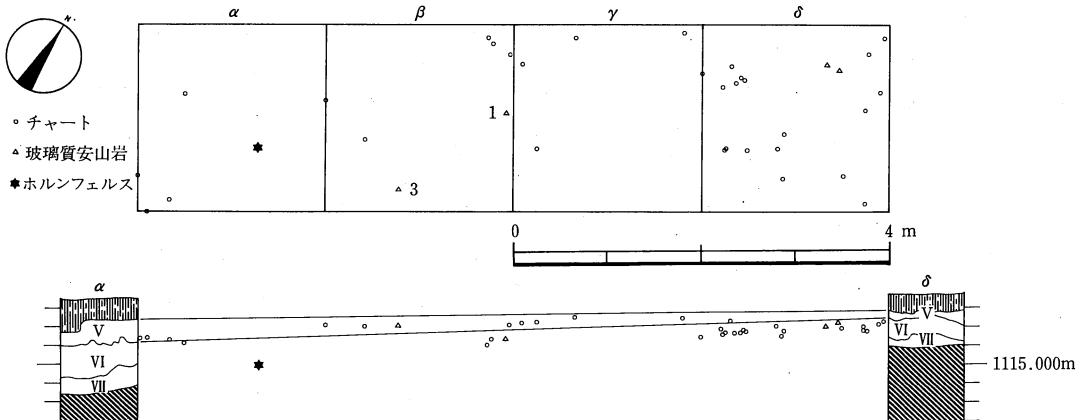
第3節 旧石器時代の石器



第31図 礫の重量・被熱状態(1/80)



第32図 B地点 石器器種別分布状態(1/80)



第33図 B地点 石器石材別分布状態(1/80)

現長1.90cm、幅1.10cm、厚さ0.30cm、重量0.46g。

剝離面角98°、刃部断面角26°、刃部長1.45cm。

登録番号β-7、北から95.0cm、西から192.0cm、標高1115.270m。

細部調整剥片 (第34図2)

チャート製。第I層(耕作土)出土。石刃状の縦長剥片の背面両側縁に平坦な細部調整が不連続に施されている。正面左肩に打面を残している。打面は節理面を利用したもので、打面調整や頭部調整は行われていない。背面を構成する剝離面はいずれも主要剝離面と同方向からの加撃によるものである。

現長4.58cm、幅2.54cm、厚さ0.58cm、重量7.44g。

剝離面角98°、刃部角38°、刃部長2.21cm。

石刃 (第34図3)

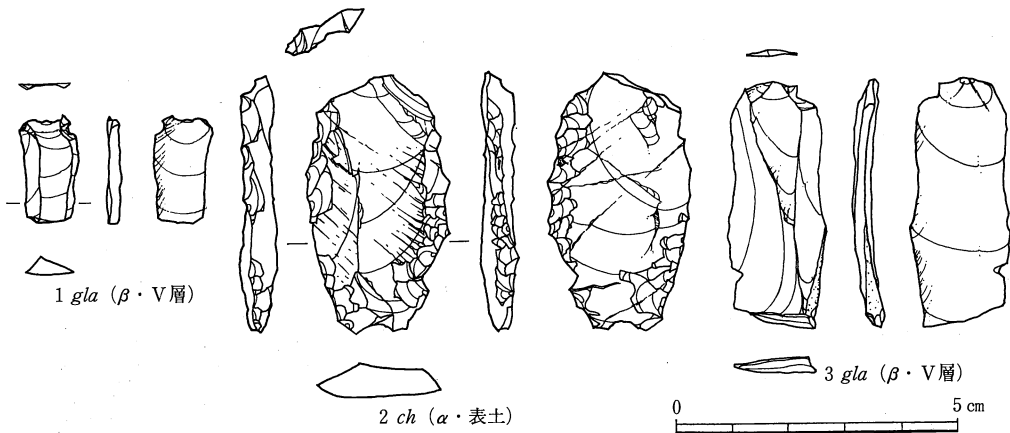
玻璃質安山岩製。β区第V層から折損した状態で出土。細石刃(第34図1)と同じ第V層出土であり、その他の剥片・破片とともに垂直分布上のまとまりを示す(第32・33図)。平面分布上はδ区に大部分が偏っているが、量的に石器ブロックと考えられるような集中は示していない(第32・33図)。背面を構成する剝離面はいずれも石刃縁辺に平行する。これらの剝離面は上下二方向からの剝離を示しており、両設打面石核を用いた石刃技法の存在が類推される。打面調整や頭部調整は見られない。

現長4.40cm、幅2.75cm、厚さ0.59cm、重量2.78g。

剝離面角86°、刃部角28°、刃部長2.78cm。

登録番号β-1、北から177.0cm、西から77.0cm、標高1115.410m。

(宇賀神)



第34図 B地点 旧石器時代：細石刃・細部調整剥片・石刃(3/4)

## 第4節 表面採集資料

柳又遺跡B地点では、今回の調査までに多数の表面採集資料が得られている。本節ではその一端に過ぎないが、具体的に表面採集資料を紹介して、B地点試掘の成果を補強したい。

紹介する表面採集資料は、両面調整石器3点、細部調整石刃3点、細部調整剥片1点、石刃状剥片1点、石核1点、合計9点である。

### 両面調整石器（第35図1～3）

1は、部厚な剥片を素材とし、背面から全周にわたる剥離を施して尖頭状に整形している。その後、腹面でもほぼ全体にわたって剥離を加え、全体の厚さを除去している。背面左側縁には平坦な剥離で鋭利な縁辺が作出されており、背面右側縁には急斜度の剥離によって鈍角に仕上げられている。

チャート製。器長6.29cm、器幅4.08cm、器厚1.76cm、重量45.46g。

2は、器体下半部が背面側からの加撃により折損している。背面右側縁に節理面を残す幅広な剥片を素材として、主要剥離面を有する腹面右側縁に粗い調整を施している。その後、背面の節理面以外の縁辺に調整を加え、尖頭状に仕上げている。

チャート製。器長4.08cm、器幅3.52cm、器厚1.06cm、重量 18.30g。

3は、器体下半が腹面側からの加撃により節理に沿って折損している。背面に石刃を剥離したような対向する剥離面がみられ、両設打面の石核から剥離された剥片が素材である。背面は上面から左側縁にかけて微細な調整を加えている。腹面は左側縁から平坦な剥離を加え、鋭利に仕上げている。

チャート製。器長4.03cm、器幅4.62cm、器厚1.61cm、重量31.83g。

### 細部調整石刃（第35図4～6）

4は下半部が背面側からの加撃で折断している。背面両側縁に節理面を残す石刃で、背面左側縁に平坦な剥離と微細な剥離で連続的な調整を加えている。また、腹面両側縁にも微細な調整がある。素材打面は単剥離であるが、打面調整を頻繁に行ったとみられる剥離痕が残る。

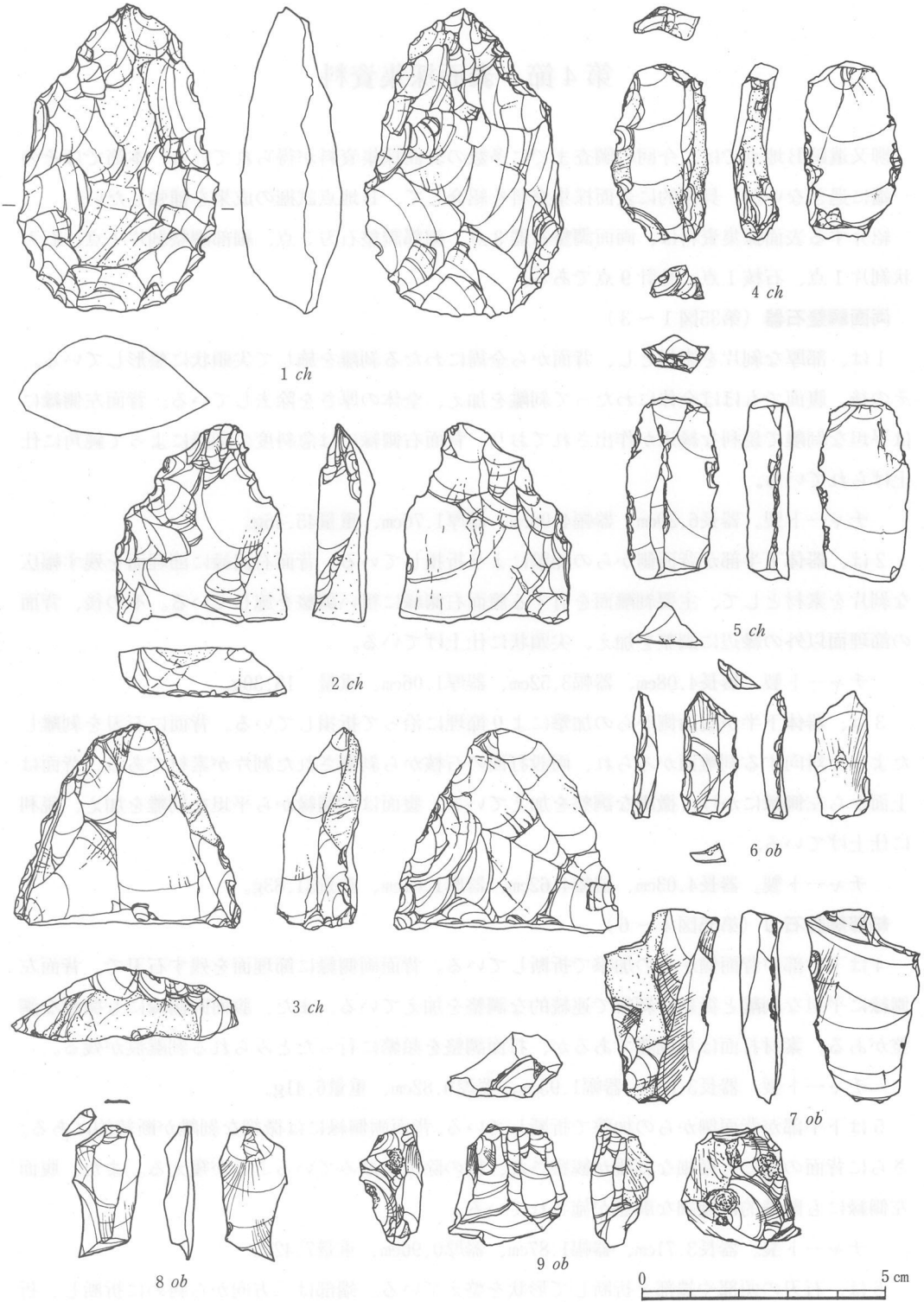
チャート製。器長3.6cm、器幅1.93cm、器厚0.82cm、重量6.41g。

5は下半部が背面側からの加撃で折断している。背面両側縁には微細な剥離が断続的にある。さらに背面の稜にも微細な剥離が観察され、稜の除去を試みていることが窺える。また、腹面左側縁にも断続的に微細な調整が施されている。

チャート製。器長3.71cm、器幅1.87cm、器厚0.96cm、重量7.42g。

6は、石刃の頭部や端部を折断して形状を整えている。端部は二方向から斜めに折断し、折断面にブランディングを加えている。また、背面両側縁に微細な剥離が連続的に見られる。

第V章 B地点試掘と表面採集資料



第35図 B地点 表面採集資料(3/4)



## 第5節 上村秀夫氏寄贈の有舌尖頭器

黒曜石製。器長2.55cm、器幅1.1cm、器厚0.46cm、重量1.22g。

### 細部調整剝片（第35図7）

7は背面左側縁に原礫面を残す縦長剝片であるが、打面を含む上半部は背面側から折断させている。背面原礫面には部分的にそれを除去するように施された平坦な剝離と、その後には施された微細な剝離がある。また、背面右側縁（腹面左側縁）には両面に微細な剝離が連続的に施されているようすが窺われる。

黒曜石製。器長3.93cm、器幅2.28cm、器厚0.78cm、重量7.16g。

### 石刃状剝片（第35図8）

8は背面を構成する剝離面のうち、右側縁と中央の二つの剝離面は、主要剝離面と同一の打面から剝離されたものである。また、背面には頭部調整や作業面調整を行ったと思われる剝離面がある。下半部は背面側からの加撃によって折損している。

黒曜石製。器長2.65cm、器幅1.36cm、器厚0.52cm、重量1.61g。

### 石核（第35図9）

9は単設打面石核である。右側面から裏面にかけては節理面で構成される。打面形成は正面から行われており単剝離で構成される。作業面は正面一面のみで、左から右へ連続して小形剝片が剝離されている。裏面には石核の形状を整えるために行われた剝離面が残る。

黒曜石製。器長2.58cm、器幅2.46cm、器厚1.28cm、重量6.22g。

剝離角87° 作業面長2.14cm。

（山本）

## 第5節 上村秀夫氏寄贈の有舌尖頭器

この有舌尖頭器（第36図左）はB地点で採集されたものではないが、柳又遺跡B地点の地主である上村秀夫氏よりご寄贈していただいたものであり、本章の最後に紹介することにした。

上村秀夫氏には、柳又遺跡群発掘調査の趣旨を理解いただき、柳又遺跡B地点における試掘を了承していただいているが、それにとどまらずご自身の所蔵する貴重な資料の提供まで受けることになった。紹介するにあたり改めて謝意を表する次第である。

上村秀夫氏から教示していただいた有舌尖頭器の採集地点は、柳又遺跡A地点の西北西に約400mの畑地にあたり、標高で約3m上位に位置する（第36図右 該当地点は→で指示した）。柳又遺跡A地点と同じ台地上であるが、柳又遺跡A地点の北側を西から東に流れる小さな沢によって区切られている。

これまでに当該地点では、有舌尖頭器に限らず遺物が採集されたという報告はない。また、

それはその周囲を含めても同様で、これまでに遺跡として扱われてはいない。

なお、上村氏から教示いただいた本資料の採集地点を踏査したが、新たに有舌尖頭器あるいはそれ以外の遺物は発見できなかった。したがって、採集地点が実際の遺跡であるか否かは断定できない。柳又遺跡群の範囲とも関係する問題であり、今後の課題である。

**有舌尖頭器 (第36図左)**

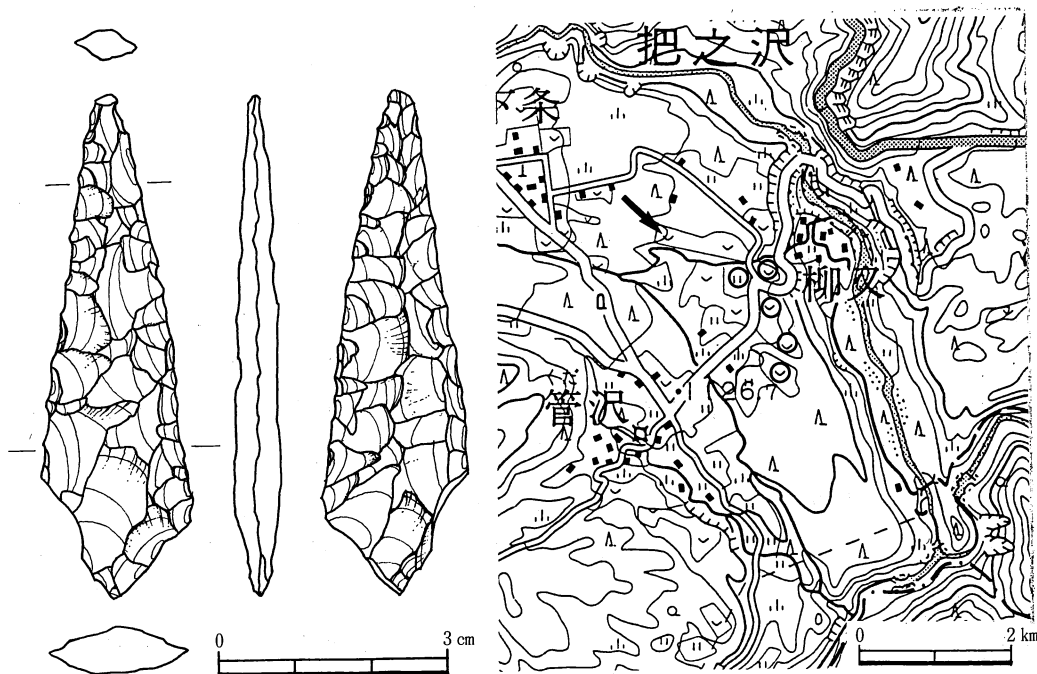
先端部が欠け、舌部の片側が欠損しているものの、ほぼ完形である。幅と長さの比が1:3を示し、柳又遺跡出土の有舌尖頭器の中では古段階(小林編 1990)に位置づけられる資料といえる。幅1に対する舌部長さは、0.5の比を示し、有舌尖頭器のなかではかなり長い。

両側縁部は全体的に直線的で、形態を整えるための両面調整は、いわゆる斜状平行剝離を呈している。実測図上、裏面右側縁の身部末端から裏面左側縁の身部末端へと周回するように連続的に調整が施される。さらに表面に反転し、同様に右側縁の身部末端から左側縁身部末端へと周回するように連続的に調整が続く。舌部は身部の調整終了後、改めて作り出される。

製作工程もまた柳又ポイント通有(小林編 1991)のものである。

玻璃質安山岩製。長さ6.71cm、幅2.01cm、厚さ0.64cm、舌部長1.02cm、重さ5.75g。

(平吹)



第36図 上村秀夫氏寄贈の有舌尖頭器(1/1)と採集地点(1/25000)

表3 縄文時代の石器

番号	器種	登録番号	N-s(m)	W-e(m)	標高(m)	層	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	重量(g)	遺存状態
1	石鏃	U-17 10	87.0	19.7	1122.209	IV	ch	1.95	1.60	0.30	0.95	左縁折損
2	石鏃	V-17 4	10.0	157.0	1122.683	II	ch	1.90	1.45	0.40	0.98	右逆縁折損
3	石鏃	X-16 6	51.0	165.0	1122.662	II	gla	1.57	1.30	0.30	0.37	完形

表4 縄文時代の土器

番号	大別土器群	個体番号	登録番号	N-s(m)	W-e(m)	標高(m)	層	石質	器長(cm)	器幅(cm)	器厚(cm)	面		縄文土器 原形	縄文土器 方位	成形	含有物	備考
												表(外)	裏(内)					
4	第1群	個体A	U-16 12	147.5	20.5	1122.255	IV	胴部	0.51	なし	なし	褐色	褐色	なし	内面ナテ	白色粒子・金雲母		
4	第1群	個体A	U-16 17	24.8	90.1	1122.149	IV	胴部	0.53	なし	なし	褐色	褐色	なし	内面ナテ	白色粒子・金雲母		
4	第1群	個体A	U-17 1	187.5	148.0	1122.302	II	胴部	0.54	なし	なし	褐色	褐色	なし	内面ナテ	白色粒子・金雲母		
4	第1群	個体A	U-17 7	25.5	140.6	1122.215	III	胴部	0.55	なし	なし	褐色	褐色	なし	内面ナテ	長石・金雲母		
5	第1群	個体B	U-17 -	-	-	-	I	胴部	0.63	なし	炭化物	黒褐色	褐色	織維			織維は動物性?	
6	第2群	個体C	V-17 14	87.5	32.6	1122.533	II	口縁部	0.90	なし	炭化物	黒褐色	褐色	指頭圧痕	斜(上→下)	長石・金雲母		
6	第2群	個体C	V-17 12	54.2	38.1	1122.602	II	胴部	0.69	なし	炭化物	黒褐色	褐色	指頭圧痕	横(左→右)	長石・金雲母		
7	第2群	個体C	W-16 7	52.6	117.3	1122.479	II	胴部	0.66	なし	なし	褐色	褐色	指頭圧痕	横(左→右)	長石・金雲母		
7	第2群	個体C	W-17 12	101.4	81.6	1122.521	II	胴部	0.54	なし	なし	褐色	褐色	指頭圧痕	横(左→右)	長石・金雲母		
8	第2群	個体D	U-16 8	34.7	15.5	1122.341	II	口縁部	0.46	炭化物	なし	褐色	褐色	斜(上→下)	長石・金雲母	口唇端部縄文原体押圧		
9	第2群	個体D	U-16 3	105.0	143.0	1122.267	II	胴部	0.44	炭化物	なし	褐色	褐色	斜(左→右)	長石・金雲母			
10	第2群	個体D	U-16 16	28.0	62.9	1122.161	IV	胴部	0.75	炭化物	なし	褐色	褐色	指頭圧痕	横(左→右)	長石・金雲母	堅緻	
11	第2群	個体E	W-16 9	38.2	132.4	1122.565	II	胴部	0.56	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻	
12	第2群	個体E	W-16 12	101.4	81.6	1122.521	II	胴部	0.53	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻	
13	第2群	個体E	W-16 4	64.7	155.5	1122.479	II	胴部	0.49	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻、断面に縦口縁	
14	第2群	個体E	W-16 19	151.0	49.0	1122.532	II	胴部	0.53	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻、割れ口に縦口縁	
14	第2群	個体E	X-17 4	159.5	181.0	1122.579	III	胴部	0.51	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻、割れ口に縦口縁	
15	第2群	個体E	W-16 3	88.1	173.5	1122.543	II	胴部	0.52	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻、断面に縦口縁	
16	第2群	個体E	W-17 17	135.7	40.0	1122.603	II	胴部	0.45	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻	
17	第2群	個体E	W-16 13	146.0	48.4	1122.614	II	胴部	0.56	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻、割れ口に縦口縁	
18	第2群	個体E	W-16 5	67.2	137.9	1122.569	II	胴部	0.51	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻、割れ口に縦口縁	
18	第2群	個体E	W-16 6	40.6	121.4	1122.568	II	胴部	0.41	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻	
19	第2群	個体E	W-17 21	200.0	110.5	1122.431	IV	胴部	0.52	なし	なし	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕	横(左→右)	砂粒・白色粒子	堅緻	
20	第2群	個体F	V-17 2	53.0	170.7	1122.417	II	胴部	0.97	炭化物	なし	褐色	褐色	斜(左→右)	内面指頭整形	金雲母・織維		

21	第2群	個体F	V-17 1	80.5	183.9	122.370	II	胴部	1.06	炭化物	なし	良好	暗褐色	暗褐色	斜行縄文	指頭痕	縦(左→右)	内面指頭整形	金雲母・繊維
22	第2群	個体G	V-16 1	30.0	114.0	122.411	II	胴部	0.80	なし	なし	良好	暗褐色	褐色	斜行縄文	指頭圧痕	縦(左→右)	内面指頭整形	石英
23	第2群	個体H	W-17 13	40.5	32.7	122.501	II	胴部	0.68	炭化物	炭化物	良好	暗褐色	暗褐色	斜行縄文	指頭圧痕	縦(左→右)	内面指頭整形	白色粒子

接合部が屈曲

表5 旧石器時代の石器

番号	文化層	器種	登録番号	N-S(cm)	W-e(cm)	標高(m)	層	石質	器長 (cm)	器幅 (cm)	器厚 (cm)	作業 面長 (cm)	剝離角	打面角	刃部長 (cm)	刃断面角 (°)	先端角 (°)	重量 (g)	遺存状態	
1	第V層文化層	細石刃石核	W-16 24	146.0	107.0	1122.044	V	gla	3.98	4.50	2.58	3.98	-	72	-	-	-	41.66	-	
2	第V層文化層	挟入石器	W-16 11	91.2	80.3	1122.620	II	ch	3.95	2.20	1.20	-	-	-	1.50	110	-	7.98	完成	
3	第V層文化層	挟入石器	V-17 11	4.9	97.5	1122.534	II	ch	3.65	2.56	0.80	-	-	-	3.56	64	-	5.90	-	
4	第V層文化層	挟入石器	W-16 16	82.2	23.3	1122.634	II	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.85	-	
5	第V層文化層	細部調整石刃	W-17 10	32.4	70.8	1124.000	II	ch	2.10	2.10	0.50	-	-	-	1.60	82	-	2.69	未端先端切断	
6	第V層文化層	細部調整石刃	X-16 4	9.0	60.0	1122.630	II	ch	4.50	1.60	9.50	-	-	84	2.95	42	-	3.97	完形	
7	第V層文化層	石刃	X-17 2	106.0	138.0	1122.570	II	ch	2.98	1.40	6.90	-	-	88	2.60	26	-	1.67	完形	
8	第V層文化層	細部調整石片	X-16 11	155.0	162.0	1122.570	III	ch	3.90	1.50	1.70	-	-	75	84	3.90	-	4.69	未端先端切断	
9	第V層文化層	細部調整石片	V-17 13	84.0	23.5	1122.537	II	ch	2.50	2.60	0.72	-	-	94	90	-	-	3.82	完形	
10	第V層文化層	細部調整石片	V-16 4	181.0	96.0	1122.230	IV	ob	3.97	2.10	1.21	-	-	84	1.39	21	-	2.43	右側縁折損	
11	第V層文化層	細部調整石片	W-17 19	18.5	6.7	1122.654	II	ch	3.80	4.15	1.50	-	-	90	92	1.80	72	-	24.11	完形
12	第V層文化層	細部調整石片	W-16 1	3.5	148.2	1122.501	II	ch	1.25	1.20	0.51	-	-	-	0.75	60	-	0.66	右側切断	
13	第V層文化層	微細剝離痕付石片	U-16 6	82.5	117.5	1122.336	II	ch	3.55	5.10	0.85	-	-	-	2.70	26	-	11.54	完形	
14	第V層文化層	微細剝離痕付石片	U-16 18	105.0	0.0	1122.935	V	ob	2.70	2.01	0.50	-	-	120	86	-	-	1.85	完形	
15	第V層文化層	微細剝離痕付石片	U-16 14	116.4	115.7	1122.012	V	ob	2.60	2.60	0.70	-	-	75	118	-	-	3.02	完形	
16	第V層文化層	微細剝離痕付石片	W-16 17	85.6	31.7	1122.584	II	ch	2.10	1.60	0.51	-	-	110	82	-	-	1.43	完形	
17	第V層文化層	敲石	V-17 22	14.3	98.9	1122.310	IV	san	8.00	6.00	12.60	-	-	-	-	-	-	160.21	-	
18	第V層文化層	敲石	V-17 8	110.5	81.5	1122.462	II	san	15.60	4.80	2.50	-	-	-	-	-	-	245.09	-	
19	第V層文化層	敲石	V-17 16	133.5	17.5	1122.370	III	an	10.30	5.80	3.00	-	-	-	-	-	-	231.96	-	
20	第VII層L文化層	削器	X-17 6	178.5	144.0	1122.637	II	san	12.40	11.00	4.30	-	-	-	-	-	-	674.94	-	
21	第VII層L文化層	石核	V-16 12	50.0	126.0	1121.770	IV	ch	6.85	3.15	2.10	-	-	-	5.40	70	-	45.24	完形	
22	第VIII層文化層	敲石	V-16 13	115.0	139.5	1121.632	IV	ob	3.80	3.10	1.90	1.60	-	-	-	-	-	14.72	-	
23	第VIII層文化層	台石	V-16 18	119.0	174.0	1120.807	VIII	san	13.80	8.60	4.00	-	-	-	-	-	-	660.34	-	
			V-16 23	167.0	77.0	1121.046	VIII	san	20.00	12.40	6.10	-	-	-	-	-	-	577.35	-	
																		395.60	-	

表6 第VI層L文化層の母岩別資料

番号	器種	登録番号	N-S(m)	W-e(m)	標高(m)	層	石質	器長 (cm)	器幅 (cm)	器厚 (cm)	作業 面長 (cm)	剝離角	打面角	刃部長 (cm)	刃部 断面角 (°)	先端角 (°)	重量 (g)
1	母岩別資料8	ナイフ形石器破片	A-14 44	80.0	111.0	1123.064	VI	ch	1.00	1.04	0.31	-	-	-	-	-	0.27
2	母岩別資料8	ナイフ形石器破片	B-13 114	44.0	121.0	1123.233	VI	ch	1.36	0.95	0.37	-	-	-	-	-	0.26
3	母岩別資料8	ナイフ形石器破片	B-14 128	124.0	10.0	1123.350	VI	ch	0.98	1.04	0.26	-	-	-	-	-	0.18
4	母岩別資料8	ナイフ形石器破片	A-14 71	180.0	160.0	1123.017	VI	ch	3.02	1.57	0.84	-	-	-	-	-	3.30
5	母岩別資料8	剝片	X-16 9	172.0	103.5	1122.460	V	ch	1.68	1.72	0.35	-	85	-	-	-	0.80
6	母岩別資料8	石核	Z-15 23	188.0	49.0	1123.030	V	ch	4.42	2.98	2.70	4.38	-	110	-	-	26.27
7	母岩別資料8	石核	A-14 42	18.0	95.0	1123.128	VI	ch	4.15	3.85	2.23	3.66	-	96	-	-	38.74
	母岩別資料8	剝片	A-14 46	158.0	81.0	1123.199	VI	ch	0.81	1.59	0.38	-	-	-	-	-	0.30
	母岩別資料8	剝片	A-14 89	150.0	76.5	1123.131	VI	ch	1.88	1.51	0.69	-	-	-	-	-	1.73

## 引用参考文献

- 青木 豊・内川隆志・高橋真実編 1993 『柳又遺跡C地点』開田村教育委員会
- 赤澤 威・小田静夫・山中一郎 1980 『日本の旧石器』立風書房
- 上松町教育委員会編 1993 『最中上遺跡』
- 麻生 優・岡本東三 1990 「岐阜県池の原遺跡発掘調査概要」第3回長野県旧石器文化研究交流会発表要旨、8～16頁
- 麻生 優・下川達彌・白石浩之・岡本東三ほか 1991 「岐阜県池の原遺跡調査概要」『日本旧石器時代から縄文時代への推移に関する構造的研究』6～15頁、平成2年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書
- 安孫子昭二・館野 孝・堀井晶子ほか 1980 『多摩蘭坂遺跡』国分寺市教育委員会・恋ヶ窪遺跡調査会
- 稲田孝司 1986 「中国地方旧石器文化の諸問題」岡山大学文学部紀要7、75～94頁
- 稲田孝司編 1988 『恩原遺跡 旧石器人の生活跡を探る』恩原遺跡調査団・岡山県上斉原村教育委員会
- 伊深 智 1971 「西又II遺跡調査ノートより」木曾教育36、52～57頁
- 伊深 智 1971 「西又II遺跡調査ノートより(その二)」木曾教育44、21～24頁
- 上田小県誌刊行委員会 1995 『上田小県誌 第六6巻歴史編上(一)考古』
- 上野 章・岸本雅敏・池野正男・久々忠男 1978 『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』富山県教育委員会
- 上村 武・山田哲雄ほか編 1988 『日本の地質4-中部地方I』共立出版
- 大田 保 1958 「駒ヶ根市赤穂区舟山出土の土器について」『伊那考古』9
- 小田静夫・金山喜昭 1976 「前原遺跡IV中2層文化の礫群」考古学研究23-1、116～119頁
- 小田静夫 1977 「先土器時代の東京-『野川以後』の研究史」どるめん15、32～49頁
- 織笠 昭・松村明子・金山喜昭ほか 1976 『前原遺跡』(I)前原遺跡調査会
- 織笠 昭 1979 「中部地方北部の細石器文化」駿台史学47、81～98頁
- 織笠 昭・金山喜昭・桑野一幸・織笠明子ほか 1980 『鈴木遺跡II 都市計画道路小平2・1・3号線内』東京都建設局・小平市鈴木遺跡調査会
- 織笠 昭 1983 「細石刃の形態学的一考察」『人間・遺跡・遺物』77～104頁、文献出版
- 織笠 昭 1984 「細石器文化組成論」駿台史学60、71～93頁
- 開田村誌編纂委員会編 1980 『開田村誌』(上)長野県木曾郡開田村
- 角張淳一 1989 a 「武蔵野台地の横剥ぎ技法」佐久考古通信49
- 角張淳一 1989 b 「尖頭器の出現と石刃技法の変化」長野県考古学会誌59・60
- 角張淳一 1991 「黒曜石原産地遺跡と消費地遺跡のダイナミズム-後期旧石器時代石器群の行動的理解」先史考古学論集1
- 角張淳一 1992 a 「武蔵野台地V層石器群の分析-VI層石器群の解体と新しい地域性の生成」國學院大學考古学資料館紀要8
- 角張淳一 1992 b 「石材とセトルメントシステム-南関東における旧石器時代遺跡の理解」佐久考古通信54

- 角張淳一・藤波啓容 1986 「武蔵野台地におけるVI～IX層の石器群の一考察」東京考古4
- 角張淳一・藤波啓容 1987 「石刃技法に関する覚書—後期旧石器時代に於ける石器製作構造論に基づく編年試案と方法論序説」東京考古5
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1980 『図録石器の基礎知識』I・II先土器(上・下)柏書房
- 加藤 稔 1975 「越中山遺跡」『日本の旧石器文化』2、112～137頁、雄山閣出版
- 加藤 稔・酒井忠一 1982 「最上川・荒川流域の細石刃文化」『最上川』768～819頁、山形県総合学術調査会
- 金山喜昭 1984 「武蔵野・相模野両台地における旧石器時代の礫群の研究」神奈川考古19、1～34頁
- 金山喜昭 1988 「礫群の機能と用途」古代文化40-8、1～20頁
- 上郷町教育委員会 1981 『姫宮遺跡』
- 神村 透 1970 「開田高原での発掘調査から—有舌尖頭器を求めて—」考古学研究16-3、17～20頁
- 神村 透 1976 「稻荷沢遺跡略報」『木曾』5
- 神村 透・山下生六 1986 『開田高原大原遺跡—押型文土器と石器—』長野県木曾建設事務所・木曾郡開田村教育委員会
- 木島平村教育委員会 1976 『三枚原遺跡』
- 木曾谷第四紀研究グループ 1967 「木曾川上流部の第四紀地質I」地球科学21-1、1～10頁
- 木村純一・竹村健一・松本盆地研木曾谷グループ 1991 「木曾御岳火山周辺の後期更新世の降下火砕堆積物—層序と岩石記載—」地球科学46-6、415～434頁
- 河野広道ほか 1956 『樽岸』市立函館博物館
- 駒ヶ根市教育委員会 1971 『舟山遺跡緊急発掘調査報告』
- 駒ヶ根市教育委員会 1972 『羽場下・舟山—緊急発掘調査報告』
- 小杉 康 1987 「樋沢押型文土器群の研究」『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』79～107頁 岡谷市教育委員会
- 小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦 1967 「御岳火山第一浮石層」地質学雑誌73-6、291～308頁
- 小林武彦・高木信行・藤井登美夫 1977 「御岳火山新时期御岳テフラ層の模式柱状図」軽石学雑誌4、37～41頁
- 小林武彦・大森江い・大森貞子 1975 「御岳火山噴出物の科学的性質」地質調査所月報26-10、497～512頁
- 小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」信濃19-4
- 小林達雄 1970 「日本列島に於ける細石刃インダストリー」物質文化16、1～10頁
- 小林達雄・小田静夫・鳥羽謙三・鈴木正男 1971 「野川先土器時代遺跡の研究」第四紀研究10-4、231～270頁
- 小林達雄編 1982 『壬遺跡1982』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1988 『小馬背遺跡』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1989 『小馬背遺跡1989』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄編 1990 『柳又遺跡A地点 第1次発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄・谷口康浩編 1992 『柳又遺跡A地点 第2次発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室
- 小林達雄・宮尾 亨編 1996 『柳又遺跡A地点 第5次発掘調査報告書』考古学実習報告第28集 國

學院大學文学部考古学研究室

- 小林行雄・佐原 真編 1964 『紫雲出』
- 小松 虔 1976 「栃原岩陰遺跡の押型文土器」『長野県考古学会誌』27、6～15頁
- 小松 虔 1978 「栃原岩陰遺跡と押型文土器出現の時期」『中部高地の考古学』83～93頁
- 酒井潤一 1963a 「木曾谷のローム層Ⅰ」地球科学67、13～20頁
- 酒井潤一 1963b 「木曾谷のローム層Ⅱ」地球科学68、19～21頁
- 酒井幸則ほか 1983 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—下伊那郡高森町地内その2—』  
長野県教育委員会
- 佐原 真 1974 「土器の話(20)」考古学研究20—4、69～76頁
- 塩尻市教育委員会 1985 『堂の前・福沢・青木沢』
- 島田安太郎 1969 「木曾川中流の高位段丘と礫層」第四紀研究8—4、111～119頁
- 島田安太郎 1970 『木曾谷の地質』木曾印刷
- 島田安太郎 1982 『御岳山—地質と噴火の記録—』千村書店
- 下伊那誌編纂会 1991 『下伊那史』第1巻
- 新谷和孝 1994 「上松町お宮の森裏遺跡の調査」『第6回長野県旧石器文化研究交流会—発表要旨—』  
49～53頁
- 新谷和孝 1995 『お宮の森裏遺跡』上松町教育委員会
- 杉原莊介・小野真一 1965 「静岡県休場遺跡における細石器文化」考古学集刊3—2、1～33頁
- 鈴木次郎 1984 『栗原中丸遺跡—県立栗原高等学校建設にともなう調査—』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 鈴木忠司 1979a 「東海地方の細石刃文化について」『日本古代学論集』1～34頁、(財)古代学協會
- 鈴木忠司 1979b 「中部地方南部の細石器文化」駿台史学47、99～119頁
- 鈴木忠司 1983 「旧石器人のイエとムラ」季刊考古学4、37～42頁
- 鈴木忠司 1985 「再論 日本細石刃文化の地理的背景—生業論への視点—」『論集 日本原史』161～  
191頁、吉川弘文館
- 鈴木保彦 1974 「本州地方を中心とした先土器終末から縄文草創期における石器群の様相」物質文化  
23
- 須藤隆司 1991 「先土器時代集落の成り立ち」信濃43—4、1～24頁
- 砂田佳弘 1986 『代官山遺跡—県立長後高等学校建設にともなう調査—』神奈川県立埋蔵文化財センター
- 砂田佳弘 1988 「相模野の細石器」神奈川考古24、31～64頁
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—」神奈川考古24、1～29頁
- 関 孝一 1973 「湯倉洞穴遺跡(第1次)」『日本考古学年報』24
- 関 孝一 1974 「湯倉洞穴遺跡(第2次)」『日本考古学年報』25
- 関矢 晃 1981 『樹形遺跡調査報告書』群馬県勢多郡宮城村教育委員会
- 高木信行 1980 「木曾谷の層序とそれに関連した諸問題」軽石学雑誌6、41～49頁
- 高橋 桂 1977 「三枚原遺跡」『日本考古学年報』28
- 高橋桂編 1990 『小沼バイパス関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ 上野遺跡 大倉遺跡』飯山市教育委員会
- 高根村史編纂委員会編 1984 『高根村史』岐阜県大野郡高根村



- 高森町教育委員会 1980 『広庭遺跡』
- 竹岡俊樹 1989 『石器研究法』言叢社
- 竹本弘幸・百瀬 貢・平林 潔・小林武彦 1987 「新时期御岳テフラ層の層序と時代」第四紀研究25-4、337~352頁
- 橘 昌信 1975 「宮城県船野遺跡における細石器文化」考古学論叢3、1~69頁
- 田中英司 1979 「武蔵野台地II b 期前半の石器群と砂川期の設定について」神奈川考古7、65~74頁
- 田中英司 1984 「砂川型式期石器群の研究」考古学雑誌69-4、1~33頁
- 田中清水 1972 「駒ヶ根市舟山遺跡とその周辺の縄文早期遺跡」『伊那路』16-6
- 谷 和隆 1994 「信濃町日向林B遺跡の調査」第6回 長野県旧石器文化交流会-発表要旨-』18~25頁
- 谷 和隆 1995 「信濃町七ツ栗・日向林B遺跡の調査」『第7回 長野県旧石器文化交流会-発表要旨-』18~27頁
- 谷口康浩 1991 「木曾開田高原柳又遺跡における細石刃文化」國學院雜誌92-2、21~51頁
- 谷口康浩 1992 「開田高原柳又遺跡A地点の発掘調査」『第5回 長野県旧石器文化-交流会要旨-』47~57頁
- 谷口康浩・宮尾 亨編 1995 『柳又遺跡A地点 第4次発掘調査報告書』考古学実習報告第26集 國學院大学文学部考古学研究室
- 辻本崇夫 1984 「細石器文化の遺構」駿台史学60、94~117頁
- 辻本崇夫 1984 「礫群研究の現状と課題」東京の遺跡4、東京考古談話会
- 辻本崇夫 1987 「礫群の形成過程とその意味」古代文化39-7、2~17頁
- 堤 隆編 1991 『中ッ原第5地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 堤 隆編 1992 『第5回長野県旧石器文化研究交流会-発表要旨-』
- 堤 隆編 1994 『第6回長野県旧石器文化研究交流会-発表要旨-』
- 堤 隆編 1995 『第7回長野県旧石器文化 研究交流会-発表要旨-』
- 堤 隆編 1995 『中ッ原第1遺跡G地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 戸沢充則 1964 「矢出川遺跡」考古学集刊2-3、1~35頁
- 戸沢充則 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」考古学集刊4-1、1~42頁
- 戸沢充則・鶴丸俊明 1983 『多聞寺前遺跡II』多聞寺前遺跡調査会
- 戸田哲也 1988 「表裏縄文土器論」『大和のあけぼのII』45~68頁
- 戸田哲也 1994 「表裏縄文土器研究の現状と課題」『縄文時代』5、131~145頁
- 友野良一 1982 「向山遺跡」『宮田村史』
- 中島庄一 1995 「中野市高丘丘陵の旧石器遺跡群」『第7回長野県旧石器文化 研究交流会-発表要旨-』47~51頁
- 中津由紀子・千浦美智子・小田静夫・J.E.キダー 1977 『新橋遺跡』国際基督教大学考古学研究センター
- 長野県教育委員会編 1971 『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧』その1 (昭和25年度~昭和40年度)
- 長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-下伊那郡松川町地内』
- 長野県編 1981 『長野県史』考古資料篇1-1 長野県史刊行会
- 長野県編 1982 『長野県史』考古資料篇1-2 (北東信) 長野県史刊行会
- 長野県編 1983 『長野県史』考古資料篇1-3 (1) (2) (中信・南信) 長野県史刊行会

- 長野県編 1986 『長野県史』通史編1 長野県史刊行会
- 長野県編 1988 『長野県史』考古資料篇1-4 (遺物・遺構) 長野県史刊行会
- 長野県教育委員会編 1974 『飯綱大池B遺跡調査概報』
- 永峯光一・樋口昇一 1967 「長野県唐沢遺跡」『日本の洞穴遺跡』
- 永峯光一・谷口康浩編 1993 『柳又遺跡A地点 第3次発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学研究室
- 中村喜代重・安藤史郎・堤 隆ほか 1984 『一般国道246号(大和・厚木バイパス)地域内遺跡発掘調査報告』II大和市教育委員会
- 中村孝三郎 1964 『室谷洞窟』長岡市立科学博物館
- 中村由克 1990 「めずらしい旧石器時代の炉跡」博物館だより25、1-2頁、信濃町立野尻湖博物館
- 橋本勝雄 1989 「東日本の細石器文化-東北・北陸・中部高地・関東・東海地方の研究動向」考古学ジャーナル306、12-21頁
- 服部実喜 1981 「武蔵野台地における礫群の研究の現状-最近の研究成果を中心として-」石器研究2、25-28頁
- 埴 静夫 1976 「大谷寺洞穴遺跡」『栃木県史』資料編、141-168頁
- 巾 隆之 1988 「石畑岩陰遺跡」『群馬県史』資料編1、683-695頁
- 原 寛・紅村 弘 1958 「岐阜県花の湖遺跡略報」『石器時代』5、1-14頁
- 原 寛・紅村 弘 1974 『花の湖遺跡調査報告書』坂下町教育委員会
- 樋口昇一 1958 「長野県西筑摩郡開田村菅沢遺跡調査概報」信濃10-7
- 樋口昇一・森嶋 稔 1959 「木曾開田高原の無土器文化遺跡」信濃11-11、51-60頁
- 樋口昇一 1961 「木曾柳又遺跡第1次調査について」信州ローム7、3-9頁
- 樋口昇一・森嶋 稔 1962 「木曾開田村大原遺跡の石器」信濃14-11、15-20頁
- 樋口昇一・森嶋 稔・小林達雄 1965 「木曾開田高原における縄文以前の文化」信濃17-6、59-70頁
- 樋口昇一・森嶋 稔 1967 「長野県西筑摩郡柳又遺跡」日本考古学年報15、73-74頁、日本考古学協会
- 樋口昇一ほか 1968 「御岳高原観光開発地域」『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書-昭和43年度-』67-78頁
- 樋口昇一・桐原 健・宮下健司 1994 『太古のロマン 信州の大遺跡』(榊郷土出版社)
- 広瀬昭弘 1981 「北信濃小佐原遺跡の表裏縄文土器」信濃33-4、42-54頁
- 広瀬昭弘 1982 「小佐原遺跡」『長野県史』考古資料篇1-2(北東信)、68-72頁、長野県史刊行会
- 広瀬昭弘 1995 「表裏縄文土器研究の現状と課題」『長野県考古学会誌』75・76、77・78頁
- 藤井昭二 1990 「日本海沿岸の更新世以降の古環境の変遷」第四紀研究29-3、173-182頁
- 藤沢宗平 1951 「長野県西筑摩郡末川古屋敷における小竪穴および出土遺物について」日本考古学協会第8回発表要旨、3-4頁
- 藤沢宗平 1955 「長野県西筑摩郡古屋敷原遺跡」日本考古学年報3、59-60頁、日本考古学協会
- 藤沢宗平 1955 「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡」日本考古学年報4、53頁、日本考古学協会
- 藤沢宗平・小林国男 1956 「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡の無土器文化」日本考古学協会第18回発表要旨、24-25頁
- 藤沢宗平ほか 1956 「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡特集」信州ローム1、1-14頁
- 藤沢宗平 1956 「長野県西筑摩郡古屋敷遺跡」日本考古学年報9、80頁、日本考古学協会
- 藤本 強 1982 「常呂川流域の細石刃」北海道考古学18、1-21頁

- 藤森栄一 1933 「山國夏信」考古学4-6、173~180頁
- 保坂康夫 1985 「先土器時代の礫群の分布とその背景」山梨考古学論集I、7~56頁、山梨考古学会
- 保坂康夫 1987 「礫群使用の非日常性について」古代文化39-7、18~35頁
- 保坂康夫 1989 「礫群とブロックの関わりについて」山梨考古学論集II、39~67頁、山梨考古学会
- 保坂康夫 1992 「『礫群』は何を語るか」考古学ジャーナル351、19~24頁
- 松島 透 1955 「長野県下伊那郡立野遺跡」『日本考古学年報』3
- 松島 透 1957 「長野県立野遺跡の押捺文土器」『石器時代』4
- 松村 瞭 1911 「四千尺の高原にて石鏃を採集す」人類学雑誌27-6、374~377頁
- 松本盆地研木曾谷サブグループ 1985 「昭和59年度長野県西部地震による地盤災害と御岳山南麓の  
第四系(その1)」地球科学39-2、89~104頁
- 宮崎朝雄・金子直行 1989 「井草式土器及び周辺の土器群について」『研究紀要』5、1~69頁、埼玉  
県埋蔵文化財事業団
- 宮崎朝雄・金子直行 1995 「井草式土器及び周辺の土器群についてII」『縄文時代』6、1~3頁
- 宮下健司 1978 「矢柄研磨器の再検討」信濃30-4、53~77頁
- 森川昌和ほか 1979 『鳥浜貝塚-縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1-』
- 森嶋 稔 1959 「開田高原のアルケオロジカル散歩」木曾教育13、31~37頁
- 森嶋 稔 1983 「柳又遺跡」『長野県史』考古資料篇1-3(1)(中信)長野県史刊行会
- 森嶋 稔 1985 「中部高地の楔形細石刃核」信濃37-11、158~168頁
- 森山昭雄 1989 「木曾川上流の山地地形と地殻変動」愛知教育大学研究報告38、1~19頁
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における石器群の変遷について」神奈川考古1、1~30頁
- 矢島國雄・鈴木次郎 1978 「先土器時代の石器群とその編年」『日本考古学を学ぶ』(1) 154~182頁、  
有斐閣
- 山形真理子 1991 「多縄文土器編年に関する一考察」東京大学文学部考古研究室研究紀要10、277~  
312頁
- 山下英樹・鈴木忠司・保坂康夫 1985 『静岡県磐田郡豊田町広野北遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 山下 昇・紺野義夫・糸魚川淳二ほか編 1988 『日本の地質5-中部地方II-』共立出版
- 山内清男・佐藤達夫 1967 「下北の無土器文化-青森県上北郡東北町長者久保遺跡発掘報告-」『下北  
自然・文化・社会』98~109頁、九学会連合・下北調査委員会、平凡社
- 山内清男 1969 「縄紋草創期の諸問題」MUSEUM224、4~22頁
- 山ノ内町教育委員会 1985 『上林中道遺跡』
- 山本 薫 1989a 「縄文時代の石器に使われた岩石および鉱物について-石器製作における石材の選択  
とその背景」地学雑誌98-7、79~101頁
- 山本 薫 1989b 「縄文時代の石器製作における石材の利用について」筑波大学先史学・考古学研究1、  
45~96頁
- 由井茂也・吉沢 靖・堤 隆 1990 「信濃野辺山原の細石刃文化-中ッ原5B地点の細石刃文化資  
料から-」古代文化42-11、1~18頁
- 吉崎昌一ほか 1959 『立川 北海道磯谷郡蘭越町立川遺跡における無土器文化の発掘調査』市立函館  
博物館紀要6
- 和田村教育委員会 1975 『男女倉』

## 発掘調査参加者・関係者一覧

### 考古学実習生

池田比呂子 岩名健太郎 宇賀神菜採 宇田川拓也 梅沢彩子 及川真紀 大橋雄高 織田拓男 風間春芳 片岡治子 堅木宜弘 神谷静香 川口敏生 木内裕子 菊池政幸 桐山絵美子 久木田照子 倉石広太 黒島則和 今勝行 佐々木純 設楽政健 島井宏明 白石利恵 杉山友章 杉若恭子 関宇陽 関塚修 関亨 高橋泰子 瀧純也 竹谷淳 永井伸明 中里慈 西口亨 西山量平 庭野薫 野村忠司 平吹靖 長谷川員広 羽山尚彦 星宏之星 由香 宮田千里 宮本雅通 谷地亜希子 山田美和 山本和弘 山本克 和田秀一

### 発掘特別参加者

安西 宏 岩越宏典 笠井洋祐 (以上國學院大學学生) 和久裕昭 (以上國學院大學大学院学生)

### 整理参加者

岩名健太郎 宇賀神菜採 及川真紀 風間春芳 片岡治子 堅木宜弘 木内裕子 菊池政幸 佐々木純 設楽政健 島井宏明 杉山友章 関亨 永井伸明 野村忠司 羽山尚彦 平吹靖 星宏之星 由香 宮本雅通 谷地亜希子 山田美和 山本克 和田秀一

### 発掘調査協力者・機関

村上和幸 (柳又A地点地主) 上村秀夫 (柳又B地点地主) 末岡熙章 (市邨学園理事長) 開田村教育委員会 開田村立考古資料館 長野県教育委員会 長野県埋蔵文化財センター 学校法人市邨学園 たけみ商店 嶽見旅館 國學院大學博物館学研究室 國學院大學考古学資料館 青木豊 植田真 内川隆志 粕谷崇 加藤有次 神村透 桐原健 下畑睦美 新谷和孝 嶽見盛三 千村博男 樋口昇一 古畑正美 松原和也 丸山敬一郎 森鳴稔 山下生六 山本哲也

### 見学者

青木正洋 越前慶祐 岡崎友子 岡稔 小田切守正 河西健二 粕谷崇 加藤里美 神村透 木下道子 桐原健 小池考 小林理恵 小松学 酒井艶子 下平博行 新谷和孝 杉山真理 高橋真実 千葉剛成 友野良一 中島庄一 樋口昇一 松原和也 松下末松 丸山敬一郎

(五十音順・敬称略)

# 報告書抄録

ふりがな	やなぎまたいせきえーちてんだいろくじはくつちようさほうこくしょ								
書名	柳又A地点第6次発掘調査報告書								
副書名	—								
巻次	—								
シリーズ名	國學院大學文学部考古学実習報告								
シリーズ番号	第29集								
編著者名	(編集) 永峰光一・宮尾 亨 (著者) 宇賀神栄採、及川真紀、風間春芳、片岡治子 堅木宜弘、木内裕子、菊池政幸、佐々木 純、設楽政健、杉山友章、関 亨、永井伸明、野村忠司 羽山尚彦、平吹 靖、星 宏之、星 由香、宮本雅通、谷地亜希子、山本 克、和田秀一								
編集機関	國學院大學文学部考古学研究室								
所在地	〒150 東京都渋谷区東4-10-28 TEL 03(5466)0247・0248								
発行年月日	西暦1996年3月20日								
ふりがな	ふりがな		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地名		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
やなぎまたいせきえーちてん	ながのけんきそくぐんかいだむらにしの				35°	137°			
柳又遺跡A地点	長野県木曾郡開田村西野6503-1		20427	21	55°	35'	19940906~	32m <sup>2</sup>	学術発掘調査
柳又遺跡B地点	長野県木曾郡開田村西野				31°	27"	19940915	16m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
柳又遺跡A地点	遺物包含地	旧石器時代  第Ⅷ層文化層  第Ⅵ層L文化層  第Ⅴ層文化層  縄文時代 草創期			石器(敲石、台石)2点、 他に礫  石器(削器等)2点 他に剥片・碎片、礫  石器(削片系細石刃石核、抉入石器等)19点 他に剥片・碎片、礫  石器(石鏃)3点 隆起線文系土器6点(2個体) 表裏縄文系土器21点(6個体)				
柳又遺跡B地点		旧石器時代 縄文時代			石器(細石刃等)3点、他に剥片・碎片、礫 石器(有舌尖頭器)2点				